

演劇会議

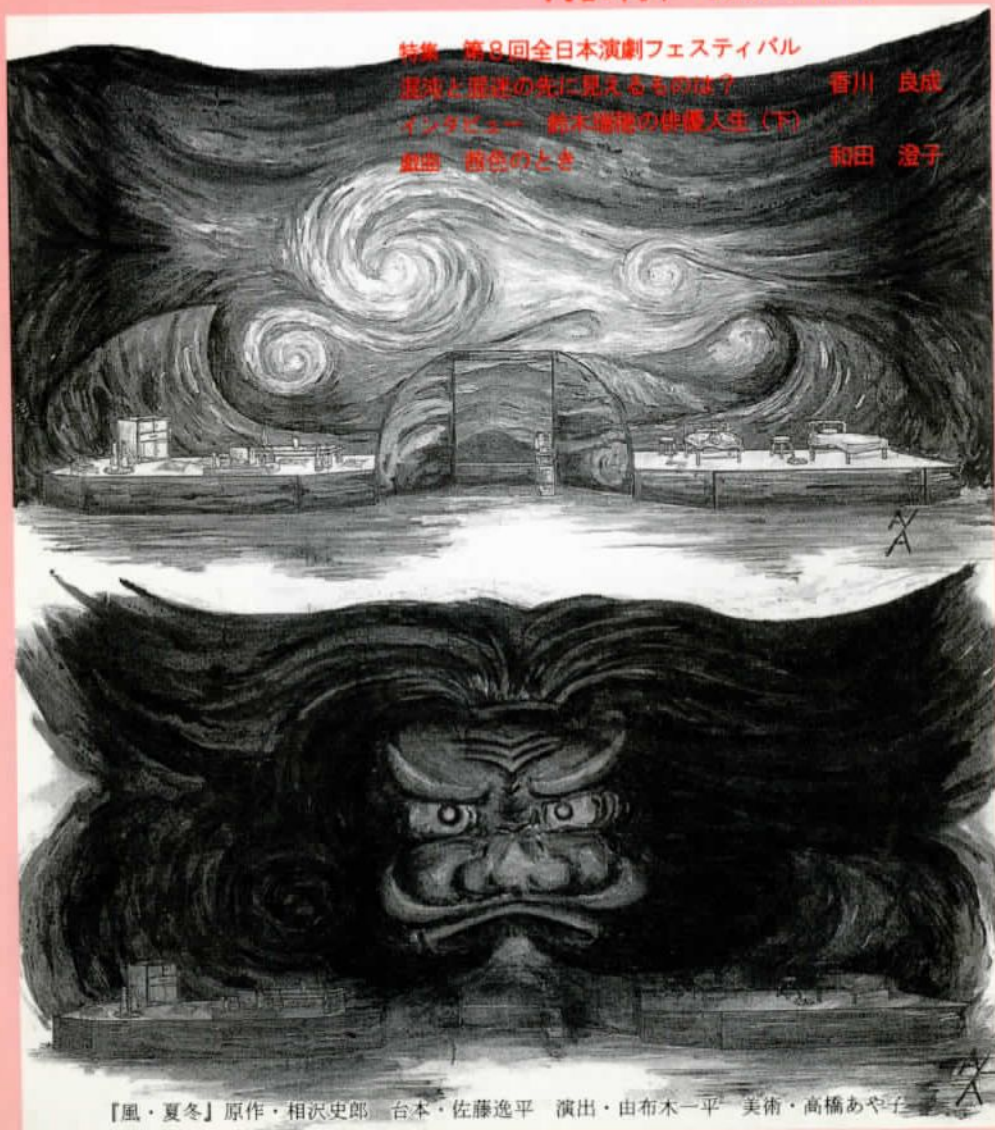
VOL.104 2000年11月

特集 第8回全日本演劇フェスティバル

混沌と混沌の先に見えるものは? 香川 良成

インタビュー 鈴木博徳の俳優人生(下)

観劇 秋色のとき 和田 澄子



【風・夏冬】原作・相沢史郎 台本・佐藤逸平 演出・由布木一平 美術・高橋あや子



壮大なスケールで甦る
江戸時代最大の農民一揆

東京・名古屋・大阪は

12月23日(祝)よりロードショー

前売り鑑賞券1500円発売中

原作 こばやしひろし
監督 神山征二郎
主演 緒形 直人

芸術文化振興基金助成事業
大阪芸術文化振興事業
大阪市助成公演

大阪新劇団協議会プロデュース合同公演
大阪自立演劇連絡会議第8回合同公演

1995こうべ曼陀羅

作/清水 巖 演出/森本景文

- 公演日 2001年2月16日(金)~18日(日)
- 会場 エル・シアター(大阪府立労働センター)京阪天満橋駅西へ7分
- 料金 前売¥3000/¥2000
当日¥3500

出演劇団 関西芸術座・劇団息吹・劇団大阪・大阪府職員演劇研究会
劇団きづがわ・劇団未来・座わだち

舞

台



◇テアトルハカタ
『ギネマの天地』
6月17・18日
井上ひさし／作 野尻敏彦／演出



◇劇団未来
『和太鼓でつづる二人爺』
6月30日〜7月2日
相沢史郎／作 和田澄子／潤作
植田耕作・森本景文／演出



◇演劇集団和歌山、劇団いこら
公募市民
『KAYUの葉とふゆ』
7月9日
楠本幸男／作 栗原省／演出

公

演

劇団埼玉 第75回公演

『風・夏冬』

作／相沢史郎 上演台本／佐藤逸平

演出／由布木一平

美術 高橋あや子

2000年 7月浦和 8月岩手、銀河ホール
9月 三百人劇場公演

表紙のことば

由布木一平

3年前、初対面の“ソウル”で、いずれは仕事をと、約したことの結果が、今回の舞台美術である。日常をまったく粧うことのない、働きの者で、健康で、しかも美形である20代。新進の舞台美術家のデビュー作とともに創れた喜びがある。劇団の台所事情からいえば、かなりの無理があつたが、“芝居は人間の最高のぜいたく”、金の問題ではなからう。この若鶏にぜひ応援を!!

この作品を作るにあたって

2つの別々な話が、同じ空間の中で交互に演じられる装置を作り、かつそれぞれの特徴を表現しなければならぬという難しさがありました。フリーになって最初の作品です。今後さまざまな作品と出会っていきたいと思います。

高橋あや子

舞 台

◇劇団はぐるま
『孫悟空』

7月21〜23日
呉 承恩／作 いずみ漢／脚本
汲田正子／演出



◇劇団名芸「とも劇場」

『冒険者たち』

7月21〜23日、8月19・20日
小田健也／作 服部順一・長田芳枝／演出



◇反核舞台人の集い

(協力) 劇団名古屋・演集・名芸

『銀河鉄道 2000』

8月11〜13日
栗木英章／作 久保田明／演出



公 演

台

◇劇団やまなみ

『ザ・ニッポン株式会社』

7月23日
河野通方／作 梅津幸三／演出



◇劇団潮流

『紙芝居 ブンナよ木からおいてこい・映像と池下雅子の一人語り』

8月19日
水上勉／作 平田一紀／演出



◇青年劇場

『島清 世に敗れたり』

9月15日〜10月2日
松田章一／作 松波喬介／演出



公 演

舞 台

◇劇団海鳴り

『鉄道員』

9月9日

浅田次郎／原作 山本忠利／脚本
神山 昭／演出



◇関西芸術座

『おかしな二人』

9月13〜17日

ニール・サイモン／作 亀井賢二／演出



◇劇団かすがい

『煙が目にしみる』

9月22・23日

鈴置洋孝／原案 堤泰之／作
門田 裕／演出



公 演

舞 台

◇演劇集団和歌山

『馬』

9月15日

阪中正夫／作 楠本幸男／演出



◇劇団コーロ

『カモメに飛ぶことを教えた猫』

9月8・9日

ルイス・セアルベダ／作 河野万里子／訳
玉野井直樹／演出



公 演

舞 台

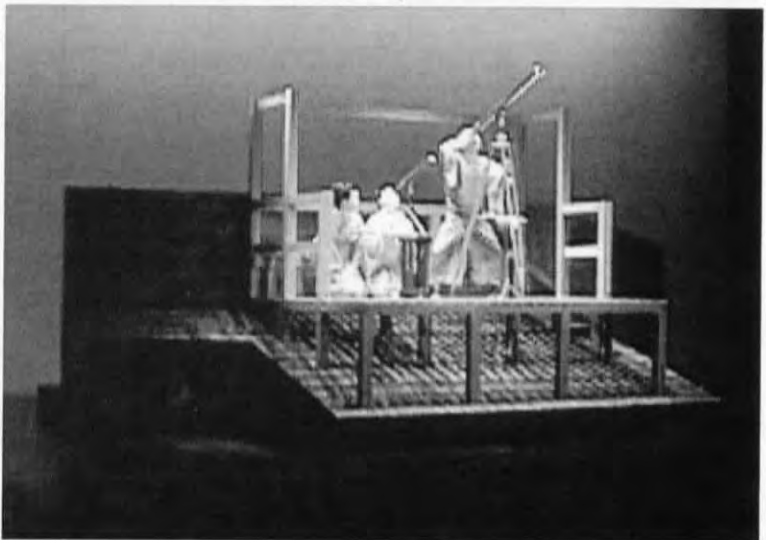
◇劇団埼玉

『風・夏冬』
相沢史郎／作 佐藤逸平／上演台本
由布木一平／演出



◇劇団やませ

『わが内なるラビュータ』
梶谷伸夫／作 加藤健太郎／演出



◇劇団馬山

マタン劇『春香伝』
作者不明 文 鎧根／演出



舞 台

◇劇団自立の会

『おんじょうり』
さねとつあきら／原作
ふじたあさや・後藤富美／脚色
森田 有／編作 谷田昌蔵／演出



◇劇団大阪

『そしてあなたに逢えた』
近石綾子／作 熊本 一／演出



◇ぶじょう座

『お婆さんと酒と役人と』
ふじたあさや／作 川村光夫／演出



◆ もくじ ◆

グラビア (舞台)	1
2000年11月中旬以降の公演	8
特集 第8回全日本演劇フェスティバル	10
地域演劇の新しい流れに身を浸して	石垣 政裕 11
地元の座談会 すばらしい芝居に感動	
400人をこえる歴史にのこるフェスティバル	18
舞台をみて 劇団埼玉【風・夏冬】	栗木 英章 24
劇団やませ【わが内なるラビュータ】	高木 豊平 24
劇団馬山 マダン劇【春香伝】	丸子 礼二 25
劇団自立の会【おこんじょうり】	内田 薫 25
劇団大阪【そしてあなたに逢えた】	猿渡 公一 26
岩手ぶどう座【お婆さんと酒と役人と】『めくらぶんど』	小笠原町子 26
(投稿) 幸せになれたフェスティバル	荒川 秀樹 28
リアリズムシリーズ⑮ 混沌と混迷の先に見えるものは?	香川 良成 30
ロシア演劇レポート⑱ ペレストロイカの頃	桜井 郁子 38
北京レポート⑤ 中国演劇の情報—上海編—	坂手日登美 45
インタビュー 鈴木瑞穂の俳優人生 (下)	51
北から南から (劇団通信)	60
劇評 劇団蒼生樹【海の沸点】	室野 定子 76
東京芸術座【夜明けの街】	佐藤 逸平 78
劇団名古屋【海の沸点】	佐野 秀明 81
演劇集団和歌山【馬】	井上満寿夫 84
劇団潮流【乱れて熱き吾が身には、藤村・春】	神沢 和明 86
劇団京芸【文珠丸助】	” 88
劇団どろ【コミュニケーションの人々】	今泉おさむ 90
劇団かすがい【煙が目にしみる】	” 92
戯曲 【茜色のとき】	和田 澄子 94
(投稿) 【浮標】と丸山定夫	神谷 量平 121
若者たちのこと	梅津 幸三 124
情報BOX	125
ハッカのまち演劇祭/125	第2回東・西リ連合同作家会議/126
京芸50周年レセプション/130	西会議総会・仲議長あいさつ/132
劇団潮流40周年パーティー/138	

2000年11月中旬以降の公演

●劇団通信の中から11月中旬以降の公演や行事をまとめましたので、都合のつく方はぜひ観劇しあってください。
●公演予定については、公演日・会場・タイトル・作・演出を劇団通信にはっきりとお書きください。

公演日	会場	劇団	公演名	作	演出
11/11・12	横浜市・県立青少年センター	京浜協同劇団	西遊記		加藤直/演出
11/25・26	川崎市・エボック中原	演劇集団石ころつ	黙阿弥オペラ		井上ひさし/作 境野修次/演出
11/17~18	深川江戸資料館小劇場	劇団はぐるま	円空になったパパ		林大輔/作 坂田正子/演出
11/17~19	岐阜市文化センター	劇団上野市民劇場	僕のメリーゴアラソンド		近石裕子/作 杉森正美/演出
11/18~19	前田教育会館蕉門ホール	劇団やませ	九戸政実		梶谷伸夫/作 栗谷川洋/演出
11/18・19	八戸市公会堂文化ホール	劇団夜明け	米泣く村に米降る街に		栗木英章/作 片野耕治/演出
11/19~26	けいこ場	劇団名芸	昨日・今日・明日		田辺典忠/作 伊藤一郎/演出
11/24~26	名芸平針小劇場	劇団支木	鉄道員—ぼっぼや—		浅田次郎/原作 山本忠利/脚色
11/25・26		演劇集団あり	野分立つ		川崎照代/作
11/26		劇団静芸	翼をください		ジェームス三木/作・演出
12/2・3	サールナートホール	青年劇場	”		
12/17・18	かめあり・リリオホール		”		
12/19	神奈川県立青少年センター		”		
12/21~24	新宿・朝日生命ホール		”		
1/19・20	森之宮ピロチイホール		”		
1/27・28	神戸アトビレッジセンター		”		
2/4	県民小劇場		”		
2/24	明石市民会館		”		
3/3	うはらホール		”		
3/4	すずらんホール		”		
4/4	西区民センター		”		

第8回全日本演劇フェスティバル

岩手県
湯田町

3年に1度開催している全日本演劇フェスティバルが、8月25日〜27日の3日間、岩手県湯田町の銀河ホールを中心に行われました。今回は、従来湯田町で行っていた地域演劇祭と併催する形になりました。

参加者は湯田町関係を除き392人、過去最高でした。出演した劇団は、劇団やませ(青森)、劇団埼玉

(埼玉)、劇団自立の会(京都)、劇団大阪(大阪)、地元の岩手ぶどう座、韓国から招いた劇場馬山。

このほか、銀河ホールが育てた演劇講座の研究生、高齢者と障害者による演劇も加わり、大道芸や講談など多彩な内容となりました。またUホールでは舞台美術展をひらき喜ばれました。



ホール前で



特別講座 川村光夫氏



左、Uホール 右、銀河ホール

地域演劇の新しい流れに身を浸して

第8回全日本演劇フェスティバルの報告にかえて

石垣 政裕
(劇団 仙台小劇場)

わたしたちはフェスティバルニュース発行のため一足先に湯田に着した。「ここに、ニュースのネタになる資料を集めておいたから」実行委員副事務局長の中野健氏は袋を一つさし出し、説明を始めた。

湯田の銀河ホールの運営のすばらしさはすでに、演劇会議や他の演劇関係のニュースで全国に知られている。今回のフェスティバルには「銀河ホールに一度来てみたかった」と訪れた参加者もいたかもしれない。だが、運営された結果を評価はできないが、地域の演劇人ならだれでも手に入れたらと思うだろう、このホールを支えている源泉を私たちはまだ見つけていない。8月25日から27日までの3日間行われた全日本演劇フェスティバルは、最終的な参

加人数が462人。私たちはニュース発行という実務のため、残念ながらすべてに目を通すことはできなかったが、実行側と参加者側の宙ぶらりんの位置にいたのを利用し、その源泉からの流れを少しでも垣間見ようと試みた。なお、フェスティバルの写真はインターネットでみることもできる。(http://home3.hitway.ne.jp/rinet/photo/)

1. 参加人数

3月20日 中野は、東京からの帰り、仙台で筆者に会った。全国の劇団の名簿を手にし、全部に案内を配るつもりだと話す。全り演議長団のひとり中野が常駐に近い形で、湯田町で準備を行っていた。全り演関係者は、7月24日段階で参加申し込み

が234人、8月12日で255人であった。最終参加者が全り演の東西会議あわせて275人なので、20人が増えていることになる。参加未確定の劇団への確認、宿の変更・手配など銀河ホールの新田満氏と中野氏の両事務局次長が忙殺されていたことは予想できた。東・西会議の参加人数は目標人数を大きく上回り、

フェスティバル参加者

劇団	東会議	31劇団	193名
	西会議	12劇団	82名
	未加入劇団	5劇団	46名
	個人		18名
	劇団馬山		17名
	スタッフ		7名
湯田町	スタッフ		40名
テント市	スタッフ		30名

また、町の人口40000人の10%に匹敵する演劇人が集まったわけである。未加入劇団の参加も収獲だった。当日の観客を入れれば、この町から「演劇が加熱していった」といってもよい。

2. 開幕前夜

2000年の暑い夏は、日本で有数の豪雪地帯でも変わらない。30度を超える暑さの中で演劇フェスティバルは開幕を迎えることになった。

私たちの到着した開幕前日の24日は劇団埼玉の舞台稽古が行われている最中だった。舞台を次々に使っていくためには、照明や道具など器具の使い回しや、リハーサルスケジュールの調整が最も難しい。創造に一步も退かぬ人たちを相手にするわけだから、毎年地域演劇祭などを開いている銀河ホールのスタッフといえども、開会を前にもっとも緊張し

ている。

舞台監督の内山勉氏は、今回のフェスティバルだけでなく、このホールでの大きなイベントの時には必ず活躍している。「劇場付属の」舞台監督ではないのだが、劇場を知り尽くした舞台監督の力がこのようなフェスティバルの成功の鍵を握っていることを教えてくれた。照明の千田氏もその一人である。舞台会社から派遣されているというが、まるで自分が主催者のような使命感で、殺気立って仕込みをする各劇団の裏方の要求を「しなやかに」こなしていく。新田満氏の話では、「役場の職員ではないんだが」声をかければ集まってくるのだそうである。物理的なホールの何倍ものキャパを持った、生きたホールがある。

埼玉の稽古の後、明日開幕だというのに、夜遅くまで演劇講座受講生

はない。

一方では、続いて上演された演劇講座受講生の「土神裁判」のように、中学生からOLまでの若い人たちにも演劇の場を提供している。彼らが、装置・照明などは一流のスタッフの力を借りて舞台をつくっているのは、なんともうらやましい。これらの活動が、全リ演の活動にも影響を与えることは間違いないので、この流れがどのような広がりを見せるのか注視していきたい。

開幕では、フェスティバル開催に尽力してくださった菅原町長の挨拶があり、こばやし議長の挨拶があった。開幕の主役は町民憲章。川尻小学校の児童生徒と町会議員、町役場の課長が町民憲章を歌うのである。プレ企画の二つの舞台と併せて考えると、これほどまでに地域が一体となっていることを示している演出はないだろう。私たちは確かに歓迎さ

の稽古が行われていた。事務局次長の中野氏は、楽屋の事務局のデスクから舞台の演出に戻っていった。

3. プレ企画

開会に先立って、プレ企画として地元の二つの舞台が上演された。

高齢者・障害者の演劇「植物医師」では会場が舞台と一体になった。平和街道高齢者障害者演劇ネットワーク事業と銘打って岩手県の湯田町・北上市・沢内村と秋田の山内村の高齢者・障害者の方々が舞台に立つ。宮沢賢治の「植物医師」を自分たちの言葉で舞台をつくる姿は、一人一人が出てくるたびに、拍手をしたくなる。賢治が、あの時代の中で、農民や生徒たちを集めて実現したかったことを現代に当てはめると、明らかにこの舞台、この劇場に通じるものがある。なにか私たち演劇人には、これまでの舞台が若者の方ばかりを

れているのだろうか、むしろ開幕から地域演劇の風にあおられっぱなしなのであった。

セレモニーに続いて宝井琴嶺さんの講談が演じられた。テレビではお目にかかることはあっても生の舞台は初めてという観客も多かったらしい。メリハリの利いた語りは、「一人芝居としてみてもすごい」という感想があり、かなり好評であった。

4. それぞれの舞台へ

——劇団埼玉「風・夏冬」

開幕のセレモニーに引き続き、相沢史郎原作、佐藤逸平上演台本、由布木一平演出による劇団埼玉の力作「風・夏冬」が上演された。舞台では行方不明になっていた男が路上生活の果てに死んだという知らせが届いたところからはじまる物語（物語A）と老人ホームの2人の老人の物語（物語B）と二つのエピソードが



演劇講座の受講生による公演



開会式 湯田町町民憲章の賛歌

夏と冬の季節の移ろいの中で進行していく。すでに、北上市での劇団北芸の舞台を見た観客もいて、地元の言葉で上演される舞台に食い入っていた。まさに、未成熟な福祉社会の中で、どう私たちは生き抜いていかなければならないのか、「こんなところで死ねないっ！」という叫びは、ストリートに観客の中に響いてくる。2つのエピソードが、いっとう絡み合い、うねり合うのかという点にだけ、観客には少しとまどいがあったものの、この「風・夏冬」と後述する劇団大阪の舞台とで最初と最後を飾るプログラムは特別のメッセージを参加者に伝えていた。

5. 劇団やませ

「わが内なるラビユータ」

2日目の午前中は八戸の劇団やませによる「わが内なるラビユータ」が上演された。数年前の東日本演劇

ゼミナールのときにも、私たちはやませの舞台を見ることができたが、今回の「わが内なる……」も地域が色濃く反映された舞台であり、一つもひるむことなく胸を張って地域を誇った舞台であった。舞台は何度も演じ込まれただろう。科白が鋭くそぎ落とされていた。地元の人からは「夢があつてよかつた」、参加者からは「やませのような芝居づくりも演劇の本質に触れていくものなのかなとも思った」という感想を得た。

さて、私たちが馬山「春香伝」の仕込みを行っている頃、屋外では大道芸が演じられていたはずである。京浜協同劇団の

- ・バナナのたき売り
- ・箱回し(ひとり人形芝居)
- ・腹話術「ゴローちゃん」
- ・和太鼓「銭太鼓」
- ・車人形「どじょうすくい」

これらは雨を気にしての上演だった。また、銀河ホール2階の会議室では・宝井琴嶺さんの講演
・室野定子さん(京浜協同劇団)の警女唄
が参加者を楽しませた。

6. 劇団馬山「春香伝」

劇団馬山はフェスティバルに先立ち、仙台で「春香伝」を上演した。1100人の専門学校生の観客を湧かせ、自信を持って湯田入りしたのだが、文演出は湯田に入ってからも念入りに時間をかけて稽古をしていた。馬山の装置・小道具のある部分は予めFAXのやりとりで仙台小劇場が製作していたが、細かいところでの認識のズレがあり、調整にとまどった。スタッフのそれぞれの部分には仙台公演の時のまま仙台小劇場が補助に張りついたため、湯田の仕込みは比較的スムーズに進んだのか

もしれない。

一方、全体の進行を考慮する舞台監督部と、仙台で舞台稽古が充分とれなかったこともあって、会場前の舞台稽古に緊張する馬山の指導部の両方の主張が分かるだけに、調整が必要だった。それぞれの国、それぞれの地域には、それぞれの舞台に関する認識があり、それらをどうすり合わせていくのが国際的な共同作業には大切であることが身にしみて分かった。

「春香伝」は織茂秀子さんの訳によるあら筋をあらかじめ配布していたのが役に立った。愛を誓い合ったはずのイ・トリヨンが政府高官となつて都に上る。残されたチュンヒヤン(春香)は貞節を守つたため、悪徳官吏によって投獄される。やがてイ・トリヨンが地方への密偵となつて下り、チュンヒヤンと再会するという物語で、韓国では有名な古典劇

である。文演出は入団して2・3年目という若い俳優を使い、エネルギーシユな、ある時は情緒たつぷりな舞台をつくり上げた。日本語を随所に使い、ユーモアを交えたことも観客の「ノリ」を支えた。実際にプロとして活動している役者などは数人しかいないときいたが、舞台の創造への執念は学ぶべきところがたくさんあった。

7. 自立の会「おこんじょうるり」

日本の伝統芸能を取り入れた舞台。この舞台は10年も演じ続けているという。主人公の「おこん」は五代目ということである。

中央に染色布を下げただけの簡素な舞台で展開される舞台は、観客に好評であった。権力へのあからさまな批判を盛り込んだ後半の解釈に関しては意見が分かるところに違いない。

8. ぶどう座「めくらぶんど」

「お婆さんと酒と役人と」

ぶどう座の公演は、銀河ホールから少し離れた……この場合は銀河ホールが「ぶどう座から少し離れたところにある」と言おう……劇団岩手ぶどう座の本拠地での公演があった。私たちニュース班は残念ながら見ることができなかったが、ここではニュースにとりあげた川村光夫さんの言葉を載せる。

「今回の公演では、33年ぶりにカムバックしたもりゆうこさん。結婚、出産、育児を経て33年ぶりにぶどう座に帰ってきました。めくらぶんどは東大阪の息吹ほか2、3カ所で公演後、20年ぶりの上演となつています」「33年ぶりにカムバック」などということは地域にある劇団「だからこそ」できるのかもしれない。生活と文化とが、地域と人生と演劇と

がここでは融け合っている。

9. 大交流会

今にも落ちてきそうな空模様を警戒して、野外の大交流会は、町民体育館へ移動。町の人たちが温かく私たちを迎えてくれた。出店があり、



大交流会 地元の「鬼剣舞」

太鼓があり、みかぐらがあり、鬼剣舞があった。初めて会う人たちではないような町の人たちのこまやかなもてなしこそ本当の歓迎であった。作問しのぶ・森下法雄のコンビで司会が進んだが、鬼剣舞はやはり圧巻だった。東北に住む私たちすら初めて目にしたのだが、山伏の修験者の呪法に起源を発するといわれる舞は、大地を力強く踏みしめる仕草が、ある意味では地域の文化を確固たるものにする演劇の力強さと穿つて例えている自分がいた。

10. 劇団大阪「そして、あなたに逢えた」

わたしたちの社会はいま、確実に高齢化社会へとなだれ込んでいる。介護は、「個」が成熟・自立しない社会の中で、今後どう実現されていくのだろうか。どうやって、政争で使われる言葉だけの「福祉」を抜け

湯田の、この町でのフィナーレにふさわしい舞台であった。

11. 閉会そしてまとめ

反省がないわけでもない。今回の運営は湯田町のスタッフにかなりおんぶしていた。奥羽や東北ブロックがもう少し動ける場所があったかもしれない。そんなことを考えているうちに、8月27日13時、予定通り、フェスティバルは終了した。閉会式に映し出された新田満氏の手のひらには、明らかに汗がにじんでいた。マジックペンで書いた「ありがとう」を握りしめる。それは彼とともに準備してきたスタッフのその汗をも握りしめていた。

すでにふれたような地域文化の拠点としてのぶどう座とそれを率いてきた川村氏、「あそび人」を自称しながらも次々と企画を実行にうつしていく新田氏、演劇の底辺を確実に



右、中野健さん 左、新田満さん

広げていく創造者としての中野氏、どんな舞台でも完成させてしまう内山氏。そこから彼らの魅力にとりつかれた若いスタッフが流れ出ていく。そして、旅館や酒屋さんまで含めて、町がそこから流れてくる演劇というおいしい湧水を大切に受け継いでいる。私には、湯田に生じたこの現象を「演劇の一つの成功例」と記述するにはためらいがある。これは例なんかじゃないんだ、これが本流なんだ、われわれも湧水を見つけださなければ、と湯田を後にした。

出て、実体を伴う福祉国家が実現できるのだろうか。ユートピアでないリアルな福祉国家を遠くに見て、社会自体が迷っている。もはや繁栄が限りなく未来にあることが約束された豊かさでない豊かさを見つけなければならぬ。それは必ずしも、経済の沈鬱からの反映だけではなく、私たちが見過ごしてきた文化のツケでもある。したがって、若い人たちだけに目を向けていくテーマだけでは、ドラマは描けないのは当然の結果である。近石綾子さんの戯曲はその慧眼もさることながら、様々な人生を歩んできた人々の「現在」をドラマを通して、いまのわたしたちの定まらぬ「個」の人生に方向を与えさえするのである。劇団大阪の「そしてあなたに逢えた」の舞台はそのアンサンブルの見事さに気づかずには舞台にのめり込んで行くほど、作品をすばらしいものに仕上げている。

地元の
座談会

すばらしい芝居に感動

400人をこえる歴史に
のこるフェスティバル

新田 最初に中野さんから、開催地が湯田町に決まった経緯などをお聞かせください。

中野 銀河ホールの場合、演劇講座を5年間続けていますし、この間、地域演劇祭を実施してそこに出演した劇団の何割かは全日本リアリズム演劇会議(以下「全リ演」という)の加盟劇団だったんですね。地域演劇祭における交流が背景にあったというのが一つです。

それから公的助成が可能だったこと、そして何よりも全リ演の加盟劇団から見ても岩手ぶどう座が魅力的な存在だったことです。地域演劇を語る時に、岩手ぶどう座を抜きにしては語れないというわけで、ぜひ地元で岩手ぶどう座の芝居を見たいと思いました。

ということ、400人をこえる歴史に残るフェスティバルになったのではないかと思っています。

「り」も、風刺がきいていてよかったですと思っています。

新田 みんなよかったということですね(笑)。私もいろんな人から聞きましたが、レベルが高かったといっています。来年の地域演劇祭にどの劇団を呼んだらいいか悩みが絶えません。

好評の稽古場の公演
ぶどう座に原点探る

新田 事前にぶどう座の芝居を見ることがアンケートを取りました。ところがとんでもない人数だったんです。仕方なく人数調整をしました。3回公演のトータルで223人が見えています。ぶどう座の稽古場という狭い所にこれだけの人数が入って驚きました。

高橋(富) 初日は十数人お断りしました。次のステージにおいてくださいといっってはみたものの、希

出席者

中野 健

劇団「支木」演出家

高橋 富二

岩手「ぶどう座」俳優

斎藤 史子

演劇講座受講生(銀行員)

高橋 純一

湯田町社会福祉協議会

事務局長

越後谷 祐子

主婦

司会

新田 満

銀河ホール・制作者(公務員)

新田 今回湯田町では485万円を補助しています。例年の地域演劇祭では400万円ですが、今回は共同開催のため増額していただきました。また、東洋信託文化財団からも50万円の助成をいただきました。ところで、越後谷さん、芝居を何本見ましたか。

越後谷 何回も出かけほとんど見ま

した。全体的に今までの地域演劇祭より質が高いと思いました。

一番印象に残ったのは、最後に公演した劇団大阪の「そして、あなたに逢えた」ですね。舞台装置がすばらしかったし音楽も演技もよかった。中風になった人の演技を見て「あれ本当に当たってる人じゃないの?」と隣の席の方が話していました。最初の劇団埼玉「風・夏冬」ですが、同じ相沢史郎作の「二人爺い」より少し垢抜けている感じがです。北上弁も随分上手で、忘れていた言葉を使っていた懐かしくなりました。

新田 劇団員は5月の連休に北上に来て、北芸の会のみなさんに北上弁を教わったようです。

越後谷 特別招待の韓国のマダン劇。言葉がわからないけど、何か伝わってくるものがありました。劇団自立の会の「おこんじよう

望の日しか見られないお客さんだったので、悪いことをしたと思っています。それからものすごく暑くて、扇風機をかけましたが、お客様は大変だったことでしょう。稽古場でやりますと、役者の息もお客様に伝わりますからね。今回の出し物は再演でしたが、初演が十数年前ですからセリフを忘れてしまっている。なんとかなるだろうと安易な気持ちもあって、8月に入ってから芝居に取り組んだのですが、公演日が迫ってかなりあわてましたね。

新田 ぶどう座の公演は、銀河ホールでやるものと思っていただけのお客様が多かったようです。稽古場で公演したことをどう思いますか。

中野 ぶどう座の稽古場でナマの舞台をぜひ一度見たいと、期待していた方がかなりいます。北海道の私の友人なんかは、ぶどう座が目

的できたんだと、2回も見ています。彼は自分の求める芝居は、ぶどう座が原点だと感激して帰って行きました。

新田 私もぶどう座が稽古場公演を



高橋 純一さん
湯田町小繁沢
(45歳)



斎藤 史子さん
北上市下江釣子
(23歳)



高橋 富二さん
湯田町川尻
(82歳)

やってよかったですと思っています。

ところで演劇講座出身の斉藤さんは、全国の人たちが見守る超満員の中の初舞台でしたが、どうでしたか。

斉藤 正直言って面白かったですね。練習中に「またやりたくなるよ」といわれたのですが、最初のころは辛い気持ちで先に立って…。ところがセリフが入り、みんなの演技が見えてくると面白くなってきました。本番では緊張感もありましたけど、全体的に余裕があったせいか、面白いと思いがながら演じました。またやりたいと思っただけで終わりました。

新田 町民の楽しみでもあるけど、専門家も見ていますからね。あのような超満員の中で自己表現する機会はめったにないことです。

越後谷 専門家に見てもらえることは幸せなことです。

斉藤 一緒に演技した中学生と共通の

会話に恵まれたのは幸いでした。

文化の違い乗り越え

国際交流した祭典

新田 特別公演の韓国のみなさんを社会福祉協議会の施設「悠悠館」に泊めたわけですが、お世話をした純一さん、どうでしたか。

高橋(純) 悠悠館に到着したその日メンバーの一人が蕁麻疹、一人が熱を出しましたね。病院に連れて行き点滴などしてなんとか公演に間に合いました。最初からこんなことで、大変なことを引き受けたと正直なところ思いました。

韓国の人たちはホテルを期待して来たようで、最初は戸惑ったようです。布団なんかもレンタルでしたからね。

賄いは地域のお母さん方にお願いしましたが、みなさんに感謝さ

れました。限られた予算の中で一生懸命調理していただきました。特に蕁麻疹の方は同じ食事ではだめなので、デイサービスのお年寄り用のご飯を食べさせたり…。日



越後谷祐子さん
湯田町上野々
(66歳)



中野 健さん
青森市浪館前田
(55歳)



新田 満さん
湯田町川尻
(52歳)

本に来てお母さんに逢ったようだと涙ながらに話していました。

記念にと、芝居に使った太鼓とドラを寄贈して帰国しました。

新田 私も舞台衣裳をいただきました。また通訳の方にも頑張ってくださいましたね。

高橋(純) 前もって留学生二人にお願いしたのが正解でした。全員が日本語を分からなかったのですからね。

新田 文化の違いというか、韓国では当たり前でも日本人にとっては失礼な言葉がポンポン出るわけです。それを通訳のところで止めてこっちに伝えている。その逆のパターンもあるわけです。それを板ばさみになりながらよくやってくれたと思います。

高橋(純) 韓国の人たちはストレートに話しますからね。

新田 あとから聞いた話ですが、「国

際交流に来ているのに、報道機関

がなぜ私たちをインタビューしないのか。それを伝えてくれ」というのです。それは失礼な話だからと通訳のところでは止め、私たちに知らせなかったのです。

越後谷 韓国の芝居の中に日本語のセリフが一部にありましたが…。高橋(純) 今回の公演のために、かなり練習してきたようです。

外にも出た演劇人たち
大道芸など多彩な企画

新田 今回は演劇のほかに、大道芸とかテント市、フリーマーケットなど多彩な行事を組みましたが、北上信用金庫のみなさんには大変お世話いただきました。

越後谷 土曜日の夜の「夢あかり」もきれいだったね。

斉藤 フリーマーケットは持ち寄った品物だから原価はかからないけ

ど、焼き鳥と焼イカは仕入れですから利益は2万円くらいかな。

高橋(富) 買物を楽しむ余裕がなかったのじゃないかな。その分、売れ行きが悪かったのでしょうか。

高橋(純) でも交流会ではよかったですじゃないですか。

新田 天気予報は雨が70%でした。そんな雨の中に町民が集まってくるわけじゃないし、銀河ホールでのテント市は5時に切り上げて、体育館に移動してやることに急速変更したわけですよ。

高橋(純) あの柔軟な対応が正解だったんじゃないでしょうか。中途半端にやるよりも。だから盛り上がりすぎてすごよかったし、鬼剣舞や太鼓も大好評でした。

斉藤 体育館の中で焼き鳥はやれなかったけど売り切ったようです。フリーマーケットは好みやサイズがあるわけですからね。私が高校

のとき着ていたジャンパーに千円の値段をつけていたところ、韓国の方が買っていかれたようです。

私たちは韓国製を着ているわけじゃないですか。それが韓国に戻って行った、これこそ国際交流だともいって笑っていました。

高橋(純) 本当に賑やかでした。地元ではいつも見ていた民俗芸能も、劇団員から見れば珍しく勇壮な踊りですからね。最後まで見ていました。それにしても参加者のバス送迎は立派だと思いました。

新田 バスの確保は大変でした。役場職員が中心のスタッフでしたが、夜の3時までやってくれました。無料の送迎でしたけど、よそでは有料ですからね。地域演劇祭をやってきた業績があるから、ここまでやれたのでしょうか。

私たちは、芝居はホール内だけでやるものじゃない、という考え

からいろんな企画をやりました。劇団員による大道芸もその一つです。前進座による立ちまわり、京浜協同劇団のバナナの叩き売りなどですが、雨のため1回だけで止めてしまったので、町民からお叱りを受けました。

越後谷 天候のせいだから仕方ないけどがっかりしていましたよ。

新田 舞台美術はどうでしたか。

高橋(純) 絵より素晴らしい感じが家に飾ってもいいと思いました。

中野 東京で使用したものを持ってきました。

新田 送料3、4万円であれだけの展示ができるのですから安いものです。ところで今回の入場者は銀河ホールと岩手ぶどう座稽古場を合わせると、延べで2323人が鑑賞しました。そのうち約500人が宿泊していますので単価が安かったけれども、旅館にとつてい

くらか潤ったと思いますね。

旅館でも送迎用バスを出していただき助かりました。またお客様にマナーの悪い方はいなかったと喜んでいました。

手紙等での多い反響
与えた町政への刺激

高橋(純) 反響はどうですか。

新田 手紙や葉書がたくさん届いています。が、「良かった」というのが多いです。「小さなまちでよく頑張った」「たった一人の私に空港まで迎えに来ていただいたのは驚いた」などもあります。対外的には評価されていますが、何か反省事項はありませんか。

高橋(富) 主催が全力演じたので、私の説明不足からこの組織に加盟していないぶどう座座員に誤解を招いたことです。それから連日の稽古と会場づくりが重なって

大変でした。また銀河ホールとぶ

どう座の稽古場を結ぶ目印があれば、便利だったと思いますね。

越後谷 私は芝居を見るのが大好き。家も近いし素晴らしい行事でした。

高橋(純) 3日間いろんな若い人たちが町に入ってきて、町に元気がでてきた感じがしました。よく街おこしとか温泉観光とかいいますが、このような形を継続できないものかと思えます。

社協の職員の親なんか、わざわざ埼玉から来て3日間芝居づけになり、感激して帰りました。温泉に泊まりながら演劇鑑賞するのはある意味でぜいたくかも知れませんが、年に何回かこのような企画があれば、町は活気づいていくと思いますけどね。

新田 文化はお金がかかるといわれますけど、文化と観光を結びつけ

て、文化観光という手法もあるんだ、という思いももっています。

斉藤 私は演劇祭に参加して、演劇は役者のほかにいろんな裏方がいて成り立っていることを感じました。そしてそういう思いを一人一人が持てば、もっと良い演技ができると思えました。

中野 結果としてみなさんに喜んで帰っていただきましたが、事務局サイドとして予想以上に苦労が多かった。参加者人員が公演日ぎりぎりまで正確に把握できなかったのは大変でした。東京の劇場みたいな劇場が湯田町にある、こんな幸せはないと70代の方が話していたのが印象的でした。

新田 銀河ホールは演劇活動を停止したら何の意味もないホールになる。継続こそ大切だとつくづく思いました。

(「街・またかみ」から抄録させていただきました)

劇団埼玉
『風・夏冬』

劇団名義 栗木英章

100号記念戯曲集にこの作品が掲載されたときから、2つの世界(老人ホームと、路上生活者に関わる家族たち)がどう紡がれていくのかとても興味があり、今回の舞台を楽しみにしていたが、結果的には少々期待外れだった。

達者な役者により、老人ホームの2人も、新宿地下道路のホームレスのやりとりも各々面白くはあったが、家族の通夜の方が冗漫で、人間関係もわかりにくく間のびしていた。その流れが他にもはねかえって、全体にテンポのない舞台となってしまう気がする。テーマは「生きる」で死んでたまるか——とプログラムに述べられているが、ラストの踊りもその思いが大きく燃焼するには至らなかった。ホリゾンントに浮かび

あがる鬼の貌が印象的だっただけに残念な幕切れであった。
相沢史郎氏の原作を、埼玉の佐藤台本に上げたその意図を、埼玉の実力で練り直してぜひ再提出してほしいと願う。

劇団やませ
『わが内なるラピュータ』

鹿角演劇を楽しむ会 高木豊平

「ラピュータ」。ガリバー旅行記に出てくる天空を飛ぶ島である。ここでは人々が天体の運行に深い関心を持っていて、天文学者は貧弱な望遠鏡で、ヨーロッパの学者より優れた観測をしている。それは天文好きの時計店主、前原寅吉の心の中にある島でもある。

舞台は、明治42年のハレー彗星騒動の時を中心に、八戸の天文時計店で練り上げられる。主人公前原寅吉は、人間の生きるスタイルがすつきりしている明治の職人で、まだ幼

い日本人の天文学界に一石を投ずる在野の学者でもある。脚本には明治から大正の時代の空気がよく練り込まれていた。しかし、時計修理より天体観測にうつつを抜かしているようにみえる寅吉は、弟子の木村のことも良く考えているし、困っている人を見過しに出来ないという、きつぷの良い、魅力たっぷりの人物である。この主人公を演じた、作者でもある榎谷伸夫氏は、寅吉が唸る浪花節のサーピス付きで、その魅力を客席に十二分に伝えきった。もう少し商売に、と愚痴りながらも主人公を支える妻ナカも、庶民の暮らしを良く写して好演であった。アンサンブルに対する演出の目配りも確かで、客の源吉などの脇が存在感のある演技でしっかり締め、骨太の展開になった。スタッフも正攻法で舞台を支え、ことに時計店が反転して裏の天体観測場になる装置はよかった。
「地球に根ざし、地域を見つめてを旗印に30年」と劇団プロフィール

劇団馬山(大韓民国)
マダン劇「春香伝」

名古屋演集 丸子礼二

マダン劇(馬山劇)は韓国の馬山で生まれた韓国版ミュージカルだそうである。

「春香伝」は韓国ではだれでも知っている古典的名作、妓生(キーセン)の娘春香と高官の息子李夢龍の身分差別を超えた恋物語。父の転任で夢龍と引き離された春香は悪い郡長の夜伽ぎを断り投獄され、死刑の直前、隠密検察官となって現れた夢龍に救われ、めでたしめでたしで終わるお話である。楽しかった。

韓国語のわからない私もよく知っている内容なのでどうにかついていった。召使の2人のコミックな恋のサブストーリーが面白かったし、時々日本語をまじえて(ギャグのつもりか)ウケていた。開幕時の客席からの入場や要所々々での踊りは盛

り上がりがあった。
古典的な勧善懲悪と愛の成就の物語は大衆に好まれる演劇の基本形を示していて、私を含めた現代日本のコンプレックスに満ちた全リ演の観客にはよい見本の一つを示してくれたように思うのである。

劇団自立の会(京都)
『おこんじょつるり』

劇団はぐるま 内田 薫

芝居が始まる前に、すでに鼻の奥でツーンとしていました。何度か見た「おこんじょつるり」。きつねがばばさまをかばって自らの体を投げ出す場面、瀕死のおこんにばばさまが必死の念仏を唱える場面。そんなシーンを思い出すと、すでに涙腺が緩みつつありました。好きな芝居です。あとはこの作品をどう料理してくれるか、「自立の会」に期待が膨らみます。

シンプルな舞台に鳴り物が良く似

にある。歯切れの良いリズムのなかに、どこか暖かみのある八戸弁を堪能できた舞台であった。地域のロマン溢れる主人公を掘り起こしたこの劇は再演と伺ったが、財産として、これからも八戸の空気をあちこちに届けて欲しいと思う。

かつて地域には、中央では無名だが、その地で輝いていた人たちがたくさんいた。いま地域の力が失われかけているように見える時代に、自分の足を掘り起こし、先人の夢を紡いで輝いている人たちがまだまだたくさんいる。元気をもらった3日間であった。

観測が祟り、見えなくなった寅吉の心眼に写る天体の美しさを、エピソードに感じながら、幕が降りた銀河ホールの客席に、豊かなものに包まれて座っていた。

合います。ばばさまの失敗がいくつか語られ、おこんとの出会い。(あれつ、ちよつとあつさりしすぎじゃないの?)と思つたけれど、狂言風の仕立てでは、こういうやり方が合っているんでしょうね。おこんのばばさまを慕う気持ちは、伝わっていいと思います。全国にたくさんの「おこんじようるり」があり、それぞれが自分たちの工夫と解釈で上演しています。今日、新しい「おこんじようるり」を楽しく見せていただきました。クライマックスでは、やつぱり泣かされました。

劇団大阪

『そしてあなたに逢えた』

福岡現代劇場 猿渡公一

元医師、歌手、大工の棟梁、農夫、娼婦等々さまざまな人生を歩んできた老人たちが奇声を発し、車椅子を暴走させ、おかしくも悲しいトラブルをくりかえす。そこは、地方都市

近郊の痴呆性老人ホーム。老人たちとあるべき介護を求めて奮戦するケアワーカーたちの物語である。

異様な世界ではないようにさえずる人間の世界ではないようにさえずる。しかし、物語が展開するうちに老人たちが人生を生きようとする情熱に心うたれる。老人たちの人生が、家族の姿が浮き彫りにされ、今日の日本社会が見透かされていく。私たちは笑いながら涙を流した。

元歌手の川島律子が歌う「センチメンタル・ジャーニー」は庄巻だった。誕生パーティーで元エリート医師には白衣が、元大工の棟梁には法被が送られる。老人たちは、自らの人生の輝ける時代を生きている。そのとき老人たちの生も輝いている。劇団大阪の歴史が舞台を支えていた。杉本(元医師)、夏原(元歌手)、中村(元娼婦)、神津(元大工)、斉藤(團長)、奥井(主任)とペテラン陣がよい。なかでも車椅子で半身不随の老人を演じた清原(元棟梁)の熱

演が光った。

最後に、地元の老人観客が楽しみながら自分たちの世界に引きつけていたことを報告しておこう。

ぶどう座

『お婆さんと酒と役人と』

『めくらぶんど』

関西芸術座 小笠原町子

「ぶどう座」を観たい観たいと思いはじめて、12年になるだろうか? ようやくその至福の時がきた。

* * *

グレイ一色の地がすりをしきつめた能舞台のようなシンプルな舞台。

ヒョロリと背の高いお婆さんが後向きに座っていたのがクルリと前をむいて、かめの酒を飲む最初のセリフとシグサで、男優が演じていることがわかると、その何ともいえないおかしみに、観客はもうどつと笑うのである。



『めくらぶんど』

そこへ、橋がかりに、背広姿の税務署の役人とへつぱり腰でついて歩く下役の男が現われると、連続的な意外性と、こんな人いる」という親近感に、観客は心の底から笑いこぼして、劇の進行にすつぱりと参加してしまうのである。

全国から集まって来て、初めてぶどう座を観た人たちも多いはずなのに、この連帯感はなんだろう。

民話ではあるが、現代的な諷刺にみちていて、リアルな演技でありながらひょうひょうとしていて、カラツつきぬけたおかしさがあり、それこそ酒づくりと同じような演技のねられかたが、ふくいくと発酵しているのである。(ふじたあさや作「お婆さんと酒と役人と」)

2本目の「めくらぶんど」は、前の舞台とは一味も二味も異なる、哀切さと、きびしさ、強烈さが胸にせまった。

今度のお婆さんは本物の女優さんで、幽霊としてピョオオンと登場するのだが、なんとも美しく、かわいく、色気がある。戦死した息子を思って嘆き、じいさまが雪かきをしないからこの家は屋根の雪の重みでつぶれてしまう、とかきどく。

ここにも酒役人が登場し、ばあさまの作った酒は、めくらぶんどで毒だとわかり、役人が逃げ帰ったあと、大きな屋なりがしてじいさまとともに、家はつぶれてしまった。

なんともやりきれない切なさが、ふかふかと観客の胸にしずむ。しかし、決して暗くはないのである。

川村さんの演出は、のつけから、農民のもつおらかなおかしさで進行させる。

前の舞台の3人の演者が今度はクロスとして、やはりグレイ一色の装束に、同色の布でおおわれた見台を捧げ持つて、肅々と登場し、正座したとたんの第一声は、「ヒューウー」といった木枯らしの擬音——無声化した息だけを使つての雪の夜の表現は、酸欠をおこさないかと思うほど、ひそやかにリアルなのだが、やはり笑ってしまうのである。

観客はすつぱり舞台に参加したやすらぎとぬくもりを体内にあなたたかく抱きながらぶどう座をあとにした。

小笠原さんから長文の感想をいただきましたが、紙面の都合で一部のみ抄録させていただきました。

(編集部)

幸せになれた
フェスティバル

荒川秀樹

久しぶりに芝居が創り出すなんとも心地良い雰囲気に取り憑かれた。先日北上から分け入った湯のまち湯田町で開催された地域演劇祭でのことである。実のところ、この「全日本演劇フェスティバル」に私は救われた。

私と各地の劇団との付き合いは1985年からスタートした「文化庁主催/地域劇団東京演劇祭」に始まる。毎秋、全国各地から4劇団を招き、東京は巢鴨の三百人劇場で上演するというこのお祭りの企画を担当。個性ある劇団との出会いを人に譲れぬ至福の時として毎年力を注いできたが、それも昨年15回を迎えるにいたって遂に幕。よくもまあ続けられてきたなあ、との感慨のうちにも寂寞の想いひしひしと感じていたとこ

ろに入った湯田からのこの知らせ。私は救われた。ぶどう座、やませ、自立の会、それぞれに出会いがあった劇団の名が並ぶのを見て心は銀河ホールへと飛んだ。

これまで銀河ホールには春、冬の2度訪ねている。今回は乗り換えた北上線の車窓に夏きびしくもはやコスモスの季節。湯田の駅に立つと東京の残暑が嘘のように、涼しげな銀河ホールが待っていてくれた。前回訪れた時の厳冬の佇まいと言いつつ、これだけ自然に溶け込み、季節によって表情を変えるホールも珍しい。

そんな想いを新たに劇場に入ると、埋め尽くされた席の向こうでは韓国から招聘された劇団馬山が上演していた。海外公演を目にしてよく思うことだが、確かな芝居の場合、観客の集中力は時として言葉の壁を超える。軽快なテンポのうちに展開する「春香伝」と題されたこの芝居の笑いの中に壁を乗り越える観客のエネルギーを感じたが、カーテン

コールの雰囲気は何よりもこの交流の成功を物語っていた。

その残響の中、次はぶどう座の稽古場公演へと足を向ける。この空間に来たのは2度目。いつ来てもなんだか懐かしい気にさせてくれる。演目は「めくらぶんど」と「お婆さんと酒と役人と」の2作品。私がこの劇団と出会ったのは、先述した東京演劇祭の4回目に参加していたのだ。時だから12年前にさかのぼる。その時つくづくこの企画を実施して良かったと言う気にさせてくれたのが、このぶどう座であった。東京集中という言葉に惑わされ、摩滅を繰り返す演劇界。そんな気分から生まれた企画にこの劇団は明確な正当性を与えてくれた。生活の中から生まれる演劇とはよく言うが、そんなこと当たり前と言わんばかりの説得力に打ちのめされたのを今でもはっきり覚えていいる。この日の舞台もますます健在なり。うれしくなった。

この日最後は再びホールに戻って

の自立の会「おこんじょうるり」。

この劇団にも97年の13回目に参加していた。その時は94年に亡くなった森田有氏の「ぢらい」を上演。戦場で行われる不思議な森田ワールドは確実な評価を得たが、今回は自立の会が続けるもう1本の十八番芝居。繰り返されるうちに贅肉が削ぎ落とされた洗練の舞台。この劇場にとても合っている作品と感じた。

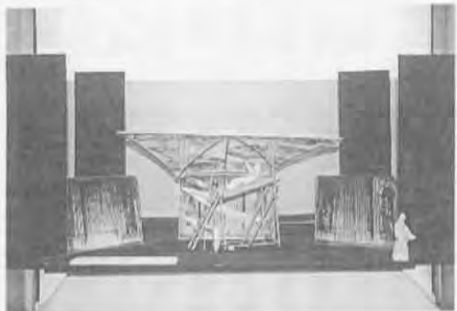
時間の制約からこの4本しか見られなかったのが悔しいが、今回何よりも感じたのは客席の醸し出す雰囲気だった。芝居を包み込む柔らかさとも言うおうか、演劇というものが観客の心の参加を前提として成り立っている。ということを変更して穏やかではあるが強烈に知らされた1日だった。その後の交流会も盛況でここでも東京演劇祭に参加していた

いた多くの方たちと再会を果たすことができた。

そして翌日、二日酔いでぼんやりした頭をふと思いついたようによぎった「芝居で幸せになることができんだなあ」という今更ながらの言葉を繰り返しながら秋涼迫る湯田に別れを告げ残暑居つく東京へと帰途について。

(財団法人現代演劇協会三百人劇場)

舞台美術研究会展 (Jホール)



(栗原 省 撮す)

混沌と混迷の先に見えるものは？

——最近の舞台から——

香川 良成

最近の舞台について書いてほしいという編集部からの要請であるが、紙幅もあるので今回は昨年9月以降今年の9月までの約1年間に観た舞台のうち、坂手洋二、鐘下辰男、松田正隆の新作について触れてみたい。

坂手洋二の『天皇と接吻』（燐光群）は昨年度の多くの賞を獲得し高い評価を得た舞台である。その成功は、平野共余子著『天皇と接吻—アメリカ占領下の日本映画検閲—』（草思社）に刺激を受けた坂手が、平野の労作を巧みに現代とだぶらせて再構成したその現実の切り取り方の重層性の巧みさにあったように思われる。

平野によれば『天皇と接吻』は、ニューヨーク大学に提出した博士論文をもとに、1992年にアメリカで出版した『Mr. Smith Goes To Tokyo: Japanese Cinema Under the American Occupation 1945-1952』の日本語版で、邦題については「天皇の描き方について占領軍は禁止の対象としたことが多い。一方、接吻は自由と民主主義の象徴

としておおいに奨励された」「占領軍の検閲の対象となった事項の代表的存在としての「天皇」と「接吻」をとりあげたものである」という。

坂手は舞台を現代の高校の映画サークルに設定し、彼らが文化祭に向けて『天皇と接吻』なるドキュメンタリー映画を自主製作しようとする中で起こった様々な事件として構成している。したがって舞台は映画撮影（占領下の現実）と現代の高校の現実（日本の現実）とが平行して描かれる。俳優は両方の現実を演ずるわけである。

開幕早々、文化祭の開会式で女子合唱部員が「君が代」を歌うよう強制されている問題や、東海村の原子炉事故のTV放映があり、さらに題名も問題になり、職員会議で上映中止の決定が下りたことを映画部顧問教師に告げられるということが立て続けに起る。しかし彼らは撮影を強行する。当時のCIE（民間情報教育局）の検閲官コンデや、日本側のスタッフのカメイ（亀井文夫）監督、プロデューサーのイワサキ（岩崎和）などの実在の人

物も登場する。初めコンデは天皇を批判する映画、原爆記録映画の製作の続行を支持するが、占領政策の変更でそれから40日後には、CIEやCCD（民間検閲支隊）から逆に禁止命令が出る。原爆のラッシュプリントとネガの提出、『日本の悲劇』のフィルム没収が言い渡される。『日本の悲劇』はカメイの監督で、昭和天皇の戦争責任と国家主義的資本主義を批判的に描いたものだった。当然コンデは追放されるが、日本側スタッフはラッシュプリントを隠すという抵抗を試みる。一方、学校では日本史研究会が撮影中止を要求して部室に押し入ってくる。しかし学校も含めたあらゆる妨害（電源を切る）に抗して上映会は決行される。舞台はここで終わる。

発表誌（『シアトロ』1月号）ではこの後コンデも出席した『日本の悲劇』の上映会シーンがあるが、舞台の幕切れの方が優れている。舞台ではコンデと通訳に外国人俳優を起用したこともあって、占領下のシーンは臨場感に溢れていた。しかも現代との重層的な描写は、占領下で起こった映画検閲に係って派生した様々な問題が、時代を超えた国家間の問題のみならず、日本社会の問題としても今に尾を引いていることを明らかにし、社会の矛盾の有り様を観客に問いかけた。それはまさに現代における状況の劇になっていたのである。しかしあえて批

判を言えば、深い人間の描写という点から考察した場合、必ずしも成功しているとは言えないように思うのである。主人公の映画部長ウエノ（新日本映画社社員も演ずる）と合唱部員（失明した女優）との恋の描き方は中途半端だし、イワサキやカメイもそれほど陰影深く描かれているわけでもない。坂手はそれらを犠牲にして状況の重層性の描写に重点を置いたのであるが、欲を言えば惜しいところである。

坂手は今年に入って青年座のために『とかげ』を書き下ろし演出している。舞台は「一九九四年秋 三重県鈴鹿」のラブホテルに始まり、「二〇〇〇年のあの日、あの刻」と表示される南の島までの6年間にわたるフリーライターと駆け出しの女性カメラマンのラブストーリーを、幻想シーンも交えた18場に描いている。しかもそのほとんどが新宿その他のラブホテルが舞台である。11場では他の女性との関係も描かれる。

主人公のヤマシロユウタは1場では42歳で、17年間勤めた会社がつぶれ、2年前からフリーライターになったという人物である。彼は東京に家庭があり子どももいるが、出身は沖縄で一坪反戦地主でもある。各場の初めに年代と場所が投影され、「地下鉄サリン事件」「阪神大震災とその後の住民生活」「沖縄米軍の少女暴行事件」

つている)で縊死しており、妻も気が触れて庭の古井戸に身を投げて死に、その葬式の日が幕開けである。鐘下は鬼藤家の呪われた血とでもいったものを濃密に描こうと試みる。金貸し業をやっているらしいやくざ風の長男は、役場にこの家を文化遺産として高く売り付けようと奔走している。展開の中で明らかにするのが、男3人と女1人の子どものうち、三男と娘が死んだ母の子で、長男と次男は当主が他の女に産ませた子である。長い間子どもがでなかつたので入籍したのである。長男の妻は妊娠しているが、次男も三男も彼女とかつて関係があり、お腹の子はどうも次男の子であるらしい。次男は教師で今は離婚しているが、子どもは首をくくって死んでいる。彼も最後は電車に飛び込み自殺する。実は作家志望で東京に住む三男も精神を患っており、妻に無断で家を抜け出しここにやって来る。彼は母を殺したのは長男だと思ひ込み、執拗に兄にからむ。その彼は幕切れで白蟻のように床下から這い出て来て、井戸端の黒いゴミ袋(これは借家人が井戸へ不法投棄したものである)を開けると、亡き母が彼に乗り移り、長男やその妻に対する呪いごとをまくしたてる。幕切れでは、後から駆け付けた彼の妻が長男の妻に向かって「全部、あなたのせい：あなたがやったのよ」と言って、隠し持っていた金槌で

「沖縄の基地反対運動やヘリポート基地の問題」が話題になったり(沖縄の場面は3場ほどある)、元オウム信者や、人殺しをして投身自殺した子どもの母親が登場したり、九州の保険金殺人(子殺し)なども話題になる。しかしそれはただちよつと話題になるというだけで、一見社会的事件に触れているように見えて、舞台では主人公たちの官能の世界がクローズアップして描かれている。しかし駆け出しのよろず下請けライターだったユウタも、最後には大新聞の西日本版にコメントを載せるまでになっている。妻のトモエも三度ほど登場するが、彼女も仕事を持っており、ユウタの女性関係には一切干渉しないかの如くである。ユウタと関係が続けるヒトミは、ユウタの下請の他にセルフヌードやアダルト・ビデオの製作なども精力的に手掛けている。17場は二人が愛用(?)していた新宿のラブホテルが今日を最後に閉鎖するという深夜の取材である。そこでヒトミは「もう二度と会えないと思ったら、撮影してもいい」という約束だったと言い、ユウタに裸になることを要求し「精悍なトカゲ、あなたは」と言う。坂手は題名にもしている「トカゲ(やもり)」については三場の沖縄のホテルで天井に現われ二人の話題になる。「自分のからだにのつたヤモリ

と目が合った時は、石になる」「沖縄流に言えば、マブヤー(魂)をとられる」などとユウタは言う。二人はトカゲの多く棲む南の島へ行こうとまでして、パスポートの期限切れに気づかず失敗する(8場)。別れることになった二人が最期の時を過ごす18場の南の島のコテージの天井にもトカゲが現われる。それを見上げたヒトミは「太古の昔、厳しい自然環境の中で絞り出された、究極の存在。地球を放射能や熱線が覆っていた頃完成した、完璧な強さの形」「永遠はいらぬ。瞬間がほしい」「落ちてきて!」と叫ぶ。しかしその象徴性は何とも中途半端だ。坂手はこの二人を批判的に描き出しているのかというところでもない。二人の関係から互いに新しい何かが生まれるのでもない。それは単なる風俗に墮している。正直言って「天皇と接吻」とのあまりの落差に驚きを禁じ得ない。

鐘下辰男は今年になって『Happy Days』(幸せな日々)、『山見☆事務所』と『アフリカ』(THE GAZIRA)を発表している。

『Happy Days』(幸せな日々)は、今は白蟻に蝕まれた母屋のみが残る地方の没落した旧家鬼藤家が舞台である。当主は裏山(今は人手に渡り産業廃棄物の山となりに思われてならない)。

「レプリカ」とは複(模)写、複製(品)という意味であろうか。この作品もかなり意図的に作られた作為に満ちたミステリアスな舞台である。舞台は森の中の山小屋風な一軒家で、ここには精神を患った娘と、それを癒そうとして仕事を辞めてここに引き籠もった娘の父とが暮らしている。父は男のもとに去った妻が死んだ後も妻を忘れられず、妻の愛用したピアノをこの山小屋に運び込んである。娘に妻の面影を見ているのである。娘は19歳の時にある男のストーカー的行為に悩まされ精神を患って10年近く病院生活を送り、1カ月前に退院してここに移り住んだのである。この小屋に出入りする人物は、娘の現在の主治医と、主治医の勧めで1カ月に一度行くことになった絵画教室の主催者と、彼を叔父さんと呼ぶ青年と、彼らの知人で牛屋を自称する大人の玩具も商っているらしい男である。主治医も含めて彼らは皆何らか

の形で娘に偏執的な関心を持っている。主治医は彼女の誕生日にメガネと腕時計を贈るが、後には彼女に愛を告白する。絵画教師は誕生日のプレゼントだと称して、娘に驚くほど似た二分の一大の精巧な人形を青年に運び込ませる。

一方、家には再び頻繁に無言電話がかかって来るようになり、差出人の名も宛名もない誕生日を祝うカセットテープが郵便受けに投げ込まれる。彼らはこれは以前のストーリーカーの行為に違いないと話し合う。青年は青年で密かにパーボン・ウイスキーを娘に差し入れており、大麻をも密かに勧めている。彼女は医師の薬は飲んでいない。なぜか皆の話の盗聴テープも投げ込まれる。医師は人形の腹中の盗聴器を発見するが、これをめぐっても争いとなる。幕切れで明らかになるのだが、娘は青年に頼んで、ストーリーカーはすでに死んでいるという偽造した古い新聞記事を披露させ皆を混乱におとしられる。その後父は人形を抱いて幻覚におそわれ、娘を妻呼ばわりしピアノを所望し、幻想のピアノを聴く。娘はその父をパーボンの瓶で打ちすえる。娘は父からの逃避を企てたのだ。幕切れでは父はすでに病院に収容されており、娘の旅立ちのプレゼントだと言って青年が持ってきたケーキを食べた娘は寝入ってしまう。青年の仕掛けた睡眠薬だった

ようである。青年は扉と窓に施錠しカーテンを閉める。現在の真のストーリーカーはこの青年だったことを暗示して終わる。ともあれ登場人物はすべて正気と狂気の間をさまよっている。この偏執性に現代の病巣を見ようとしているのであろうか。それにしても誕生日のプレゼントに模造人形というのにも異常だ。全体の作為があまりにも目立ちすぎるのである。

松田正隆は『夢の女』(MODE)、『花のかたち』(文学座)、『風花』(あまがさき近松創造劇場)、『天草記—kensaki—』(青年座)と精力的に書き下ろしている。

『夢の女』は、永井荷風に同名の短編があり、久保田万太郎はそれを新派のために脚色している。作者はこれにヒントを得たと断っている。荷風の作は没落した家族のために妻や遊女に身を落として省みない女が主人公である。松田の作の主人公は、病気のためにリストラにあった夫を助け、療養のために人里離れた一軒家に引越した、ひたすら夫のために働き続ける妻(女)である。彼女は夫の女性問題で家を出た姉をも引き取っている。この一軒家を借りるにあたって金銭的に夫の弟の世話になってまでもである。夫が生死の境をさまよった後退院すると、夫の世話を姉に託して東京へと働きに出る。特に

夫との愛の有り様が描かれるわけでもない。だれの子と特定しがたい子を孕んだ姉の娘も登場するが、初め墮すと言っていた娘も終幕では満開の桜の下で臨月間近いお腹を抱えている。『夢の女』とは、これら女性に対する、人生に対する作者のアイロニーであろうか。荷風の描いた家族とそれを支える娘との関係に見られる時代を反映したあるリアリティーが、この主人公夫婦の間には、夫婦であるという前提を除くとあまり感じられないのである。

『花のかたち』は九州の離島が舞台である。幕開きは島と本土とをつなぐ橋の完成式の日である。島の中学教師川久保達夫・文代夫婦は、島の旧家の離れを借りて住んでいる。この島に来て5年目である。かつての同僚沢めぐみも達夫を慕ってこの島にやって来ている。めぐみは結婚歴があるが、達夫は島の教育委員会に勤めるこの家の長男浦谷和昭に彼女を紹介し、二人の結婚話が進行している。橋の完成式の日に当主は死ぬが(なぜか通夜の時に生き返る)、その通夜の日と、それに続く和昭とめぐみの結婚式に纏わって起こった事件を描いている。

通夜の当日に和昭の全く知らない自称異母兄弟と称する古賀亮介、亮介の異兄妹と称する古賀恭子、恭子の異母兄と称する小西が突然現われる。数日後恭子は再び現われ、土足で上がり込んで金を貸せと喚きちらし3万円

を受け取ると、2千円ないと兄が殺されると再び居直る。発表誌(『テアトロ』2月号)ではここに亮介が現われ、「ただいま」と言って居間に土足で上がって来、恭子は「お上がりなさい」と答えている。2ヵ月後の和昭とめぐみの結婚式の前夜、亮介と恭子は三度現われ、和昭の死を予告するような会話を交わす。結婚式の当日、小西はトンネル工事の同僚の安東を伴って現われ和昭を刺し殺す。幕切れでは無人の浦谷家(当主は病院に、妻は特別養護老人ホームに入っている)に亮介が「帰って来たんですよ、ここに」と言って現われる。文代は文代で達夫に「私ね、和昭さんがおらんことになってしまえばよかよかと思いいったとよ」「和昭さんさえおらんことになってしまえば、沢さんもここには来らっさんにとつて」「あげんして包丁もつて、和昭さんば刺し殺したとは、私やったとかもしれん」としみじみと述懐する。確かにこの達夫・文代夫婦と和昭・めぐみをめぐる関係にはあるリアリティーがある。しかし浦谷家とそこに押し入って来た人々の関係が殺人にまで至るリアリティーは、和昭のそれに対する対応も含めて書き足りていない。しかし作者は達夫・文代の関係も含めて、マグマを抱えた現実、日常性の中に潜む非日常性こそが現実であり、そのマグマはいつ噴き出すか分からないと言いたいの



▽筆者紹介

劇団舞芸座で土方与志に師事。その後前進座に参加。演出のかたわら付属養成所の設立に参画、専任講師となる。昨年より非常勤嘱託。法政大学・駒澤大学兼任講師。国際児童青少年演劇協会 (ASSITEJ) 世界理事。芸術祭優秀賞他、舞台成果に対する受賞作も多い。

いっしか竈かまどの上の大金になって二人はその釜の中に消え、祭壇にはローソクがともされ、竈に薪がくべられ火が移される。真由子は脱出に失敗し、世川と共にオトボライされたということなのだろうか。

こうして早紀・実紀・村瀬・綿貫の4人の家族の新しい生活が始まる。女たちは大きなお腹を抱えている。礼拝堂に朝が訪れる。作者は日本で一場を厭いと離はな穢じ土、最後の七場を欣こころよ求もと浄じやう土と名付けているが、そのような意味をそこに託たくそうとしているのであろうか。まさにホラー演劇の様相を呈するのである。しかしそれにしてもあまりにも主題が重い。男たちはいわばこの島に吸い寄せられ、業を背負って生涯オトボライの儀式をつかさどることに

あろうか。「花のかたち」とは、庭に、彼岸花が花火のように咲いている。ところから、そこにそのような象徴の意味を込めて題名としたのであろうか。

【天草記—tensouji—】は九州地方と思われる幻想の島の物語である。ここは警察の手も届かない。一度入ると脱出できない島であるらしい。舞台は荒廃した廃屋に近い天主堂である。聖母子像が飾られた祭壇がかるうじて残っている。

この島はヒンクエキ（火の苦難）という苦難の歴史があり、今は死者を弔うオトボライと呼ばれる儀式を司る一家しか住んでいない。オトボライとは、二度とこの土地に死者の魂が舞い戻って来ないように、死者の還るべき肉体を徹底的に破壊し、それを祭って折る儀式である。真由子は、うちん人だけが、ここで死んだものの魂ば、あん海あまん向むかうこうにあるちゆうサイホー Jord に渡らせてやりきる」と言う。開幕早々におばさんと彼らが呼ぶ死体を粉々にして祭るこの儀式が行われる。一家は光介・真由子夫婦と、先妻の子の早紀・実紀姉妹である。一家はたびたびトロッコでここにやって来るが、廃屋は廃坑の坑道に繋がりに、海へも時によっては繋がるかの如くである。この廃屋に東京の地下鉄で多くの人を死に追いやったオウム事件の犯人と思われる村瀬・世川・綿貫

の三人が逃げ込んで来る。最初の段階では村瀬は未だあの人（教主）を信じており、あとの二人はすでに否定的になっている。展開の中で村瀬はあの人（教主）を否定する世川を撲殺する。綿貫は綿貫で、実紀に狂った父を殺してくれと頼まれ、あの人（教主）をめぐる論争の中で光介を撲殺する。劇中ではその他にも様々な不可解なことが次々と起こり、語られる。オトボライをしたおばさんや村瀬や世川が早紀に乗り移ったり、光介が女の子しか生まなかつた先妻を殺し子どもどもも食べてしまった話や、母親まで殺した話。真由子が奇形児ばかり生むため、オトボライの後継者の男の子を求めて光介が早紀と関係した話。村瀬が早紀に迫られて性行為中悶死した話（井戸に腰からはまって身動きできない状態で行われた）や、綿貫が井戸に飛び込んで死んだ話等々である。しかし現実と幻想は混沌とし、死んだはずの村瀬や綿貫は呪術が解けたのか生き返り、村瀬は早紀と結ばれたことであの人（教主）を捨てられたと言い、実紀は綿貫に言い寄り、真由子は身の危険を感じてか、世川の死体をトロッコに積み、世川の霊に導かれて島を脱出しようとする。それにしても幕切れはまた奇怪である。真由子に首を縫い付けてもらった世川は、海に漂うトロッコの中で海について真由子と語り始める。と、それが

なつたのであろうか。私にはその寓意性や象徴性が混沌として見えてこないのである。衝撃となって伝わってこないのである。怪異的現象（幻想）の方が先行し、クローズアップされ、彼らの苦悩・屈折に対する問い掛け—彼らがなぜかつてあの人（教主）を信じ、あの人（教主）の託宣に従って多くの人を危あやめたのか、そのあの人（教主）を否定するようになった現在の自分とは何なのかの問い掛け—が淡く、幻想のリアリティーを構築するまでに至っていないのである。凄惨な舞台の割には変節がいとも簡単に行われるのも気になるのである。

いくつかの作品にふれてきたが、このような混沌と混乱に満ちた作品が同時期にいくつも現われたということ、様々な意味で今日の社会を反映しているのだから、混沌とした現象の奥に潜むリアリティーを探り当てるまでには至っていないのである。大変難しい課題ではあるが、現象を超えて、寓意的であるにしろ、象徴的であるにしろ、不条理的であるにしろ、その他の方法であるにしろ、より深い人間の實在や社会の有り様に迫るリアリティーある作品の誕生を願わずにはいられない。現在はそういう意味での戦後の大変な転換点に差しかかっており、社会はそれを求めているように思えてならないのである。

（かがわよししげ）（2000・10・18）

ペレストロイカの頃

私の30年物語(3)——ついでに、日口あれこれ——

桜井 郁子

日口交流に功績あった人々

2000年の今年、思い出すことのなげが多いなかで、日本とロシアの演劇交流に関わる人々を失った。日口それぞれ2人ずつを選び、追憶のよすがとしたい。

オレク・エフレーモフ 5月24日没。モスクワ芸術座の長、俳優にして演出家。ニュースを聞いた時、ああやっぱりと思った。98年春、モスクワでの第3回チエーホフ国際演劇祭開会式の壇上で、病み上がりの痛々しい姿が80歳のリュービモフのそばで目立った。それでも同年暮れには自ら演出した『ボリス・ゴドゥ

フ』の主役を演じ、力強さを欠いたものの、モスクワ芸術座100周年記念プログラムの最後を飾る舞台を見せてくれてよかった。

これまでも書いてきたように、彼の功績は60年代にソブレメンニクという演劇集団を組織し、ソビエト演劇界を刷新する一役をになったことにある。その彼が、屋台骨の傾いた大劇団の修復にかりだされたのは、彼の栄誉でもあったが生命を削る仕事でもあったろう。70年代にロシチン、グリマン、シャトロフなど現代作家の舞台を見せてくれた時や、ソブレメンニク時代の僚友たちととりくんだチエーホフの「かも

め』『ワーニャ伯父さん』には、いささかの輝きもあったが、その友人たちにもつぎ先立たれ、伝統ある芸術座が問題の多い集団になり果てている。彼の心残りが思いやられるが、元氣なタバコフが彼の後を継いだのがせめてもの慰めだ。

88年の来日時は芸術座の長として、ほとんど舞台に立たなかった。エフレーモフの姿を私たちが記憶するのは数々の映画や舞台で見た俳優としての彼である。スタニスラフスキイの真の継承を目ざすと若い頃主張し、編みだした彼の演技は自然体のリアリズムとも言うべきもので魅力があった。

グリゴリーイ・ゴーリン 6月16日没。日本では知られていないが、60歳の若さでの急死はロシア演劇界に衝撃を与えた。その衝撃の大きさは新聞に掲載された文化省、演劇人同盟、モスクワ俳優会館の追悼の辞で

が、最近相ついで他界したが、ここでは日口演劇交流に力を尽くした2人を挙げておこう。

もうかがえる。15の戯曲、10のシナリオ、10冊の本の著者。現代ロシアでもA・ガーリンとならぶ多作の劇作家で、ほとんどの作品がモスクワの人気劇場レンコムやマヤコフスキイ劇場はじめロシア各地、海外の舞台に上がっている。2年前、日本でも、桜井訳の『牛乳屋テヴィエ物語』が上演された。歴史的、社会的嵐の中で真摯に生きる主人公に注がれる、作者の眼差しは暖かかった。

日本では築地小劇場ゆかりの人々



G. ゴーリン作『牛乳屋テヴィエ物語』レンコム劇場 1989年

宮沢俊一 2月24日没。彼との何回かの出会いは、日本でもモスクワの方が多かった。劇場へ一度も足を運ぶことができないほどの身体で、無謀といえるモスクワ行きを強行した晩年の彼とも会い、その執心の強さに感心した。日口演劇交流における彼の役割と成果は大きい。ロシア演劇人や劇団の招聘につとめた。一級演出家のA・エーフロス(81、82年)、V・フォーキン(87、89年)、S・ユルスキイ(86、98年)を招び、詩人オクジャワやユルスキイの朗読会を組織した。また赤字にもめげず、現代ロシア文学紹介のため専門出版「群像社」をつくり、自らも翻訳『桜の園』、ヴァムピエロフ作品集2巻、アブラーモフ『兄弟姉妹』を出した。

松下 朗 4月28日没。初めて会ったのは90年代初め、極東の旅から帰った直後だった。ハバロフスク・ドラマ劇場で彼の名を支配人から聞いたのだった。彼のロシア演劇人との交流、美術家としての仕事は88年ドラマ劇場、92年青少年劇場から始まり、次にオムスクに移る。94年オムスク第5劇場での演出、96年ジャパン・フェスティバルの組織。ドラマ劇場での97年『砂の女』、98年『どん底』美術。さらにロシア劇団の日本招聘がある。オムスク・ドラマ劇場98年『三人姉妹』、『砂の女』、ノヴォシビルスク『スターリ・ドム』劇場99年、00年。東京芸術座のオムスク公演に同行した時の彼に感じたのは、控え目な表情の内に秘めた激しい情熱だった。

以上4人はいずれもかけがえのない仕事をした人々、さて21世紀にはどんな人が登場するのだろうか。

若い演出家ヴェーニヤ

ヴェーニヤ・スカリーニク、31歳。自らについて語ってもらった。彼の話をしておこう。経験は人それぞれに違いがあり、それをどう切りひらいていくかもみんなそれぞれ。しかしゼロから出発する若い演劇人の一つの典型と言えるかもしれない。

彼の両親は、ロシア系ユダヤ人の父も日本人の母も出版社に勤め演劇人ではなかったが、演劇界に知人があった。その縁で8歳の時、ソブレメンニク劇場「ロレンツアツチョ」の舞台に立つ。この子役は自分で工夫したこともあって評判がよかつ



ヴェーニヤ・スカリーニク
2000年4月

た秋、プーシキンの作品をとという教授の指示を無視して、演出を始める。稽古は大学で夜中にやった。一部を稽古は大学で夜中にやった。一部を先生たちに見せて認められはしたが、稽古は相変わらず夜中にやって仕上げた。2年間は上演禁止されたというが、その後大学ホールで、卒業年時にはフォメンコ工房のレパトリートとして公開されたし、ノヴォシビルスク、その他のフェスティバルに出演、モスクワ芸術座100周年記念行事でも披露した。

4年の時、ゴリキイの「別荘の人びと」という大作にとりくむ。こちらはテキストを読みこむ確かさとして造型してみせる彼の技量を納得させる3時間半であった。フォメンコ教授たちの指導は見て批評するだけで、あくまで学生が主体となって仕上げるという原則が守られている。演出科学生たちは俳優科学生とともに教授たちの演出舞台に出演する。

た。ロシア人学校(11年制)では文学の先生と力を合わせ、自ら台本を書き演出俳優として舞台に立った。学校卒業後、86年、演劇大学を受験したが失敗、兵役に就く。軍隊内のすさまじいじめ、リンチで負傷し病院に入り、半年で兵役免除。その経歴のため医・法・理学部などの受験資格は失なつたとか。88年スタジオ劇団を組織するもこれはすぐ解散。89年1月はっきりとした構想を持ち、友人を集めてスタジオ劇団「チヨールヌイ・クヴァドラト(黒い四角)」を創立した。秋田雨雀/作「国境の春」を脚色・演出。雨雀だけでなくゴリキイ、マヤコフスキイ作品も織りませた意欲的な舞台だった。

地区から借りた住宅地下室の改装費用も、劇団員約10人の給料もすべてヴェーニヤが賄った。彼が通訳で稼いだ外貨は当時それほど価値を生んだ。ともあれ、スタジオ劇団は

これは勉強になったとヴェーニヤは言う。ジェノヴァチ/演出の「冬物語」、フォメンコ/演出の「結婚披露宴」などである。ヴェーニヤ演出2作品は外部劇場でも上演、批評界の話題にもなった。フォメンコ工房のレパトリイにのこるかど期待されたが、残念ながら、フォメンコの第三代弟子にあたるこの学年は卒業と同時に工房にのこらず、解散することになった。ヴェーニヤの2作品も98年6月以降上演されていない。不況の今に演劇界での仕事をみつけるのは容易でない。先生の紹介や、ひきあいがあっても演出者と劇場や俳優との出会い、共同の事業が成り立つのは簡単でない。それでもヴェーニヤはプーシキン劇場でオストロフスキイ作品の演出に成功し、批評にとりあげられた。今はモスクワのある有名な劇場に演出家として所属し仕事するかたわら、映画大学で

自ら経費をのみ出し維持しなければならなかったということだ。この頃モスクワに生まれた数百のスタジオは経済状態悪化とともに消滅して、国からの援助やスポンサーを見つけれられる数個の小劇場のみが残った。ヴェーニヤのスタジオは日本へ行つての留守中にのつとられて、彼はすべてを失った。

映画撮影中知りあった女優ナースチヤと結婚、翌92年長女誕生。ヴェーニヤは演劇大学に再度挑戦。93年秋、300倍の競争率、5つの関門を突破して、人もうらやむP・フォメンコ教授指導の演出科に入った。5年間の在学中、彼は先生たちに鍛えられながら、かなりやりたいことをやつたようだ。

まず、一時モスクワの若い人たちに人気だった「ガルパゴニアード」。20年代の無名作家のものを劇化した不条理劇。級友が出演する。入学し

講師として(ただしこちらは無報酬で)教えている。近日タバコフ・スタジオ劇場に彼の演出作品が出るかもしれないと聞いた。幸運を祈る次第である。

蛇足をつけ加えておくと、ヴェーニヤたち演出科は13人在籍したが、同期生で成功していると言えるのはサチリンコン劇場で既に2作品を出しているE・ネヴェージナである。

私の30年物語(3)

80年代前半・ベレストロイカ

77年、株式会社松竹がBAAAP(全ソ著作権協会)と共同して、ソビエト演劇代表団を招んだ。ツァリョーフ、エフレーフ、アンドレーエフの演出家・俳優3人とBAAAPのイワーノフがやって来た。このイワーノフとの知己は大きい。モスクワに訪れるたびに話題作を教わつたし、望みの戯曲を提供された。私の書庫



『ワゴンチク（移動宿舎）』 演出 ギンカス
モスクワ芸術座小ホール 1985年

にある数々のプリント台本は、それだけである時期のソビエト演劇を語る資料だ。ソ連崩壊でこの組織は解消し、今は台本の入手しにくい国になってしまった。レニングラードで名を聞いていたアンドレーエフとは作家ヴァムピーロフに関心を持つ同志として親しくなった。ふり返ってみると人との縁で私の幸運はひらく。ユルスキイを紹介してもらいモスクワへ移ったばかりの彼と知り合ったのも、イワーノフのお陰だ。

作家同盟日本課のレージナさんと会ったのが83年。84年から作家同盟に招待してもらおうようになり、私の軸足はレングラードからモスクワに移る。83年にトフストノーゴフのポリシヨイ・ドラマ劇場が来日したのを機に翻訳書を2冊出したあとで、もっといろいろの劇作家を知りたいという希望がかなうことになった。重鎮のローゾフ、永い雌伏の後で作

ったので、演劇界の一大事件になったのが85年3月、運よく見る事ができた。演劇界のお歴々はもとより、あのチェロの名手ロストロポーヴィツチ夫妻も来ていた。実はその1週間前にチェルネンコ書記長が亡くなり、ゴルパチョフがその後任に決ま

品が舞台に出始めたヴォロージンに親しく話を聞いた。演劇学者パペーリュイイやシャフリアージソフから教わった「80年代初めの新しい波」の劇作家A・ガリーンやL・ペトルシエーフスカヤと知り合う。

ガリーンはもう売れっ子、流行作家と言っているくらい、あちこちで上演されていた。大衆的にも人気のある「レトロ」（宇野重吉／主演・演出時の題名「こんな答では…」）は84シーズンは全ソで100以上の劇場で上演、外国にもよく売れていた。「せりふがいいね」は宇野評だが、生きた言葉とともに作劇術がうまい。70年代のヴァムピーロフ以来のヒットだから、ポスト・ヴァムピーロフの作家とも言われた。やがて「夜明けの星たち…」という社会性ももろに含む作品（マイルイ・ドラマ劇場89年来日公演演目の一つ）が世に出る。84年知りあった時には

っていた。ペレストロイカという言葉はまだその時は聞こえなかったが、彼女の作品が舞台にのること自体ペレストロイカである。それまでに粘り強い長い交渉と稽古の何年かがあったのだから…。

そう言えば、国家元首の葬儀が行われたその日の夜に、モスクワ芸術座で試演された「ゴロヴリョーフ家の人々」も、19世紀の諷刺作家の辛辣な作品を、当時注目されていた気鋭演出家ドージンがつくった舞台。この試演会も熱い興奮に包まれていた。スモクトノフスキイが狡猾な主人公を演じ、彼の代表作にもなり得る適役だった。

思えば演劇界では長い「お上」に支配されていた時代を抜け出そうという気配が、あちこちでうかがえた。あと一つ書いておこう。83〜85年の毎春、モスクワやレニングラードに滞在していて、とくに目についた

控え目ながら内に主張をもった好青年と見たが、その時にはもう「夜明けの…」は書きあげていたのだ（88年にやっとモスクワの「テアトル」が掲載）。今も旺盛な執筆活動とともに、モスクワのあちこちの劇場で自作の演出もしている。

ペトルシエーフスカヤは人間の真実を活写して歯に衣させぬ、妥協しない作家。無名時代、生活に追われ、子育てしながら、夜ごと洗濯機の上でも書いた。その作品も到底検閲を通るしるものでないから、演出家が自宅で稽古をし、そこで友人たちに秘かに見せる、当局が踏みこんで来た時には、もう別の場所上演している、というのは本当であった話。インタビュの時には、ロシアのジャーナリストとはいっさい会わない、あなたが日本人だからと言われた。その彼女の「青い服を着た三人娘」がレンコムという大舞台にかか

のは小ホール上演である。実は82年あたりから大劇場も稽古場その他の小ホールをもち、意欲的な作品をつくっていた。モスクワ演劇界の小劇場は若い作家、演出家による作品を続けさまに出し評判をよんでいた。モスクワ芸術座も5階に設けた小劇場で「ワゴンチク（移動宿舎）」ギンカス演出などの秀作を出した。演出の大家たちも自分の劇場で小ホール公演を出していた。例えばレソソビエト劇場、ウラジーミロフ／演出「賭博者」（ゴーゴリ／作）や、サチーラ劇場、V・ブルーチェク／演出「桜の園」（チェーホフ／作）である。

この「桜の園」はそれまでもそれ以後も見た数多くの上演の中で、最も感銘の深い納得できる舞台であった。劇場5階稽古場に設けられた舞台は本舞台と同じ広さ。客席は壁際半円形に舞台を囲む一列で80人くら

い。装置は簡潔。そんなに高くない天井一面に張りめぐらされた紗布に桜樹が一面に投影されて、夢幻的な雰囲気をつくる。登場人物はみなこの劇場のトップ俳優たちが演じているが、チェーホフの世界を濃密に現出させ、上演中は配役など考えなかったのに、幕の下りた後プログラムに目を通して、ロバーヒンをあのA・ミローノフが演じていたのにあって驚いた。このロバーヒン役について、後に第1回国際チェーホフ会議である評論家も指摘していたが、秘かな憧れに胸を焦がしながら、ひた



『桜の園』演出 V・ブルーチェク
サチーラ劇場 1984年

すらラネーフスカヤ夫人に尽くす、感受性のこまやかなビジネススマン、いや知識人の一角を占めるロバーヒンであった。「あのミローノフが」と書いたのは、当時彼は映画・舞台に活躍する超スターで「三文オペラ」のメッキ役などでよく知られていたからである。ロバーヒンについてはチェーホフが書いている。「役者が音楽家にもありそうな、やさしいきやしゃな指をしている」と。だから粗暴ながさつなロバーヒンを舞台で見ると私は腹を立てて心の中でミローノフを思い出している。

観劇の後、ブルーチェクを訪ねて話を聞いた。彼はメイエルリドの弟子で10年間その舞台に立った。彼はチェーホフを過去の演出から救い出し、自らのコンセプトをつくった(チェーホフ自身スタニスラフスキの演出が気に入らなかった)。「チェーホフが描きたかったのは、社会

的見取図の中での人間の心の世界の豊かさ、真実さ」とか、「シンボルとしての桜の園」とか、「3幕の舞踏会の音楽はレズギンカ(ラネーフスカヤの不安をかき立てるコーカサスのリズム)」とか、話は尽きなかったが、小劇場の意義についても話は及んだ。彼は三つを挙げる。第一は、現代の課題に答えるコンセプトの発見。第二は、若い作家や演出家の登場をうながすこと。第三は、俳優、ことにスターたちの演技の洗直し、型からの脱出。

今これを書きながら、それから10年後、演出家P・フォメンコがワフタンゴフ劇場のスターたちを甦らせ「罪なき罪人」の舞台は、この第一、第三に当てはまると思った。「桜の園」はミローノフの天逝によってもう見る事ができないが、「罪なき罪人」は今も生きているレポートリイである。

北京レポート ⑤

中国演劇情報

中国の首都北京が政治の中心であるということ、上海が経済の中心であるということは、日本人のよく知るところであろう。この上海という街は、経済の中心というだけでなく、近代及び現代中国史の上で、政治的、文化的に極めてユニークな位置をもっている大都市である。

というのは、新中国成立以前、及び成立後の大きな政治運動の起こるきっかけとなった文化的な事件や運動が上海から始まり、それが後に全国に波及し政治的な大事件に発展するというか、変化してゆくといったことが、たびたびあったからである。その最も顕著な例が上海に端を発し

上海編

坂手日登美(劇団息吹)

た文化大革命であろう。

中国話劇史の上でも上海は重要な位置を占めている。

中国の話劇の歴史は、1907年、日本の東京に於て、中国人留学生が演じた『黒奴吁夫録』(アンクルトムの小屋)をもって始まったとされている。しかし、上海では、1899年に、ミッシヨンスクールに於て、学生が英語でヨーロッパの劇を上演している。

1920年代、極端な商業化から創造的に墮落し疲弊した文明劇に対して、アマチュア主義演劇が中国話劇運動の主流となった。そして、上海に於て、中国第一番目のアマチュ

ア劇団「民衆戯劇社」が1921年に創立されている。

であるから、ぜひとも、現代上海の演劇事情を知りたいものとかねがね思っていた。

次に紹介するのは、2000年1月〜8月までの上海演劇界の最も新しい作品と、作者、俳優などをレポートしたものである。

上海話劇芸術センターおよび

上海工人文化宮話劇隊との出会い

上海の演劇事情をレポートするべく、5月9日に私は上海に着いたが、めあての話劇は、上海市内では、どの劇場も上演していなかった。そこで、思い切って上海話劇芸術センターに電話をかけた。そこなら必ずなにか情報が得られると思ったからである。電話に出てくれた女性に、自己紹介し、上海の話劇事情を知りたい旨を伝える。

女性は即座に「現在、上海市内の中心部では、どこも話劇の上演はしていません。ただ今夜、浦東地区呉松の劇場で『中国製造』という大型話劇を上演します。市内から1時間以上もかかる遠い所なので、もし貴女が観たいのなら、午後4時に、このセンターからバスが出るので来てください」といつてくれた。

ありがたい返事に、大喜びで、午後4時少し前に話劇センターに行った。4時に出るバスが観客送迎用のものだと思ういたら、実は芸術センターから呉松の劇場に俳優やスタッフを運ぶためのもので、総勢70人もが乗り込んできた。

電話を受けてくれた女性は、夏恵明という制作部の人で、バスの中で、いろんな人たちを紹介してくれた。「日本の『演劇会議』という雑誌に上海の演劇情報を書きたいのだ」という私を、スタッフもキャストも大

変歓迎してくれたうえに、彼らといっしょのテーブルで夕食までもごちそうになってしまった。

ここでわかったのは、この夜の公演は、上海总工会傘下の労働者が主とした観客で、彼らのための移動公演であるということ、また、出演する俳優は、上海話劇芸術センターだけでなく、上海市工人文化宮話劇隊や上海警備区文工団などの業余の俳優も多数参加する合同公演だということであった。

上海市工人文化宮話劇隊と
上海話劇芸術センター

上海には、上海市总工会（労働組合総連合会）というものがある。いろんな工場や企業別に工会（労働組合）があるが、总工会はその上部団体である。

上海市工人文化宮は、总工会によって運営されている、労働者のため

の余暇活動センターのようなもので、演劇活動をする話劇隊、京劇等の伝統演劇活動の戯劇隊、舞踏隊、太極拳隊などさまざまなグループがあり、それぞれに独自の活動をしている。

そして、『中国製造』の制作資金のおよそ2分の1が、上海市总工会から提供されており、また、観客を集めるにも、总工会が協力しているとのことであった。

一方、合同公演の創造面で重要な役割を受け持つ上演話劇芸術センターは、専門劇団であり、中国の演劇界、映画界において重要な位置を占めている。「中国製造」で主役劉子義を演じる呂涼、その恋人夢情を演じる朱茵は、共にこの話劇芸術センターに所属する国家一级俳優である。彼らは舞台だけでなく、映画やテレビ等で活躍しており、幅広いファンを持つ人気俳優である。



『中国製造』

上海話劇芸術センターの歴史等については、『演劇会議』95号（1997年11月号）の「北京演劇レポート」で詳しく説明しているので、再説明を避けるが、今年（2000年）の夏、「安福路」通りに、大、中、小3劇場を有する総合ビルが完成し、同時に3本の芝居を上演できることになり、文字通り上海における話劇芸術のセンターとなった感がある。

大型話劇『中国製造』
MADE IN CHINA

初めに私は、上海が中国の経済活動の中心であると書いたが、話劇『中国製造』は、間もなく確実にW・T・O（世界貿易機構）に加入しようとしている中国の、国营企業、労働者の意識改革をテーマにした芝居である。パンフレットより作品を紹介しよう。

制作者・李勝英氏

（上海話劇芸術センター）
中国は、まず自己に対して「ノー」といおう。そこから世界との対話が始まるのだ！我々は苦難な探求を経て、最後に「中国製造」メイドインチャイナと言えるものを製造することができるとだ……。

作者・賈鴻源氏

国营企業の改革はむつかしい。改革を題材にした作品を書くのは、同様にむつかしい。無数の改革者が奮闘精神をもっていったように、もし私の失敗が現実的な問題をテーマに芝居を書くことに対するいささかの経験になるのであれば、私はそのような失敗者になることを苦としない。

演出家・王晓鷹氏（中国青芸）

間もなく中国がW・T・Oに加入しようとしている今日、国营企業が



『去・年・冬・天』

国産のブランドを創り出すこと、これは今目的な大課題だ。しかしこの課題は、ただ民族感情や民族の自尊心の高まりに期待しているだけで解決できる質のものではない。それはもしかしたら、開放された中国が、世界に直面しようとする時、まずしなければならぬのは敢えて自己と対決することかも知れない……。

この芝居は、決して国営企業の改革だけを言おうとしたのではない、さらに人間、人間の感情、愛、友誼、人間の永遠の記憶や、解き放ち難いわだかまり、そして深いところに存在している夢など……。

労働組合が資金を提供し、その傘下のアマチュアの演劇活動家と、トップレベルの専門演劇人が、同じ舞台に立つということが、「どのような意味をもつのか?」「創造の質が向上するのか?」「低下するのか?」といった論議は、内部的には論じら

れたようであるが、当日の舞台は、新鮮な若さ溢れる気持ちの良いものであった。

上海のアマチュア演劇活動家

私は後日改めて、上海市工人文化宮話劇隊の代表的俳優、張孝中氏にインタビューをした。

張孝中は「中国製造」では、技術革新に取り組む化学者、白少傑を演じており、そのさわやかな演技と年齢を感じさせないマスク、型にはまらない自然な役づくりが印象に残っていた。彼は1966年、解放軍芸術学院話劇演技科を卒業しているが、この年に起こった、いわゆる文化大改革のために、農村に下放され農業に従事し、1969年に上海鋼鉄工場に配置され、それ以後、退職するまで、爆破工、緑化工として工場で働いていた。

1972年に上海市工人文化宮話

劇隊に入り、現在まで28年間、アマチュアとして演劇活動を続けている。アマチュアとして演劇を続けることの大変さを問う私に、彼は特別気負った風もなく、「芸術は生産の基礎の上に成り立っているのです。また、上海の労働者は解放以前から(新中国成立以前から)、労働者は物を作るだけでなく、文化面でも労働者の力量を発揮しなければならぬ、という伝統的な思想があるので」と答え、さらに「上海は労働者の街です。この街で労働者の芝居をやらしたら、俺たち以上にうまくやれる劇団はありません」と付け加えた。社会主義国の労働者であり、上海アマチュア演劇のリーダー的人物の、模範回答とも言うべき見事な答えであった。

だが、個人の意識としてはそうであつても、演劇活動に対して工場が常に理解があつたということではな

かつたようだし、家族の理解を得るのもなかなか大変であつたようだ。この辺の事情は、資本主義国日本でアマチュア演劇をやっている人たちとほとんど違いはないように思う。

注目される新人作家の登場

これ以外に、2000年に入り注目されているのに、上海話劇芸術センター小劇場で、春から夏に連続して上演された『去・年・冬・天・Last Winter』(去年の冬)と『WWW・COM』がある。2作品とも作者は

喻榮軍。『去・年・冬・天』は彼の処女作である。

喻榮軍は、体育大学を卒業後、全く畑違いの上海話劇芸術センター制作部に入った人である。中国の演劇界では、多数の演劇大学卒業者が、重要な位置を占めている。その中で、彼のようなケースはまれである。

上海芸術センターのような大きな組織が、評価の定まらない新人の処女作を、書きおろされてすぐに舞台にのせるようなことは非常に少ないことだそうだが、それが、創造面ばかりでなく、制作的にも大成功をおさめ、引き続き上演された『WWW・COM』も好評で、北京でも今秋に上演されるという。

上海の日報『文匯報』(2000年3月2日号)は「27才の喻榮軍の処女作『去・年・冬・天』は今春、上海話劇界のホットな話題となつて

いる。2月末、この劇は30ステージが満席であつただけでなく、……、大胆に若い新人を起用し、特別なことに、それが非専門作家であるというのは上海話劇芸術センターの舞台では、初めてのことである」と報じている。

小劇場とは言え、30ステージをほとんど満席にできた作者は、この5年来、初めてのことでそうである。なお『去・年・冬・天』は作者の承諾を得て、坂手が日本語訳をすすめており、近く『演劇会議』誌上で発表の予定となつている。

『去・年・冬・天』

『去・年・冬・天』は、大都市上海に地方からやって来た一組の男女と、1人の老俳優が織りなす人間模様である。中国で外地人と呼ばれる地方出身者が、上海のような大都市で、仕事や住居を得ることは、なみ

たいていの苦勞ではない。

日系企業に働く李成（尹錚勝）は現実的、功利的な人間である。その恋人白蘭（薛佳凝）は教師であり、2人は結婚はしてないが同居している。彼らに部屋を貸す陸少豊（許承先）は老俳優、妻の死後、淋しい一人暮らしに耐えられずこの2人に部屋を貸す。この3人によって、大都市に暮らす人間のどうしようもない孤独感と焦燥感が描き出される。愛情より経済的成功を求めて、8歳年上の日本女性と結婚する李成、悲し



『WWW.COM』

み激しく怒りながらも、憐憫の情をもって別れてゆく白蘭。妻を失なった悲しみに加え、俳優として自信を失なった陸少豊と白蘭との交流等が、ドボルザークの交響曲「新世界」の流れる舞台上で繰り広げられる。

『WWW.COM』

喻榮軍の第2作であるが、これも30ステージ上演され、チケットは完売、客席には、上海の若いインテリ層が詰めかけていた。

中国でも、インターネットが急速に広がっているが、この作品は一組の夫婦が結婚生活にふと感じた奇妙な危機感と、インターネットの出現によって変化する人間関係、を前作『去・年・冬・天』とは、全く異なる手法で描いていて面白い。

虚偽と真実が交叉し、冒険や新奇さ、誘惑と刺激に溢れるインターネットが現代人の感情生活にどのよう

な影響をもたらし、変化するのだろうか？というテーマを、前作『去・年・冬・天』で李成を演じた尹錚勝が演出している。スタッフ、キャストの平均年齢が30歳未満であるというのも、この作品の新鮮さを示していると言えるかも知れない。

夫程車を演じる楊溢が、現代中国の最も新しい成功者世代の男（コンピュータ一台で金を稼げる世代）を、計算された演技で演じて、成功している。

90年代後半、中国話劇界は全体的に不振であった。特に戯曲に見るべきものが少ない。だが、21世紀を目前にして、喻榮軍のような新しい感覚をそなえた作家が突然登場してきた。それは、21世紀の中国話劇界を担う新しい世代の台頭を示す現象であり、今後の活躍に大きな期待をもたせてくれる。

鈴木瑞穂の俳優人生下

役者やれるかも知れないと思つた『火山灰地』……

聞き手 もう何度も聞かれていますと思いますが、何がきっかけでこの道に入られたのですか？

鈴木 よく「好きでやってる」と言われるんですが、本当は僕はあまり好きじゃなかったんですよ。いい



大人の男が鏡の前で化粧して何を軟弱な、と思っていましたからね。多感な少年時代を軍国主義にどっぷりつかって、古今東西の名作にも、名画や音楽にも触れる機会もなく、ただ、ただ、お国のために死ぬことだけを考えて育ちましたから。

ところが、戦後その「ファシスト」が見事にどこでどう転向したのか分からないんです（笑）。自分でもその変わり目が、よく分からないんですが、一番驚いたのは、京都の大学に入ってすぐに河上肇さんの『貧乏物語』を読んで、ヒエーこういう見方が世の中にあつたんだ、とびっくり仰天したんですよ。

聞き手

熊本 一（劇団大阪）

清原 正次（劇団大阪）

赤松比洋子（劇団きづがわ）

そんなこんなで、自分が、今までやってきたことが何だったのかと考えさせられましたね。

その頃、友人がチェーホフの『かもめ』の切符があるが都合で行けなくなつたのでお前行ってこいと言われて、歌舞練場へしぶしぶ行ったんですよ。ところが、見ているうちに引き込まれて、恥ずかしいほど涙が出て止まらなかつた。こんな美しい、こんなに肌理の細かい人間の心、姿があつたのかと荒んだ心にしみ込ん

だんですね。それが、民芸の「かもめ」だったです。

根はおっちょこちよいですから、観終つてノコノコ楽屋へ行つたんです。宇野重吉さんがいて「お前さんなんだ？」と言うから、「学生です。イヤーこういう世界にびっくりしました」と言ったら、「どうだ、良かったらうちの劇団にこないか」と言われたんですよ。

それで試験を受けて入って、ちょうど久保栄さんの『五稜郭』という芝居をやっていたんですね。忘れもしない、昭和27年12月14〜24日までやったんです。

「役者が足りないからお前も手伝え」と言われ、「いや僕は演出部ですから」と断ったら、「バカヤロ、何が演出部だ。海のものとも山のものとも分らんお前が、偉そうなのと言いな、黙ってやれ」と、例のあの調子で怒られたんですよ。登場人

物が70人くらいですからね、僕は7役もらって、幕が開いたらすぐ死体

になってるとか、兵隊さんだとか、伝令で「申し上げます」とかね。7つの鬘と7枚の着物を持って狭い薬屋を走り回り、障害物競争(笑い)みたいだったですよ。

千秋楽にあーやつと終わったと思つていたら、緞帳が降りた時に久保栄さんが出てきて、みんなの前で久保さんの文庫本と花2輪ともらつて、「きみ、本当によくやったよ」と言われ、その場で準劇団員へ昇格してしまつた。

聞き手 演出部に入られたのに、役者人性を歩むことになつたんですか。

鈴木 もしかしたら役者をやっているかも知れないなあと思つたのは、『火山灰地』でしたね。

村山知義さんの演出で、滝沢修さんの農場長で、僕は市橋たつじとい

てね。「三代(初代・中村榮二、

代目・松本克平)の市橋たつじを全部見たが、今回のが一番良い」なんて書かれてね。その時、宇野重吉さんに言われたのは「創ろうと思つた、自分をらくーにしてやってみろ、その素材があると思うから俺は役に付けたんだ」とね。この舞台で誉められたことで、ひよっとしたら役者が続けられるかなあと思つた、きつかけになつたんです。



『火山灰地』

剛速球の役者が軟投モ てきるようになった…

聞き手 それから順調に、次々と役についていかれたんでしょ。

鈴木 いやダメでしたね。役に付いてはいましたが、泣かず飛ばずで、ずーっと低迷してました。自意識過剰なんです。自意識のかさぶたがなかなか取れない。『火山灰地』で誉められすぎて、「あれをやれたんだから」とこだわり続けたんです。

苦しんでいるときに、菅原卓さん演出の『るつぽ』に、ジョンプロクターの役をつけられた。新人としては大役でした。

ここで演技指導にあたっていた滝沢さんに徹底的にしごかれた。鞭を持っていましたね、「興奮した場面では体の力を抜け、喉も絞るな」と言われ、「その力抜け」ピシッ、

「(こ)も抜け」ピシッ(笑い)。菅原

う炭焼きの役でね。拷問で顔がひき

つれている…あれは久保さんが本当だったから「小林多喜二」とつけたというので「市橋たつじ」という名前にしたそうです。奈良岡朋子さんの村娘とほのかな恋心を抱く役ですね。左翼活動の前歴をかくして炭焼きになつてるんですが…、さあ困りましてね。宇野重吉さんとこに相談にいったんですよ。「こんな大役、僕みたいなベエペエにはできません」と言ったら「キャストイングはおれが決めるんだ、お前が言うことない」と。

それで夢中でやっていると、貧農の宇野さんを舞台の上で殴ったり、小突いたりする場面があるんですが、「お前本気で俺を殴ってるんじゃないか、本当に恨みを持つてるんじゃないか、そんなに力を入れるな、バカ」と怒られたりしてね。

でも、千秋楽の前の日に批評が出



『るつぽ』

さんはそれを見て、ニヤニヤ笑つて見ているんですよ。僕はプロ野球で言えば、剛速球投手だったんですね。変化球が投げられない。そんな厳しい稽古だったが、幕を開けると好評でね。

聞き手 私も見ました。大阪の労働例会でした。とても衝撃的な舞台で、あの時の鈴木さんの演技というか役は、目に焼き付いています。まだ、芝居を見だしたばかりの頃でしたけど……。

鈴木 ありがとうございます。あの役で芸術祭の賞をもらったんです。よし役者をやっつけていこう、剛速球投手の役者がいてもいいだろう、と思いました。

それから何年かして、宇野重吉さん演出の『思い出のチエーホフ』でチエーホフの役をもらった。こんどは宇野さんに徹底的にしごかれた。あの地獄のような過酷な稽古で、いままら笑って言えるけど、当時は大変でしたよ。若い才能のある人たちが、耐えきれずにどんどん辞めていきまされたからね。僕はどんなに過酷でも、まさか殺されることはないだろうと思っ、とにかくねばりました。



『思い出のチエーホフ』

たとえばね、「動くな、瑞穂動くな」と立ってる。前を向くな、後ろ向きに立ってる。絶対に動くな」と言うんですね。そう言われたって相手のセリフに反応して、少しは動いたりするでしょう。すると「動くな、邪魔なんだ、じっとしてろ、パカ」とくるんですね。

しまいにこっちも頭に来て、稽古場の真中であぐらをかいて座ってしまっただけです。そしたら、宇野さんは敏感な人だから「おい、だれかお茶持っていってやれ。瑞穂が怒ってるよ」と言ったので、早川ちゃんが

お茶を持ってきてくれたりしてね。

聞き手 早川昭二さんですね、たしか演出助手をされていた……。

鈴木 そうなんです。動かずに相手のセリフを聞いて、じっと心の中にエモーショナルなものが高まってくるのを、宇野さんは要求していたのでしょね。今頃になって、そのことが少しずつ分かってきたんです。その後、みんなに慰められたりして……。早川ちゃんも「依怙地になるなよ、宇野さんだから敏感に察してくれたけど、本当はこんなこと大変なことなんだよ」って。亡くなった清水将夫さんからも「お前ね、どこかでチエーホフを演じようとしてるだろう、あの偉大なチエーホフを。そうじゃないんだ。お前がチエーホフに共感することだけをやれ。絶対にチエーホフ像を演じようとするな。素直になれよ」と言われてね。もうどうとでもなれと思っ、翌

日の稽古で、静かに自然に普通の声でゆっくりやっただけですよ。そして宇野さんが「それだよ、俺ははじめからそれがほしかったんだよ」と言われて、「ネーっそんなの、でも、明日もやれと言われても俺できないよ」と、恐ろしくなっしまいましたね(笑い)。

このとき学んだのは、柔らかく演じることですね。エネルギーを貯め込んで演じる、内面のテンションをいっばい上げておいて、非常に柔らかく言うと、お客さんにすーっと伝わる(ここで表情と呼吸を使っての実演が入る)。内面を上げないで柔らかく言うとそれだけになってしまふ。この役でこのことができた、使えるようになった。心の開放勝ち取ったというんですかね。

この舞台も好評だったので「俺はいわゆる、変化球も投げられるのかも知れない」と初めて思いました。

聞き手 滝沢修さんの後継ぎみたいな位置におられた人じゃないかと、外から見て思っただけですけど、なぜ、民芸を出られたのですか？

鈴木 一番大きな原因は、宇野さんという巨大な存在にすべてを任せ、いわば「寄らば大樹の陰」の風潮、なによりも宇野さんの首が縦に振られるか、横に振られるかが決定的で、それに対する批判の声が出ない。僕自身はその批判を言う勇氣を持てなくなってきたことです。自分の「事なかれ主義」の臆病さです。それで一番悩んだ。

僕は民芸に育てられ、役者の基礎を創ってもらった。だからここを出たら何もできないんじゃないか？ 悩み抜いて清水将夫さんに相談したら、「お前ね、ここで育ったからこしかないと思ってるけど、ここで腐るのなら外でやれ」と言われた。そこでつらかったけど外に出た。42

歳でした。

聞き手 その時、たかさんの人が出られたんじゃないですか。その人たちと新しい劇団を創られたのですか。

鈴木 多勢出たんですよ。その人たち全部じゃないですが、早川昭二くんたちと「銅鑼」を創ったんですけどね。なにしろ金が無かった。生活できなかつた。それで、「銅鑼」に籍を置きながら、其田事務所に入っ外の仕事をするようになりまして。映画も五社協定がなくなっ、日活以外にどこでも出られるようになった。

森川時久さんや岡本愛彦さんのドラマでずいぶん勉強になりました。山本薩夫監督の「戦争と人間」のナレーション、山田洋次監督の「遙かなる山の呼び声」も、思い出深い作品です。

たかさんの作品に出させてもらっ

て、良い仕事もありましたし、あんまり良くないのもありました。でもね、そんなのにかぎって再放送されたりするんですよ(笑い)。

次の開眼がたくて ワクワクする……

聞き手 そんな中で、また自分が開眼したというような取り組みや舞台についてはいかがですか。

鈴木 悪戦苦闘の連続で、開眼ということではないんですが、「橙色の嘘」なんかは特徴的ですね。柔らかく、柔らかく創ろうとした。

老境に入った男が恋を知り、からだの中からのエネルギーの蘇りに、自分でも戸惑いながら、その自分を愛しいと思ひ、楽しむ。そんな人物を出せたかなあと感じますね。

聞き手 そうですね。私も見せてもらいましたが、質の良い楽しさがある舞台でしたね。頑固な老眼科医

師の鈴木さんがとてもかわいらしく(笑い)。あの役はかわいらしさが出ないとダメなんですよ。そのかわり階段から落ちたり、腕立て伏せをしたりと、大変なんです(笑い)。お



『橙色の嘘』

かげで好評なので、6年間続け、日本全国をまわったことになりました。映画ではやはり熊井啓さんの『日本列島』の刑事の役ですね。剛速球だけでも、軟投だけでもできない複雑な役でしたから。「にっぽん泥棒物語」の松川事件の被告も、やって良かったと思える仕事でした。

聞き手 映画の仕事はもちろん、この役をやってくださいと、決めてくるんですよ。

鈴木 そうです。それで脚本を読ませてもらうから、引き受けるかどうか考えるんです。

映画でも、舞台でもラジオでも、仕事を引き受ける三つの基準が、僕の中にありましてね。ひとつは人間がよく書かれたやりがいのあるもの、もうひとつは意味はあまりないが楽しいもので自分の幅が広がると思えるもの、そして最後に、戦争を賛美したりただ現状を肯定して満足

しているものや歴史の歯車を逆転させようとする意図の見えるもの、これは絶対にやらない。

コマーシャルもやらないんですよ。よく話が来るし、事務所を抱えているんでお金が必要なんです。コマーシャルはお金になるんですが、やらない。

昔、亡くなった藤山寛美さんに教わったことがあるんです。あの人は、あれだけの知名度があってもコマーシャルをやらない。「私がトヨタ車のコマーシャルに出るとしますやろ、ところがお客さんには日産の方もホンダの方もいらつしやる。また葉のコマーシャルに出てこれよう効きまっせ言うて、後で副作用の出ることが分かったとき、私責任とれまへんやろう」と言われたんです。すごい人だなあと感じましたね。真似たわけではないんですが、僕もやらないんです。

ロシアの演出家ユルスキー との刺激的な出会い……

聞き手 劇団銅鑼で取り組まれた最近の舞台で、ロシアの演出家であり優れた俳優でもあるユルスキー氏を迎えて『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』をやりましたが、私が見に行けなかったんですが、稽古過程もすごかったし、舞台もすばらしかったと聞いています。鈴木さん自身、ボルクマンを演じられていかがでしたか。

鈴木 本当に勉強になりましたし、作品の解釈においても、稽古のやり方においても、たくさんの発見がありました。

稽古を始める2カ月前くらい前に、個々の役者とユルスキーが長い面談をしましてね。役の突き合わせ、解釈から、その俳優の持っている性格や考え、人柄について、詳しく訊

かれたんですよ。そして、本番の1カ月前に稽古開始ですが、それまでに全員がセリフを覚えて臨みました。稽古がうまくいったり良い表現が出ると大きな声で「ハラショー」「ハラショー」と言うんですね。そして気に入ると「ウォー」とか「ワア」とか、全身で喜びを表現する。女優さんなんかだと飛び出していつて、「あなたはすばらしい」と言っで抱きしめたり、両頬にキスしたり。うらやましい(笑い)ですよ。

聞き手 役者を誉めて乗せていくわけですね。

鈴木 そうなんです。誉めまくりますね。そして稽古が終わってもダメを出さない。「ダメはないんですよ」と訊くと、「ダメはありません。皆さんはすばらしい。よくやっている。だが、その皆さんに私から提案があります」と言っ、一人ひとりに細かい提案をする。反論や異

議があつたら「どうぞ言つて下さい」と言うんですね。

自らがゴールデンマスク賞を受賞している優れた俳優なので、役者の心理もよく分かるんですね。

「今日の稽古は4時間で終わります。そのかわり明日までの課題をやつてきてください。今日と同じ芝居を見せないでください」と言つて、きつちり4時間で終わる。私たちもそれに応えるのに真剣勝負でしたね。僕はこういう提案したり、論議したり、演出も役者も発見しあつて、一緒に創つていくのが楽しいんです。演出者も演技者も、若手も古手も、もつと対等に激論しながら創り上げることをしたいですね。

聞き手 私たちも論議はよくするのですが、論議ばかりして(笑い)、表現に結びつかない。労働条件がますます厳しくなつて、なかなか稽古時間も取れないので、基礎の

訓練も十分できないまま舞台に立っているのが現状ですが、舞台を見ていて気になることはどんなところでしょうか。

美しい日本語を 話す努力を続けて……

鈴木 日本語の乱れが気になります。

若い人の喋り方は、語尾の切れ方に愛想が無さ過ぎますねえ。味もそつ気もなくポンポンと切る。また、ひとつのセリフを一息で言うところを、3息ぐらいに切るもんだから意味が変わる。

たとえば「何々したんだがね、だけどダメだったんだよ」と言うとき、この「何々したんだがね」の「ね」で切っちゃうとダメなんです。息も切らないで「何々したんだがね」、この「ね」で半音上げる、次何が言いたいんだとなつて「結局こうなつ

てしまったんだよ」となるんだけど、

全部ポンポン、ポンポンと切るものだから(ここで半音上げた場合とポンポン切った場合の違いを実演)、結局その人の中に動いているものが出ない。語尾を伸ばす、跳ね上げる、「語尾の砂漠」と言っているんですが、汚いですね。そこで半音上げるか、半音下げるか、一拍空けるかはこまかくやらないと死ぬわけですよ。

聞き手 家でひとりでもできる良い勉強の仕方がありますか。

鈴木 美しい日本語を話してほしいですね。きれいな日本語を話すには、目の不自由な人のために、名作の朗読をテープで出しているのが何本もあるので、それをよく聞いてみる。僕も5本くらい出してます。

それから、声を出して昔の名作をよく読む。たとえば『平家物語』なんて実にきれいな言葉で書かれてい

る。あれは文字で書いているのではなく、琵琶法師の語りで書かれているからでしょうね。

声出して読んで、それをテープにとつて聞いてみる。そうすると、自然に文章の切り方もよく分かる。志賀直哉も名文なので、繰り返し繰り返し読む。朗読を聞く。自分も真似をしようとするんですね。

日本語はどこに比重をかけるかが、むずかしい。全部に意味を持たせると、わずらわしいですね。

地方公演に行ったとき、マーク道具が足らなくて、田舎の町の菓屋兼化粧品屋さんがあつたので、若い人が飛び込んで「ぶたいけしようひんありませんか」と訊いたら、店番していたおじいさんに「豚は化粧せんだろう」と言われた。大笑いしたんですけどね。長音は意識して言わないと伝わらない。縮めてはいけません。意味が変わる。それから、



てには、をやたらに立てない方がいいですね。

聞き手 いま実際にやっていただとよく分かるんですが、文章にするのと難しいですね。全リ演のゼミナールなんかでやれるといいですね。

鈴木 かなり前になるんですけど、皆さんの前でモデル上演して、討論の素材にもらったことがあるんですよ。

聞き手 まだ東リ演と言つた頃ですね。マリオフラッティの『橋』でしたね。

鈴木 ええ。同じ作品を東リ演の方たちが1時間30分で上演されていて、僕と千田隼夫くんが45分でやっ

た。ナチュラルにやると1時間30分かかるんですが、それをすこいスピード45分でやる。どちらが良いか悪いかということではなくて、いろんな取り上げ方、角度があつて面白かつたですよ。

それだけのスピードでやるには、セリフ術と内面の関係をつくるのが大事だし、実感がなくてはいけませんが、実感を演じるのではなく、再構成されたリアリズムでなければいけないと思うんですよ。

だから、若い人たちと先輩の人たちが、同じ言葉をまな板に乗せてどう伝わるか、どう伝えているかをやりとりする試みが、ゼミナールなかであつてもいいですね。僕もそんな機会があればお手伝いしたいですね。自分のために……。

聞き手 ぜひそんな機会を持ちたいですね。

北から南から

● 劇団通信

〔劇団海鳴り〕

こちらはすっかり秋風で早ければ来月は初雪です。第30回の定期公演は「鉄道員」で、9月9日の西興部を初演に北海道演劇祭への参加と2ステージが終了したところで、2ステージとも観客数が予想を上まわり良いスタートを切る事ができました。作者の山本忠利さんにもぜひ足を運んでいただきたかったのですが、遠すぎてまことに残念でした。9月末の紋別公演に向けてさらにレベルアップを図り、感動をお届けできたらと考えております。

〔五十嵐陽子〕

〔劇団 新芸〕

9月15・16・17日の北見市での第19回北海道演劇祭 in オ

ホーツク「ハツカのまち演劇祭」から帰ったばかりで興奮がおさまっていません。16日の新芸の渋谷健一／作・飯田信之／演出、「小樽 運河桜坂」を会う人みなさんがほめてくださるのです。

上演後、即バスで帰らなくてはならない15人の引率者の中村和枝は、渋谷氏や尾田理事長が「大変良かった」とニコニコしながら見送ってくれた時、これは道演集の役員としての仕事なんだな、ご苦労さまだなあ、ありがたいなあと思っていました。北見に残った4人も声をかけてくださる方に、「どんな風に良かったのでしょうか」と聞き返していました。新芸の大会への作品参加は、危篤だった重病人が床上げたばかりで海外

旅行へ行くみたいなのものです。そのことへのねぎらいかと思っていました。

17日のお昼頃、次の上演の始まる30分前です。北見芸術文化ホールへ入りかけた時、主役を演じた鹿角に70歳近い女性が声をかけてきました。「小樽の方ですか。昨日のお芝居、良かったですね。私、小学校2年の時、小樽にいまして、その昭和16年に父が千島に行ってしまったので帰ってきたのは6年後でした。行く時、母は6カ月の身重だったんです。あの、それから息子が小樽商大を出てるんです。お芝居、夢中で観て、いろんなことをいっぺんに思い出して。アンケート書いたこともないので、どうして良いかかわからなくて」。私た

ちは、この方に会うために北見に来たのかも知れない。10月14日の小樽公演は自信を持って上演できる。券も売れる。心から、そう思いました。

〔宮津〕

〔劇団 やませ〕

第8回全日本演劇フェスティバル&岩手湯田銀河ホール地域演劇祭では本当にお世話になりました。特に銀河ホールの新田さん・中野さんをはじめとして、実行委員会の関係者の献身的な協力には感謝の言葉もありません。ありがとうございます。ありがとうございました。小さなミスはありましたが、お陰さまで「我が内なるラビュータ」を劇団員一同精一杯演じることができました。

また大交流会での心暖まる

もてなしには感激しました。

いまさながら素敵な民俗芸能の宝庫の感を強くしました。

さて、八戸に戻り、同じ演目で中学校公演をして一段落と思いきや、休む暇もなく、30周年記念公演に突入。梶谷伸夫／作・栗谷川洋／演出「九戸政実」の稽古が始まりました。短い稽古期間で、若干の不安があるのですが、必死に走り続けるほかはなさそうです。戦国時代末期。あの豊臣秀吉に最後に逆らった奥州の一領主九戸政実の生きざま（死にざま）を現代に蘇らせることができたかと思っております。16世紀末の政実と20世紀末の我々。どこかで結びつく要因が見つかるかと確信しています。公演日は11月18日（土）19日（日）、於・八戸市公会堂文化ホールですので、これをお読みになる頃は終わっているかも…。

〔梶谷伸夫〕

〔劇団 弘演〕

雪のシンシンと降る2月、劇団代表である「青山司」が不慮の事故で突然他界してしまつた。あまりの突然で、団員の動揺はかなりのもので連日みんなで泣いた。しかし、泣いては行かない、青山の遺志をうけつぎ、みんなで頑張らなくては。OBも集まり今年の本公演を追悼公演にすることにしました。作品は、青山が思い入れの深い「泰山木の木の下で」と決まつた。

青山司は、団内では代表として作間雄二亡き後、柱となつて私たちを支えてくれた。もちろん、俳優として、演出としても活躍した。代表作は「風が吹くとき」「泰山木の木の下で」「逢いびき」等々。その中でも「泰山木」では、主役の木下刑事を演じ、その後、再演の時は演出を手がけた。劇中歌も歌いそのフレーズ、歌声は耳に深く残つてい

る。青山司はもういないのだという実感はまだない。でも現実をしっかりと見すえて、新代表、秋本博子を中心に、これからも良い舞台を創っていくかと思う。

（しのぶ）

〔劇団 支木〕

7月7日、8日、稽古場を移転して4年目で、初めてのアトリエ公演「百音」「ももいろのきりん」をうつことができました。しかも脚色、演出、スタッフ、役者が若手中心の、初めての子ども向けの朗読劇でした。おっかなびっくりの2ステージでしたが計約80人（大人子ども半々）のお客さんと楽しい時間を持つことができました。なによりも、自分たちで一つ一つ創造できた体験が大きな財産に

なりました。9月8日には、県信用組合主催の地域イベントで同作品を上演し、140人に観てもらうことができました。これを持ちレバにあちこちまわろうかと意気盛んになっております。

さて、秋公演は11月25、26日、県民文化祭参加で、地元の高校教諭・田辺典忠さんの「昨日・今日・明日」をやります。青森空襲と現代の家族の姿を絡め、田辺風喜劇タッチで描いていきます。詳しくは次回で。

追伸！今回の全リ演フェスはいつにも増して素晴らしい！特に八戸のやませ、劇団大阪の舞台には感動しました！全リ演のすごさを再確認し、仲間であることを誇りに思います。帰ってきて興奮さめやらぬ感じで、話題にしています！

〔有馬美恵〕

〔黒石演劇研究会〕

祭り好き、酒好きの我が劇研も、ようやく台本に目を向ける日々がやって来ました。本当に、今年はいよいよという感じがします。

台本選びに時間がかかりすぎ、例年よりも1カ月の遅れという非常事態となっていました。それでも、秋の本公演へ向け死ぬ気で(?)台詞を詰め込んでおります。

今年はいよいよ帰ってきたオトウサン(北野ひろし/作・古川幸仁/演出)を、10月28日(土)・29日(日)の両日、計3ステージ上演します。

今年も、昨年同様小ホールでの上演となりますが、なんせ今回の芝居は、お通夜の夜の出来事で、登場人物が12人と多い上に、舞台が(6帖間2間ぐらい)狭いため、役者同士ぶつかり合いながら稽古をしています。12人の役者が全員揃って演じるため、下手

へ行こうにも役者をまたいで行かなくてはならない、といった感じなのです。

それも、喜劇なのです。子どもが結託して一家の主人を懲らしめようと、勝手に主を死なせてお通夜をしている最中、死んだはずの主人が帰ってくる、という現実にはあり得ないお話なのです。主の会社の人・叔父・叔母、それに葬儀屋・保険屋まで揃えての子ども芝居なのです。

そんな中にも、「家族」とは何か、どうあるべきなのか、考えさせられるストーリーとなっているのですが、それは、お客様へ委ねることにして、台詞覚えなきや。なんたって喜劇!笑いがとれなければ寒っ。あーっ恐ろしい!間をはずしたら!台詞をはねたら!万事休す。それともうひとつ大きな問題が。役者12人オールキャストでなかなか揃わない。こりや参った。

息が合わなきや笑いなんてとんでもないわ。

演出が怒りまくってます。演出の言うことはわかるんだけどオ、役者はどうした!「早く台詞入れろ!」「顔をもつとクニヤクニヤして!」っていつべんにできねーよ!顔はもう顔面神経痛状態で、頭の中は自分の台詞より相手の台詞が入ってるし。パニックです!みなさん、ってな感じ。

きつと、多分、みなさんがこれを読まれる頃には幕が無事降りていることと思います。いや思いたい。あー恐ろしや恐ろしや。(清野)

〔劇団 だいこん座〕

湯田町での全日本演劇フェスティバルには3人が参加しました。町長さんはじめ地元のみなさんが暖かくむかえてくれたのに感激しました。銀河ホールの施設も良かった。

上演された作品はいずれも水準の高い舞台で満足しました。僕はぶどう座の「お婆さんと酒と役人」と「自立の会の「おこんじょうるり」がおもしろかったです。劇団馬山もセリフはわかりませんでした。が興味深くみる事ができました。実行委員のみなさんありがとうございます。

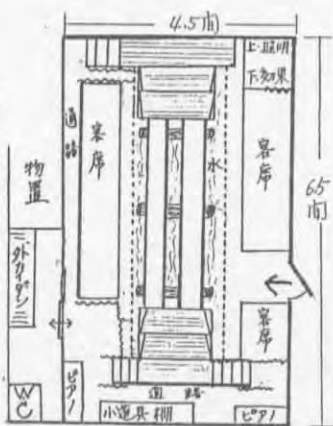
だいこん座は9月23日公演の高橋寛/作・演出の「風の吹く家」(二幕)の追い込みに入っています。家庭崩壊を描いたもので17歳の女子高校生が主人公です。実際の舞台でも17歳の女子1人、男子2人が出演することになり、どうなることでしょうか。いつものことですが本番に合うのかどうか、ハラハラの日々が続きます。

〔劇団 銅鑼〕

☆8月23日、27日、内田康夫/原作「藍色回廊殺人事件」

を銅鑼稽古場小劇場(ドラマファクトリーVol2)で上演しました。脚色・演出/平石耕一。Vol1と同じくこの特殊舞台については今回も平面図とイラストでご紹介します。記述すると長文になりそうなのでご了承ください。

演技エリアは主として水の。空間にのびる4本のロープは吊り橋を表す。青い照明にゆれる水の面や流水音。悲鳴まじりの綱わたり。残暑厳しい折から東の間の涼を感じ



・客席が席
・長襟の甲の水をばって吉野川を再現



ていただけたようです。ちょうど銀河ホールフェスティバルと時期が重なったため全リ演の方々を観ていただけなかったのが実に残念でした。かくして平石版現代日本政治小辞典は――

- I、1月「序章」ト尾瀬沼自動車道を阻止した人々。
- II、4月「樹々の息吹」――環境庁と世論の盛り上がり。
- III、8月「藍色回廊殺人事件」――四国吉野川可動堰への人々の思いや企み。

と、銅鑼のミレニアムは公共事業の是非をめぐるテーマがつぎきました。

〔東京芸術座〕

劇団創立40周年記念公演シリーズも去る9月1日から7日までの藤原新平/翻案・脚色・演出「夜明の街」で終了しました。久々の外部演出家を招聘しての公演でしたので、俳優諸氏には大変刺激的で、触発されるもの多かったです。また、お客さんからも喜ばれ、土日などは補助椅子を出す盛況でした。

東京公演としては、今世紀を飾る公演に成り得たと思います。

学校公演は、「ブラボー! ファーブル先生」(平石耕一

/作・杉本孝司/演出)が巡演最後の年で、九州をメインコースにして前後を東北・関東・近畿を回り、「勲章の川」(本田英郎/作・高橋左近/演出)は、北海道・東北・関東・東海・九州と列島縦断公演です。

在京有志は劇団演技部主催の平石耕一ワークショップ「掌劇場」で汗を流しています。ワンクール・1週間ぐらいで発表まで持ち込みます。年内数クール持つ予定です。そして、劇団としては今世紀最後のアトリエ公演を模索しているところでです。(郡司)

〔青年劇場〕

青年劇場はただいま、第77回公演「島清、世に敗れたり」(作/松田章一、演出/松波喬介)を好評上演中です。(9/15)10/2)

大正期に慧星のごとく文壇

に登場し、50万部という当時としては比類のない大ベストセラー「地上」を発表した島田清次郎。20歳にして頂点を極めた彼の短い生涯を追いながら、現代を問う「島清、世に敗れたり」は紀伊國屋ホール、前進座劇場、府中の森芸術劇場で計16ステージの公演です。

さて、10月中旬からは4つの公演班が全国巡演を行います。お近くでの公演の際はぜひご観劇ください。

◆文化庁 演劇鑑賞会公演他
【愛が聞こえます】

(11/22〜12/19)

岐阜・福島・秋田・関東地方

◆学校公演・子ども劇場公演
実行委員会公演他

【17才のオルゴール】

(10/17〜12/23)

九州・中四国・東海・近畿
地方

【こんにはかぐや姫】
(10/17〜11/9)

フェスティバルも湯田町を挙げての手厚いおもてなしに、温泉以上に心が暖められました(旅館の送迎バス、雨のため交流会々場の即変更、鬼剣舞の披露等々……)。公演参加劇団の芝居も各々個性豊かで、観ていて気が抜けなく感激しました。夜の演劇仲間との集い(酒飲み会)も大変楽しく、有意義な3日間でした。次回が楽しみです。

さて蒼生樹は7月14、15、16日に横浜関内の教育文化センターホールで、第36回公演、坂手洋二作、濱田重行演出「海の沸点」を上演しました。21世紀へ継続提起していかなければならない重要な問題の一つが沖繩の米軍基地であり、そこに至った日本、本土の体制に対し、熱い静かな怒りを常に体内に抱えている、ウテナーの人々の冷め切らぬ感情を伝えたい思いに突き動かされ、難しい芝居と知りつつ挑

東海・関東地方
【翼をください】
(10/16〜12/24)

東海・近畿・中国・関東・東北地方
90年に初演、今年7月に京都で1000回公演を迎えた「翼をください」のさよなら公演が、年末予定されていた。北海道から沖繩まで全国各地で大きな共感を呼び、世

代を越えて感動の渦を巻き起こした舞台です。お見逃しの方はぜひこの機会をご利用下さい。

12月17・18日 かめあり・

リリオホール

19日 神奈川県立青少年センター

21〜24日 新宿・朝日生命ホール

(中谷 源)

【京浜協同劇団】

全日本演劇フェスティバル、こころうさまでした。今

戦しました。幸い、その意気込みだけは感じていただけたと自負しております。

公演終了後の7月27日、座長、濱田重行の妻であり、劇団の制作、広報を一手に引き受けて、且つ、女優でもあった濱田絹子が44歳の若さで急逝しました。各方面の劇団関係者の皆様に心かななるお悔みを頂戴しましたこと、紙面を借りて御礼申し上げます。その死を乗り越え、ただいま、12月15、16、17日の蒼生樹、吉例歳忘れ公演(年一回の鬨物)に向けて走り出しております。どうぞよろしくご支援のほどお願いします。

(勝崎若子)

【劇団 静芸】

湯田でのフェスティバルでは抱えきれないほどの感動をいただき帰りました。ありがとうございました。

回フェスティバルは、上演作品の質が総じて高く、感動的な作品が多かったと思います。夜の大交流会での鬼剣舞は実にすばらしかったですね。湯田町のスタッフのみなさん、そして中野健さんと奥羽ロックのみなさん、ほんとはありがとうございます。

私たちの劇団は、大道芸の部で、バナナの叩き売り(渡辺高志)、警女唄(室野定子)、箱回し・一人人形芝居(城谷創一)、腹話術(城谷護)などで参加しました。

秋の公演は、神奈川県演劇連盟(14集団)の合同公演で「西遊記」を11月に2会場で行います。県内の劇団がこうして合同公演をやるのは初めてのことです。台本も集団創作。盛り上がりがあります。演出には、アングラ演劇の初期、黒テントで活躍し、今はフリーで主にオペラの演出をしてい

る加藤直氏を招き、スタッフにも数人の専門家に入ってもらいました。

11月11日(土) 3時、7時

12日(日) 2時

横浜市・県立青少年センター

11月25日(土) 7時

26日(日) 2時

川崎市・エポック中原

【劇団 蒼生樹】

第8回全演フェスティバルに劇団から3人参加してきました。さすがに銀河ホールは「岩手ぶどう座」川村光夫さんの講演通り、芝居を愛し、芝居を知り尽くした方々が中心になって建てたホールだと感心させられました。細部にわたり裏方の使い勝手よく工夫されていましたし、客席も花道が観客席として使えたり、機数もあつたりで、ここで芝居を観るんだ、観るんだという雰囲気が出ています。

劇団は今春公演を中止し、築40年の稽古場の改築にとりくみ、荷物の整理、運搬、廃棄と忙しい毎日でした。めでたく、たくさんの方々の応援の中でプレハブ2階の新稽古場が9月20日に完成し、いよいよ秋の公演めざして新稽古場完成記念公演の稽古に入りました。

12月2日(土)、3日(日)、サールナートホールにおいて、「野分立つ」(川崎照代作)を上演いたします。新稽古場の整備、荷物の運搬、整理整頓とスケジュールいっぱい秋ですが、木の香も新鮮な広々とした稽古場で、ワクワクしながら、希望をもって公演にむかって出発です。

(山崎三郎)

【劇団 名芸】

湯田町での演劇フェスティバルではお世話になりました。ありがとうございました。

ルでの各舞台は各々に感銘を受け、また町ぐるみの暖かい款待に忘れられない充実の3日間となりました(名芸より友人含め4人参加)。

さて、名芸恒例の子ども劇場は、いつも増して猛暑の中、7月に天白で、8月に南で「冒険者たち」を計8ステージ上演し、約1200人の親子に観てもらいました。演出の不調により、途中から助手の長田が引き継いでの綱渡りでしたが、24人のキャストがまとまってなんとか乗りこえました。しかし「ミュージカル」とうたうには、あまりに非力な歌・踊りといひ、少子化の中で子ども劇場制作面での困難さといひ、これから継続していく上で克服すべき課題の多さも再認識させられた次第です。

また、地元舞台人有志や公募者参加による「反核舞台人の集い」の公演「銀河鉄道2

000」(作/栗木・演出/久保田明)は、参加者の奮闘で一定の反響を呼ぶ舞台に仕上がったと思います(観客実数922人)。

現在は秋の公演を目指して準備しているところです。

●第50回公演

「米泣く村に米降る街に」

作/栗木・演出/片野耕治
11月24日(金)〜26日(日)
名芸平針小劇場

13年前、大阪の演劇フェスティバルで上演した作品の改作再演ですが、50回という節目にふさわしい舞台に仕上げたいと思います。

なお、同舞台を12月2日(土)平針での、全国文団連全国交流集会でも上演予定で、劇団・文化関係の多くの仲間のご参加を訴えます。

それ以降も、来年5月の天白文化小劇場芸術公演として、シェイクスピアの名作「十二夜」(脚本/栗木・演出/

佐野秀明)の上演を決めており、まだまだ休む間のない自転車操業にて走り続けます。

(栗木)

「名古屋演劇集団」(劇団演集)

「全日本演劇フェスティバル」おつかれさまでした!

名古屋市内から約6時間の長旅でしたが、ほっとゆだの駅に着いてからはとにかくくすべて感動の連続でした。

銀河ホールの欄干席からゆつくりと芝居を観劇。宿へ入って温泉に入り食事。交流会。なによりも驚いたのは、ゆだの町全体の芝居に対する関心の深さです。もう、ゆだ全体が観客といっても過言ではないとのこと。「地域に生きる劇場づくり」なんてことをよく耳にしますが、私は改めて日頃我々がやっている芝居づくりというものについて考えることができました。

さて、我々演集ですが、10

月の公演に向けての稽古も、いよいよ残すところ1カ月を切り、佳境に入ってきました。

「海と日傘」

作/松田正隆

演出/浦はじめ

10月13・14・15日

4ステージ

名古屋北文化小劇場

演集の実働団員数も十数人と少し寂しいのですが、だからこそ! いい芝居づくりをしたいものだどハリキッています。「いい芝居づくりをしたい」…当たり前のことのようにですが、そんな気持ちをいつでも忘れずにいたいものです。(磯谷 誠)

【劇団 夜明け】

8月24日の夜9時、私たち8人は、1台のワゴン車に乗り込み中津川を出発しました。たぶん12時間もあればつくだろう、高速道路が途切れたらたぶん北へ向かえばつく

だろうというなんとも不安な出発でした。中央道から長野道、関越道と進むにつれだんだん車の中が静かになっていきます。運転手もそれについてうとうと…などという危険な中、山形で夜明けをひかえました。

そして午前9時、湯田町に到着。まずは目覚ましに温泉と、ほっとゆだ駅の中にある風呂に入り、それから旅館でひと休み。午後からはさあ観劇モードに切りかえて、いざ銀河ホールへ。

いやあ、かつて2日間であんなにたくさん芝居を見たことはなかったです。ブレ企画の「植物医師」を上演した方々。すごくきんちょうしてゑぞ…、でも一生懸命やっているぞ…、っていうのがビシバシ伝わってきました。高齢化の進むわが夜明けも芋ぶとこるが多かったです。

たくさん芝居を見て、ど

の芝居にもすべて感じたのは、ていねいな芝居づくりをすれば必ずお客さんに伝わっていく、ということ。言葉がなくても伝わることでありますからね。このことは芝居をやっていくうえで、永遠の課題だなあと思いました。

それから私たち、銀河ホールの稼働率が80%と聞いてかなりびびりました。1ヵ月30日のうち24日は必ずだれかが利用しているということですよ。わが中津川の文化会館ってそんなに利用されているのか、市民が行ってみようと思えるところであるだろうか、とこのことはかなり深く考えさせられてしまうことでした。

行って良かったと思えるフェスティバルでした。(ちゃん)と芝居を見る合間をぬって砂風呂にも入ってきましたよ)実行委員のみなさん、大変にくろうさまでした。

次回秋の公演ではけいこ場での若手公演を計画しています。若手(女性ばかりですが)で脚本を選び、話し合い、けいこを進めています。

11月19〜26日(22日は休み)計7公演の予定です。題名は「祭」。

長野県安曇野を舞台に、2人の女性のふるさとに対する思いを描きます。

(勝 恵子)

【劇団 はぐるま】

はぐるまの稽古場は、いっになく賑やかになっていきます。今年の岐阜市民芸術祭演劇の部では、市内の劇団の合同公演となり、その稽古場と

【田空になったババ】

作/林大輔(劇団ラッキーキャッツ)

演出/汲田正子(劇団はぐるま)

11月17、18、19日

岐阜市文化センター

今まで、各劇団の舞台をいろいろ見られたり、という交流はあったものの、一緒に舞台をつくるのはこれが初めて。

未だに顔と名前と役名が結びつかず、混乱も少々ありますが、稽古が進めば流れもスムーズになると思います。とは言っても、稽古のやり方から、作品に対するアプローチの仕方、各集団で今までやって来た表現方法の違いなど、合同公演ならではの課題もいくつかあります。でもこれは逆に楽しんでしまおうと思っています。ウチだけではなく、他の劇団にも良い刺激になれば、と思います。

夏のミュージカル劇場「孫

悟空」は、5ステージで3853人の観客動員となりました。年々減っています。来年の作品はまだ決まっています。さんが、公演日程を夏休みの前に持つてこなければ、動員は増やせないのではないかと、話し合っています。

(内田 薫)

【劇団 すがお】

夏の全日本演劇フェスティバルは素晴らしいロケーションの会場で、素晴らしい舞台に出会えていい思い出です。関係者のみなさんに感謝、感謝です。劇団が推薦しました劇団馬山の舞台はかがでしたでしようか。ちよびり心配です。でも、多くの日本の演劇関係者や、地元の方々と交流を結構楽しんで帰ったようで、みなさんに感謝しています。「春香伝」の出演者は、一番の古手で7年、あ

まで様々だったようです。

ところで、劇団すがおは、アイルランドの劇団ドラムリン・ブレイヤーズの招待を受けて7月13日から21日まで、9日間のアイルランド・モナハン市を旅して公演を行ってきました。

日本のアマチュア演劇ではアイルランド初公演のように、総勢25人という大勢の日本人がモナハン市を訪問するというのも始めてで、中日新聞社記者の同行取材までしていただけでした。また、この訪問は桑名国際文化交流委員会のメンバーも同行し、コーラス、日本舞踊も舞台上に乗せて交流してきました。

上演したのは「夕鶴」木下順二／作 加藤武夫／演出でした。現地で子役を2人調達しての公演でした。公演は市内の唯一の劇場「モナハン・ガレージシアター」という名前の公民館のような多目的な

会場でした。ホールは200

人弱の小ホールでしたが満席で、多くの拍手を浴びて好評のうちに終わりました。終演後は劇場内の喫茶(バーカ)でなんと深夜の2時まで交流が続きました。2年後にはまた彼らが来日する予定です。(詳しくは別項で)

■次回公演

「改訂版 いつでも、どこでも、だれとでも」ラサール石井／作 石垣正司／演出
ななわ小劇場公演(稽古場)、10月6日(金) 7日(土) 8日(日) 4ステージ、300人以上の観客動員を目標にしています。入場料金は1000円。

ただ面白いだけの様な感じですが、現代世相を反映した作品で、かつ、女の性というものが面白く反映している女三人芝居です。カラオケや太鼓演奏も入って賑やかな作品で、抱腹絶倒間違いなしの

芝居です。創立40周年記念事業の一環としての公演です。

(加藤武夫)

【劇団 上野市民劇場】

いよいよ秋たけなわ。各地での公演も盛んな時期です。昔の秋の獲り入れは1ヵ月以上もかかりましたが、今は機械化のおかげであつという間に終わってしまいました。しかし一方、農業も減反政策で休耕田が増え美しい田園風景も徐々にうすれゆく淋しい現状です。

さて、夏の演劇フェスティバルは、イーハトウの銀河ホールにて全国と韓国の舞台に熱中してしまいい大感激でした。

また、地元の方々による神楽や鬼剣舞に圧倒され、伝統がしっかりと根づいているのに敬服いたしました。往復24時間の夜行バスは少々疲れたものの、それはそれでなにか

やと収穫の多いフェス参加となり、準備に携わってくださった皆々様に心よりお礼申し上げます。

今後の予定は、近石綾子／作「僕のメリーゴーランド」(11/18、19)を劇団創立49年の締めくくり公演としています。だれもがむかえる「若い」ですが、希望を見出せる舞台にしたいとただいま稽古と格闘中です。(W、F)

【劇団 たけぶえ】

◆9月20日の早朝、韓国の「劇団馬山」から緊急の電話がありました。補助金などの関係で11月の武生に於ける「国際地域演劇祭」の参加が困難になったというものでした。

私たちは何をするのにしてもちよつと大きな事業になれば補助・助成金を頼りにしなければなりません。現に昨年は私たちが補助金が出ないとのことで「劇団馬山」の招聘を

断念、今回に延期しております。

本当に残念なことで、団員たちの落胆は激しいものでしたが、しかしこれで「劇団馬山」とのつながりが切れるわけではありませんので、私たちは近いうちの再会を図ろうと気を取り直しました。

今回の演劇祭は昨年の馬山招聘の延期が発端です(県からの補助もその流れで今年は上積みでいただくことになっておりました)。ですから馬山が不参加になるといろんな意味で不都合が出てきます。そうしたマイナス現象を消化するには1ヵ月余の期間は致命的です。幸か不幸か撤回するにはギリギリの日程でした。私たちはマカオとの交渉はありましたが、今回の演劇祭の中止を決断しました。

21世紀は「アジアの世紀」と言われます。私たちはこれから機会をとらえては国際

的な演劇活動をしていきたいと考えております。今回の一連の討議の中で私たちは、10年にわたるたけぶえの国際交流の軌跡を総括する必要があると決めました。できればそれを「演劇会議」に発表させていただければということが最終的な結論のようなものになりました。

◆そんなわけで11月は「たけぶえ市民劇場」という劇団単独の公演になりました。

すったもんだの挙げ句、上演台本はこぼやしひろし先生と「劇団はぐるま」のご好意によって「はぐるまミュージカル劇場」の作品を使わせていただくことになりました。

それまで台本執筆、演出、それに国際演劇祭の制作と超多忙を愚痴っていた柴野は一挙に普段の活動にもどりました。その分きつと彼は素晴らしい舞台を創ってくれるものと、演劇祭中止の沈んだ気分

を払拭する想いを込めて、みんなの期待は次第に高まってきております。

(柴野)

【劇団 大阪】

5月末に春の公演が終わりましたが、総括もそこそこ6月12日には秋の公演「海の沸点」の稽古に突入。一方で奈良県アマチュア演劇フェスの応援、第1次・第2次の沖繩現地調査(「海の沸点」は沖繩創立30周年企画の検討、そして、湯田フェス上演の「そして」の稽古と装置・小道具の点検・手直しと瞬く間にフェス当日を迎え、総勢29人で湯田に乗り込みました。若干の役者の変更、音響オペがまったくの新人ということもありましたが、温かい観客のみなさんに支えられて無事上演することができました。実行委員会・スタッフの方々にご

の欄をお借りしてお礼申し上げます(上演後慌ただしく帰阪しましたので、感想などお聞きすることができません)した。特に東会議の方々のご意見を伺うことができず、残念に思っています。

さて、帰阪後息つく間もなく「海の沸点」の稽古に再び取りかかっています。この作品は、1987年の沖繩国体日の丸焼却事件で有名な知花昌一氏を主人公に、1997年の特措法施行前までの知花一家の軌跡を追い、基地・国旗日の丸・天皇を鋭く告発するものです。また今回、沖繩で活躍されている北島角子さんをキャストに迎え、北島さんから大いに学ぼうと思っています。ご期待ください。

【海の沸点】

作／坂手洋二

演出／堀江ひろゆき

10月20・21・22日

〔劇団 未来〕

第8回全日本演劇フェスティバルでの「いい芝居」ありがとうございました。劇団からの参加者7人、平均年齢62歳の男たちばかり、久しぶりに朝夕温泉にゆつくりつかり、精神、肉体ともリフレッシュすることができました。ただ残念だったのは大道芸

【御陣太鼓】の公演が、雨のため1回の公演で終わったこととです。特に1回目に失敗した打ちは嘆いていました。

2000年最後の公演、和田澄子／創作劇「茜色のとき」は10月20日、22日、27日、29日、劇団未来ワークスタジオで8ステージ上演します。残暑続く中、すでに台本を離している若手となかなか台本が離れないベテランが稽古場で立ち稽古。まったく中です。波田久夫／演出は演技表現に

ウンがあると、わかりやすいダメだして6人の役者がリアリティのある人物を作り上げています。

この夏は稽古場を整理（文字幕の交換・ホリゾント幕の洗濯・いらぬ衣装・小道具を廃棄等）し、お客様に少しでも満足して観ていただけるようにしました。

2月に公演予定の大阪新劇協プロデュース・大阪自演連合同公演：清水巖／作・森本景文／演出「1995こうべ曼陀羅」は、9月4日に実行委員会が劇団未来で開催され、制作などについて話し合われました。近々参加劇団に製本された上演台本が送付されます。

間近に迫った21世紀へ歩み始めました。（藤岡）

〔関西芸術座〕

仲議長が健康上の理由により西リ演の議長を勇退され、

徒の鑑賞とはまた異なる反応と拍手をいただいて、班一同新しい発見もあり、創造上のはげみになりました。

9月13日から9月17日、関芸スタジオで、ニール・サイモン「おかしな二人」／女性版、訳／酒井洋子・演出／亀井賢二が上演され、サイモンを初めて企画にとりあげるよう熱心にすすめてきた中堅女優たちの健闘もあり、客席に笑いの渦が広がるときは、ホッとしました。

お客様は、のべ千人を少し割り、関芸が翻訳物の現代喜劇？という不審も少しあったのでは？という気もしますが、アンケートでの支持率は高いようです。しかし、関芸の未来のレパートリー開拓のためにも、公演後の合評会は、きめ細かい討議でありたいと思います。

宮武外骨自叙伝―吉野孝雄編・藤田傳／作・演出の

今後は「顧問」として指導していただくことになりました。劇団内でも、常に東西リ演のことを新しく入団してくる若い人たちに広め、「演劇会議」の購読もすすめてもらいました。お疲れさまでした。

西会議の運営団体の一劇団として、今後の担当者は、小笠原町子、亀井賢二（演出・翻訳・演技者のベテラン）梶山文哉（遙かなる甲子園に主役一樹で活躍中の劇団歴5年目の若手）の3人になりますので、よろしくお願ひします。

関芸ファミリー劇場第2回公演「猫はしる」。原作／工藤直子・脚色／勇未佳加・演出／松本昇三、7月28日、8月6日まで計14回の公演で、1825人という関芸スタジオとしては最高の集客記録を打ちたてました。地域に呼びかけて、4つのゴラス・グループが参加してくださって、美しい歌声の導入から、

関芸ミュージカルが展開していくという楽しい企画でありました。この舞台のために、若い世代は半年間、ダンスと歌のレッスンはげみましました。

初舞台4人の新人も含めて、のびのびと若い個性を発揮した舞台を、親と子、あるいは祖父母と孫、家族ぐるみで、夏休みを楽しんでいただけるファミリー劇場は、アンケートをみても好評のようで、地域との結びつきを促進してゆきたいと考えます。

8月10日、8月12日まで、3日間、関芸43回目の定期総会が開かれ、指導部の新体制案が可決されて、新しい幹事会体制で、劇団の運営・企画・創造をにやいます。

長期巡演中の「遙かなる甲子園」は、8月22日から、姫路・和歌山・泉南・岸貝・彦根・神戸と労演・演劇鑑賞会例会を無事終了し、学校の生

「予は危険人物なり」が、2001年1月19日（金）・20日（土）、大阪労演例会として、森の宮ピロティホール上演のための稽古が始まります。20世紀最後の年への思いが深いだけに、湯田町での、全日本演劇フェスティバルの成功が大きな喜びとなりました。（小笠原町子）

〔劇団 潮流〕

2000年もあと2ヵ月あまりとなりました。今年には劇団潮流も40周年を迎え記念公演、記念行事、記念誌の発行などで例年になく慌ただしい毎日でした。とくに今年の夏は、記念パーティー、「紙芝居ブンナよ木からおりてこい」、「乱れて熱き吾が身には、藤村・春」の公演がかさなり、暑い暑い夏があつという間に過ぎてゆきました。お世話を

おかけした皆様、芝居を見ていただいた皆様、本当にあり

がとうございました。

さて秋の移動公演の季節になった途端に集中豪雨にみまわれました。公演班、地方の制作など、かなり影響をうけました。とくに「大江山妖鬼伝説」班などはトラックの故障などがかさなり、愛知から岐阜へとわずかの時間差での移動でした。一時はどうなるかと思いましたがなんとかこれも切り抜けることができました。今のところ移動各班とも無事に公演を続けています。どうやら2000年もまたたく間に終わりそうです。今年には劇団にとって40周年という節目の年になりましたが、あまり過去にはこだわらず一歩一歩次の50周年をめざしたいと思います。（堂崎茂男）

〔劇団きつがわ〕

秋の公演「月光の夏〜挽歌」(10月21、22日、タレオ大阪

南)まで残り1ヵ月を切っています。

7月末には、鹿児島県知覧町の「特攻平和会館」へ現地調査に行き、特攻隊の生き残りの方にもお話を聞くことができ、この公演の意味を、あらためて思いしらされて帰ってきました。あとひと月、どこまで仕上げるかができるのか――戦争体験を受け継ぐことの難しさや、自分たちの非力を痛感する毎日ですが、ゴールまで全力で駆けようと思っています。どんな舞台に仕上がるか、不安と期待が半々で今からドキドキしています。

さて、秋の公演終了後の11月からは、大阪自演連合同公演「1995こうべ曼陀羅」のケイコが始まります。こちらの取り組みも壮大なものになりそうで、2月までは、チヨー忙しい毎日が続きそうです。（Y）

〔劇団 息吹〕

全国の全リ演の仲間、演劇会議読者のみなさん、おはようございます。

みちのくの銀河ホールでおこなわれた演劇フェス参加のみなさんご苦労さんでした。何よりも、演目を持って参加された劇団、劇団員のみなさんお疲れさんでした。誌面ですが、拍手拍手です。

また、湯田町のみなさん、町長さんはじめ、宿泊所の旅館のみなさん本当にありがとうございました。地元伝統芸能を披露、演じてくださったみなさんありがとうございます。そして、昼夜を惜しまず奮闘してくださいました。委員のみなさん、またスタッフ、裏方のみなさんにご苦労さんの拍手と感謝の言葉を述べたいと思います。

さて、我が劇団は日程、演目、小屋などの問題により秋の公演である「大阪新劇フェ

スティバル」参加公演を取りやめました。

何かやりたいという声もあり、「ピーターと狼」というヨーロッパ童話(音楽劇)をやることになりました。ピアノの演奏で、それぞれの登場人物になりきって朗読していくのです。ラジオドラマみたいなものです。劇団では初めての試みで、不安を持ちながら、オタマジャクシとにらめっこしながら稽古に汗をかきかき(冷や汗)奮闘中です。

来年の2月に自演連の合同公演がありますので、その稽古が11月12日から始まりです。それまでに終わらせなければなりません。2ヵ月足らずの稽古期間で未知との遭遇です。

【ピーターと狼】の公演(？)日はつぎのとおりです。

10月28日

東大阪、荒本解放会館

11月4日

八尾ブリズム会館

(柳辺)

〔劇団 かすがい〕

全国フェス、岩手のみなさん、お世話になりました。充実した3日間を楽しませていただきありがとうございます。岩手から帰ってからこつち、9月22日、23日の公演最終版、スパートにかかりました。今、本番直前、ジタバタ、どたばたの状態の中、この通信を書いていきます。

普段の実働団員が10人に満たないところで、登場人物12人お芝居にまたもや挑戦。作品は「煙が目にしみる」。助っ人だらけの公演ですが、そんな中でも朗報が。今回お手伝いいただいた中から、入団員が出ました！

よりよい芝居を創っていくため、稽古場維持のためにも、団員はもつと増やさなければ。そして、人数が少なくな

ると、ついつい守りに入ってしまうがちですが、とにかく攻めていくこと、これが大事ですね。少ないから、少ない人数のお芝居を、ではダメです。攻撃は最大の防御なり、を肌で感じる今日この頃です。

11月には、稽古場公演を予定。「カタクチイワシ・ファイナル」を企画、進行中です。(鐘ヶ江)

〔劇団 四紀会〕

異常なまでの日照りが続いた後、それを全部返すかの如く日本列島を襲った豪雨。そんな夏の終わりに開催された第8回全日本演劇フェスティバルでしたが、いやあ、最高でした。

作品の質の高さ、町をあげての取り組みぶり等、紙面では収まり切らないのですが、唯一極め付けを上げるならば、閉会時の回想シーン上映。

前回の開催地(神戸)スタッフの1人としては、ただただ脱帽させられました。

さて、ウチの話ですが、7月の頭に演劇教室31期卒業生公演「法王庁の避妊法」を上演。5人の男女が新たに巣立って行きました(9/15現在、入団者はゼロです)。

前後しましたが、6月には彼らの後輩にあたる32期生が入校。現在7人が奮闘中です。

その演劇教室の30周年記念公演として、「見よ、飛行機の高く飛べるを」を、ここ5年の卒業生が中心となって9月2〜3日に行いました。集客は十分とは言えませんでした。作品としては総じて好評でした。

秋は、例によって移動公演の季節。今年是一般対象の要請はなく、オール学校公演となりました。

それと平行し、劇団公演としては1年ぶりとなる家族劇

場公演が、若手の清水章代による創作「風にのれ、ブッピー」に決定。現在、改稿メンバーを編成し、来年2月からの上演に向け奮闘中です。そんなこんなで、これが今世紀最後の劇団通信となりました。この100年、とはいきませんが、いろいろとお世話になりました。引き続き21世紀もよろしくお願ひします。

(里中)

★当面の予定(移動公演を除く)

111回公演

「風にのれ、ブッピー」

清水章代/作

演出・構成/劇団四紀会

2001年

2月4日 県民小劇場

24日 明石市民会館

3月3日 うはらホール

4日 すずらんホール

4月8日 西区民センター

〔神戸職演連〕
こんにちは、神戸職演連です。次回公演の演目が決定しました。

第51回公演

『紙屋悦子の青春』

作/松田 正隆

演出/菊地 照一

2001年

1月27日 午後6時半開演

28日 午後2時開演

神戸アートビレッジセンター

この作品は、昭和20年の鹿児島が舞台となっています。お互いに思いを寄せ合う悦子と海軍少尉明石。しかし、明石は特攻として出撃することを中心に決め、悦子に思いを寄せる友人・永与に悦子を託します。戦争という大きな波の中で、それぞれ懸命に生きる3人の若者たちの青春、そしてそれを見守る悦子の兄夫婦。平和な時代だからこそ、改めて平和の尊さについて考えられる作品に仕上げたいと思

っております。

21世紀の最初の公演となる次回公演、サークル員一同全力で取り組んでいきたいと思っております。ぜひご覧ください。(衣笠)

〔演劇集団和歌山〕

9月15日に阪中正夫/作・楠本幸男/演出による「馬」を県民文化会館で上演しました。これは劇団創立30周年の企画で、新聞にも大きく取り上げられたほか、NHKが約1週間密着取材。また、地元テレビ局も取材に訪れ、劇団の存在を広くアピール出来ました。また、オークワ財団よりの助成(50万円)のほか、青年会議所が文化団体にだしている「アゼリア賞」の受賞も決定(賞金60万円)。思わぬ副産物もあり、この企画のねらいは当たったのですが、ただ、観客数が2ステージで320人と惨敗でした。舞台

の方はまだまだ課題があり、今後、今年から来年に向けての移動公演に向けてさらに練り上げていきます。『馬』は名作ですがなかなか手強い作品で、地元での方言の芝居はごまかしがきません。

来年度の春は橋本の創作劇で、という方針が決まっているのですが、まだ脚本が完成せず、橋本はいくつかの舞台の仕事に忙殺されています。また、本公演の合間をぬって新人公演をやるという、意欲的な劇団員があらわれ、今、『紙屋悦子の青春』が演目に検討されています。今年から来年にかけてはノンストップの劇団活動です。(橋本)

〔劇団 あしづえ〕
▽2000年7月8日。『ゼロ弾きのゴージュ』100回目のステージを無事終えることができました。1989年(平成元年)の初演から11年

の歳月。客席からはあたたかい拍手がわき感動的なカーテンコールとなりました。

▽さて、前号で紹介いたした「劇団あしづえ3つの試み」についてその後の報告です。子ども料金を今までの半額とし、新たに一般料金の半額で先生料金を設定したことにより、子どもと先生の観客数が急増、演劇に関心を示してくださる先生方も確実に増え、手応えを感じています。シアターボックスについては小学校3校、幼稚園、保育園と立て続けに依頼があり、この秋も1校訪問予定です。反響が大きく、需要に供給が追いつかない状況です。

▽新たに社会人、大学生を対象にした「表現ワークショopp」も計画中です。一度就職した社会人でも、表現能力の貧困さから職場不適應や心身症になる人が増えている昨今、感情表現を豊かにしてこ

ミュニケーション能力を高めるのがねらいです。来年3月3日4日に守輪咲良先生(東京)を招きます。

▽現在、劇団あしづえでは2001年11月に開催する「第1回八雲国際演劇祭」(仮称)に向けての準備がはじまり、いよいよ運営委員会もスタートしました。

▽加えて間近に迫った秋公演『アラボー! ファーブル先生』に向けて本格的な稽古に入っています。上演日時等は劇団あしづえまでお問い合わせください。

(安食ちはる)

〔劇団 演劇街〕

(雑記)

東京での公演の時のこと。居酒屋を出たところで演出家氏がのたまった。「稽古を見て寝られる芝居はいい芝居。リズムがいいんだ」

そんなものかとその時は聞

き流していたが、さて本番になつて、私の向かいの席のご婦人はこっくりと船を漕ぎはじめた。作者の私はやはり心中穏やかでない。その婦人は舞台がにぎやかな場面になつてようやくのことと睡魔から逃れたようだった。

しかし、少し高くなった私の席から二、三列前の夫婦は、芝居の幕開きからぐっすり寝込み、2人とも上体を前に折り曲げてこちらに背中を見せている。白いシャツの2つの背中に劇場にぼっかり大きく空いた穴のように思えた。私は舞台に集中できず、芝居のどこがつまらないのかと考え続けた。カーテンコールを迎え2人はやっと身体を起こし拍手をしていた。

終演後、出口へと向かう人波のなかで振り返った時、2人が数人の人に囲まれ談笑しているのが目に入った。夫婦の手にはそれぞれ白い杖が握

られていた。私は2人が全員の演劇愛好家だと後で知った。そして、あの2つの白い背中に芝居を聴く耳だったのだということも。

(通信)

【おうこくの木】の本番を10日前にして稽古の毎日。少々遅れ気味の稽古に不安の色は隠せず。つくり直すとは時間も体力もいるものとみんな痛感しています。また地元を離れ、あまり演劇の盛んでない長門という地でどれくらい集客できるのか、これまた不安。しかし、舞台は再演の名にふさわしく新しい挑戦に満ちております。

9月の中旬に、秋吉台国際芸術村主催の日韓共同プログラム「ブリッジ」の一環としてソウル演劇祭を観劇する予定でしたが、折からの台風のためやむなく中止。参加メンバーはがっかり。次の機会はあるのでしょうか。

【おうこくの木 ケーナと二トの物語】

作/広島友好・演出/柳沢悟 9/30(土) ルネッサながと 県演劇フェスティバル 11/3(金・祝) 山口市市民会館・山口市市民文化祭 (広島友好)

〔演劇集団 あり〕

私どもは今年創立30周年を迎えます。創立記念公演として「ぼっぼやー鉄道員」(山本忠利脚色)を決め、劇団きづがわの赤松さんに資料をお借りしたりして、スタートしたものの、8月中旬演出者の勤務の変更があり、急遽演出を変えたり、若い仲間の就職が決まり県外転出となったり、現代社会の波をものにかぶりながらも、新演出を立て、稽古を進めています。

「あり」の前身が国鉄サークルであったこともあり、記念公演にふさわしいと、鉄道

OB会の協力も得て、11月26日公演まであとわずかの期間をみながら頑張っています。2002年には、鳥取県での国民文化祭が開催され、鳥取市で10月19・20日演劇祭が予定されています。多くの仲間の参加をお願いします。(宮倉)

〔テアトルハカタ〕

本公演「キネマの天地」も若手の奮闘で無事に終わることができました。児童劇団との合同公演「ブンナよ木からおいてこい」も子どもたちが明るくリズムミカルに弱肉強食の世界を好演しお客様に喜んでいただきました。

現在、9月22、23日若手公演として「リンゴの秋」作/秋浜悟史、演出/黒江昭治の追い込み稽古に汗しています。

また恒例になりました春日市民ミュージカルも「暁の巫

女」作/徳満亮一・演出/中村ジョー、若き日の卑劣呼伝説の稽古に入っています。

主催福岡市によります劇団協議会(現代劇場、生活舞台、夢工房、テアトルハカタ、銀色のくじら)の合同公演は、「夏の夜の夢」作/シェイクスピア。訳/松岡和子・演出/猿渡公一と決まりまして、各劇団の若手とベテランがどのようなアンサンブルをかなでるか楽しみに、11月の本番を待っています。

巡演作品のミュージカル「長靴をはいた猫」作/石山浩一郎・演出/黒江昭治は10月に福岡教育大付属久留米中学校、宮竹小学校で、ミュージカル「はだかの王様」作/徳満亮一・演出/中村ジョーは、12月に巻岐小学校で上演いたします。

沖縄サミットと「海の沸点」公演

京浜協同劇団 室野 定子

劇団蒼生樹『海の沸点』

坂手洋二／作 濱田重行／演出

あの小淵総理が一世一代の国際舞台の主役となるはずだった沖縄サミットが、不透明な手続きで交代した森総理を主役に据えて開催された、まさにその時期の公演であった。

1987年、沖縄国体ソフトボール競技開会式で日の丸を降ろして焼いた読谷村のスーパリーの店主、楚辺通信所（基地）通称「象のオリ」の地主、知花昌一氏を軸として話は展開する。

84人の集団自決の場となったチビチリガマの調査をした彼は、この事件が天皇を中心とした軍国主義の犠

牲となったこと、そうした状況を作り出したのが日の丸・君が代を掲げ強要した皇民化教育に他ならないことを承知している。それゆえに「金にならない仕事ばかり夢中になる」と母に愚痴をいわせながらガマの案内を続けて来た。

開会式当日の朝「村議会が国旗と認めない決議をした」はずの日の丸が揚がるとの情報をえて、綱を切るカッターナイフと再掲揚阻止のための百円ライターをポケットに入れて「じゃ行ってくるから」と出かけるのだが、その間、子供のこと店のこ

と政治の話がないまぜになって、何の気負いも無く実に淡々と会話が進む。こんなところに沖縄が日常的に置かれている現実が浮き彫りにされる。

祖国復帰は名ばかりで半世紀を超えても基地問題は解決しないばかりか、政府は米軍に土地の永続使用を認めてしまった。米兵による犯罪にも泣き寝入り、海洋博をやってもサミットをやっても揚がる利益はヤマトンチュー（本土の人というより企業）が吸い上げる。

昌一が逮捕拘留され店は右翼の執拗な攻撃にさらされるが、街宣車を見守るように出動するパトカーを見て本質を見抜く父、いま店を閉めれば右翼の思うツボだと頑張る母、それを見て応援する周りの人々。



次から次へと押し寄せる日米政府の裏切り行為に、その都度対決せねばならない沖縄の人々は、こうして生き抜いてきたんだなあとは納得するのだ。ラストシーンは1996年3月末に基地の契約期限が切れて昌一は再契約を拒否、国の不法占拠中の5月14日「象のオリ」に入り先祖供養をするが、米軍は施設保全を口実に30人の制限をつけた。自分の土地に入るのに大変な事件になる沖縄。オリの内、外で共に歌い踊る人々。そう大きくはない舞台上を陣取っているガジュマルの大木が頼もしい。

本土からは沖縄へ折につけ応援に駆けつけるし、高校野球のスタンドでもウエーブが起こりもした。しかしやはり、基地に文字通り囲まれて生きざるを得ない人々とはかなり遠い存在なのだ。

女優陣が達者なこの劇団、今回も舞台を締めていた。沖縄の多難な歴史、課題がぎっしりつまった仕事を

丁寧に創っていた。

時々ウチナーグチ（沖縄言葉）が入ってわかからないまま芝居が進む時、集中力が切れて困ったが、総力をあげて取り組んだであろう今回の舞台はいろんな意味で私のカンフル剤になった。

（7月14日夜 横浜市教育文化ホール）

* * *

それから2週間後の28日、制作の濱田絹子さんのお別れ会に参列。当日のパンフの一言欄に「仕事も、芝居も、子育ても、かなりハイテンションでやってきました。ちよつとブレイク。でも熱は下げません」とあった。濱田氏の奥様、劇団創立メンバー、劇団活動通算25年、享年40歳代前半の早い旅立ち。劇団葬は劇団を支えてきた彼女の引退の花道にふさわしい心温まるものであった。

合掌

まだあの時の方が——「夜明けの街」の世界

劇作家 佐藤 逸平

東京芸術座 『夜明けの街』

E・D・フィリップス/原作

藤原新平/翻案・脚色・演出

東京芸術座が創立40周年を記念しての「どん底」公演以来、「ホームワーク」「梅檀の双葉」そして今回の公演とかなり観てきたし、つねに前衛的な舞台創造に意欲を燃やしておられることに敬意を表しているフアンの一入である。

「夜明けの街」は、原作がイタリアの作家、E・D・フィリップスの「ナポリ百万ドル」という作品だそうだが、文学座の藤原新平が舞台を博多に移しご自身による翻案、脚色、演出で我々の前に開陳してくれた。

一幕Ⅱ昭和19年。物資は欠乏し、

頭上には戦闘機が襲来する。庶民にとつて今日を生き抜くことが最大の課題だ。

かつては腕の立つ羊羹づくりの職人だったが、今は企業統制のためやむなく微用工として働かざるをえない今川久太郎(笹岡洋介)敗色濃い時代を見据えてのぐうたらが透けて見える。妻朝子(荒木かずほ)の一家も例外ではなく、空襲で家を焼け出され倉庫をめぐらに生活する一家の働き頭は朝子だ。世情の混乱を逆手に取り、義理、人情、礼節をよそに今日も闇物資の売買にいそしむ朝

子。そんな一家に手入れが入って一騒動。家族、闇仲間を総動員して『葬式、取込中』の小芝居。急速死人にさせられてしまう久太郎。怪しむ警察とあくまでシラを切る朝子たち。もはやこれまでと思いきや空襲警報発令に続く爆撃で一家の危機は救われる。ささやかな庶民の叡智だ。

幕間Ⅱ開演中、扇子を使う客が多かった。暑いのだ。ロビーで一服して戻ってくると隣席の会話が耳に飛び込んできた。「舞台上の都合で冷房を止めたんだそうだよ」と。なるほどと思い、戦時中を観客にも臨場体験させたいとの配慮であったかと勝手な解釈をしてあざといながら納得した。余談ながら戦中戦後を思い出していた。両親と二つ違いの兄、違い縁戚筋の5人家族とやはり縁あ

る老婆1人が転がり込んできて、狭い我が家は総勢10人家族、それぞれが一問づつ占領していた。夜中台所で物音がするとだれかが残り物(などあるはずもないのに)を食っているのではないか、と心は餓鬼か夜叉であった。

二幕Ⅱ時移って、昭和22年、仮のねぐらの倉庫はキャバレーに。朝子



一家は闇仲間(一幕では闇物資摘発者だった憲兵も私服も今はその仲間だ)と一緒にここでもたくましく生きていた。そこへ召集されたきり行き方しれずの久太郎がひよっこり戻ってくる、刑務所の塀の上を綱渡りして生きてきた日々が、急に生々しくなりだしてうるたえる。朝子一家の今は、いっぱしの泥棒稼業の息子平太(深井八郎)、進駐軍の子を宿して捨てられてしまった娘の昭子(岩下孝子)加えて突然の病に苦しむ末娘かおる(久野美咲)だ。医師(北原章彦)は、その薬がなければ助からないと朝子を取り巻く闇商売仲間を駆り立てて八方手を尽くし薬を探し求めさせるが、それが見つからない。そこへ、貧乏大学教師の一瀬(下落合秋)は、戦時中、朝子から人間扱いもされないほどに虐げられていたのに、かおるの病気を助けるために欲得抜きで薬を届けにきたのだ。

朝子「えっ、本当に。ありがとうこ

ございます。おいくらで譲っていただけますか」

一瀬「いくらなら買えます。子供に少しお米がほしかった時、お金を持つとつてもわたしは、あなたに頭を下げなきゃ売ってもらえませんでした。今は反対ですね」

朝子「はってん、これは薬でしょう。命の問題です。(という矛盾に気が付かないのがおもしろい)」

一瀬「おっしゃる通りですよ、奥さん、薬がなかったら娘さんは死んでしまうわけですからね。ばってん、食べものはなくても生きていけるとでしょう。か。(中略)だれでもいつかは必ず他人の世話になるものです。困ったときはお互い様ということですよ。……ですからあなたはこの薬を探しに一晚中走ることはなかとです」

筋の展開が軽快でテンポもかかって一幕が実に楽しい。イタリア映画でよく見られる、たくましい女性とお調子者でぐうたら亭主が、歯切れ

「海の沸点」の舞台「沖繩」には、忘れられない二つの思い出がある。一つは小学生の時に読んだ本の挿し絵で、ブルドーザーの前に数人の人が座り、その人たちにアメリカ兵が銃を向けている図であった。占領された沖繩で米軍により行われた土地の強制収用に反対する民衆との説明書きがあった。土地を強制的に取りあげられた怒りは小学生の自分にも十分に伝わり、今でも、その挿し絵が浮かんでくる。

もう一つは、それから10年後の学生時代に二度沖繩に長期に滞在した

思い出である。その頃は旅券を持って、東京や鹿児島から、長い船旅で沖繩に行ったのである。沖繩の家に泊まり込んでの生活は、何もかもがめずらしく刺激のあるものであった。海で熱帯魚を探り、食べた時の光景、七色の海とはこのことかと思わされる美しい海の色。南国の陽光と真つ青な空。美しき島沖繩。だが基地の島沖繩も目の前にあった。

難作に挑戦

劇団名芸

佐野 秀明

劇団名古屋 『海の沸点』

坂手洋二／作 久保田明／演出

「海の沸点」の舞台「沖繩」には、忘れられない二つの思い出がある。

思い出である。その頃は旅券を持って、東京や鹿児島から、長い船旅で沖繩に行ったのである。沖繩の家に泊まり込んでの生活は、何もかもがめずらしく刺激のあるものであった。海で熱帯魚を探り、食べた時の光景、七色の海とはこのことかと思わされる美しい海の色。南国の陽光と真つ青な空。美しき島沖繩。だが基地の島沖繩も目の前にあった。

挿し絵が浮かんでくる。

のよい博多弁によってより現実味を増す。ベテラン陣の笹岡洋介、警部補（井上鉄夫）は安心してみていられたし、荒木かずほも熟演（もう一つ骨太のバイタリティがほしかった。もちろん肉体的なものではない強さだ）だった。

解し崩壊していき、しかも戦地にあった夫の苦勞も食うために必死に働き続けてきた妻の苦勞も、お互いがお互いを分かり合えないもどかしさの果てのせりふだ。

彦が意外と心に残った。下落合は頼りなげながら、森本レオにも似ていやみのない、それでいて芯のある演技で存在感があった。また、葉探しにみんなを駆り立てる医師北原は、文字通りその葉がなければ助からないほどに頼りないヤブそのものをおぼせる医者で、それだけによけいに薬の存在価値が浮き彫りにされる結果となって苦笑した。これも余分なことだが、当時は進駐軍にでも手を回さなければ手に入らない薬といえれば抗生物質、たとえばペニシリンかストマイのたぐいであつたらう。

二幕は軽快さとスピードを急ぐあまりにやや、幕閉めを急ぎすぎたきらいがなかったか。果たして朝子は納得ずくで価値観の転換を図り得たのか、終幕近く久太郎は、静かに話し出す：

久太郎「また朝早う起きて、ヘツツイに火おこして、水につけといた小豆を大釜に流し込んで、…あの煙の匂い…なつかしいなあ」

俳優諸氏は、肩肘張らず軽快な演技で、これほどまでに演出者によって変わるものか、外部から演出者を招いてのカンフル注射が功を奏したことは疑いえない事実であり、そして、ともかくも、日本人の泣きどころを心得た良質の人情喜劇で大衆演劇を好む私には、これぞ芝居の醍醐味と感じ入った次第である。

（9月2日昼・紀伊國屋ホール）

がト書通りに行動する。細か過ぎるト書は役者の演技を萎縮させる。芝居は小説とは違い、読み返すことが無い、行動に納得がいかなないと、観客の疑問はいつまでも継続してしまふ。概して、劇団名古屋の若手女優陣は成長著しい、ト書にとられず、もっと自由に表現できたらともったいない気がした。

ヨウコ(シヨウイチの妻―黒澤浩子)登場、劇団歴は短いが自分の役をしっかりとつかんで適確に表現していた。ウメノ(シヨウイチの母―ごとうてるよ)病氣復帰第一作で気にしていたが、さすが名古屋の看板女優である。ベテラン健在をみせつけしてくれた。シヨウイチ(矢野弘次)―わが英雄「知花昌一」の登場である。矢野弘次にかかると、英雄も、スーパーのおやじに自然となつてしまふから不思議である。英雄も日常はこんなものかと思えてしまうのがおかしい。ただ方言はかなり練習したと思うが、違うなという気がした。



つたりあてはまるおばさんがひめゆり部隊の生き残りだときかされたこと、まさに沖繩は自分にとって青春の思い出そのものであった。あれから30年の時が過ぎた。ベト

ナム戦争も終わり、沖繩も本土復帰した。望んでいた平和な島は本土の沖繩化により米軍基地はますます拡充され、多くの被害者を生んできたが、自分にとっての沖繩は少しずつ遠くなっていった。沖繩海洋博後、海が汚れてきたと聞きまた観光地化が進んだと聞くと、昔の思い出を大切にしたい気持ちで何度も機会があつても二度と沖繩へ行くことはなかった。ただ時々ニュースで沖繩にふれると無関心ではないとの思いはあつた。「国体での日の丸焼却事件」「象のオリ」「知花昌一」断片的にはあるが反戦を唱え、米軍に一人立ち向かう英雄がいる。年齢的には自分と同世代で、大学紛争を体験した男、ひよつとしたら30年前、沖繩大学や琉球大学の一緒に討論をした学生のなかにはいたかもしれない人、いや小学生の時にみたブルドーザーの前に座り込んだ男の顔にダブル人、興味のない人物が現われてきた。

坂手洋二作「海の沸点」は、その

「知花昌一」の半生をもとに書かれているとか、さっそく戯曲を読む。初めから終わりまでいっしょに読んだ、まるで小説のように自分を引き付けていく、沖繩の問題を的確に表現し、戦後の沖繩の苦悩、矛盾が伝わってくる。だが、これを舞台上に上げるというなるのか。必要以上に細かいト書。一つだけでも十分に作品となる事件が、いくつも台詞だけで語られ、舞台上には現われない。尋常ではない過去を背負った人物が、ごく普通に暮らす、日常風景の描写。これは並はずれて難しい作品である。とても自分では演出できないとの思いがわいてくる。自分が勝手に師と仰ぐ先輩演出家久保田明氏が今まで一貫して真摯に、社会性のある作品に取り組んで成功をおさめてきた劇団名古屋を演出し、この難作をどう表現してくれるのか楽しみに観劇に臨んだのである。

幕が上がると、そこにはト書通りのセットがあり、ナオミ(佐藤文代)

まあ場が進むとあまり気にならなくなった。昔、沖繩で聞いた方言が日常会話に不自然に入ってくる。突然「ニフエーデービル」なんて言われても観客の方が困ってしまう。我々の観光英会話とは違い、日常生活の中の方言だから脚本上、工夫がほしいところである。方言が耳障りで作品に溶け込めなくなるのは残念である。シヨウスケ(シヨウイチの父―沢田靖一)劇団演集からの客演だが、自然な家族を名古屋のメンバーと構成していた。概して客演の場合は異質な演技を見せることがありアンサンブルを壊す場合もあるが、さすがである。今回の作品は、自然な演技が特に必要で、いかにも芝居してますというの作品を壊してしまう怖れがある。

日の丸焼却事件の犯人、身体障害の子を持つ親、ガマで看護婦の妹が殺人用の注射を射つたことに苦しむ兄、戦争中、中国で人を殺したこと

運動にかかわってきた若者、その恋人、右翼、それぞれが大きなものを背負って登場し、日常を自然体で過ごしている。誇張しないリアルな表現で、裏面を表すこと、我々も程度の差こそあれ日常的にやっていることであるが、これを舞台上で表現するのは並大抵の難しさではない。脚本通り、やっているのだが、観客は眠気が襲ってくる。台詞だけで語り、淡々と進行していく、そして沸点に達して沸き上がる。「海の沸点」はそんな作品であろう。沸点に達するまでは何の変化も見えないのが、突然に起こる変化。作者はどこに沸点を設けたか、定かではないが、終演後のいつかに、必ず沸点がくることを感じさせる舞台であった。何かわからぬがふつふつと怒りが沸いてくる。基地の無い沖繩を、日本を、世界を一日も早く実現させなければならぬ。沸点が来たら、また沖繩へ行ってみようと思う。

(6月10日 愛知県芸術ホール小劇場)

やっと舞台で観ることが叶った名作

日本青少年演劇作家会議
事務局長

井上満寿夫

創立30周年記念公演

演劇集団和歌山『馬』——フアース

阪中正夫／作 楠本幸男／演出

古典や少し前のものは極度に限られた——

偏った作品以外はますます観る機会が少ない現状のなかでの、今回の演劇集団和歌山の創立30周年記念公演は、極めて感慨深いものがある。しかも、和歌山出身にとどまらずその地域に深く濃いかかわりを持ち、今年生誕100年を迎える阪中正夫の作品の上演ということになれば、なおその意義は大きい。

阪中は岸田国士に劇作法の教えを受け、自分の娘に、岸田の娘今日子に肖って明日子という名前をつけた

ほどで、終生岸田を恩師と仰いで、岸田のリードのもと「悲劇喜劇」や「劇作」の創刊・編輯に参画しつつ劇作に励んだ。昭和7年に雑誌「改造」の懸賞募集に戯曲「馬」が入選して、劇作家としての地歩を固め、代表作ともなった。阪中は数え年32歳になっていた。

さて、その「馬」の上演である。「改造」に発表の年に前進座によって初演されてから、戦後には俳優座などによって上演されているが、昭和31年に和歌山労演主催で上演され、当時大阪に在住していた阪中も

駆けつけ、舞台挨拶をしている。「馬」の上演はその後、阪中が58歳で亡くなった昭和33年に追悼公演として大阪で行われている。そして今回の演劇集団和歌山による公演である。その公演の日、演劇集団和歌山が、和歌山青年会議所からその30年の活動を賛えて文化賞として「アゼリア賞」を贈られた。

今回の演劇集団和歌山の「馬」は一言で申すなら、クラシックとモダンテイラーの中間に位置する方法がベースになっている。

梗概は、なによりも馬を大切に考える父積吉（植西一義）が、地主で元校長の根来（鎌田昌信）に年貢のカタに馬をとられたが、仕事を放って根来の厩まで世話に行く。それを怒った長男竹一（下崎浩）は厩に放



火する。火事に気づいた積吉が馬を助け出し、日頃から家を出てブラブラしている次男の徳次郎（水口広平）がやったと思ひ込み、竹一が「火を

つけたな、俺ちゃ」というのも聞かず村人と徳次郎を追いかけて行く。母のぬい（城向博子）は、徳次郎が逃げられぬようにと、地べたにすえたもぐさに火をつけて夢中で拝む。それがあらまじだ。出演者は他に博労などで城野周三、玉置浩崇、南口美奈子、田内光也が出演して、登場人物は全部で9人。

阪中は、戦後の「演出覚え書」の中で（この作品から、農村の問題をひろげられることは、大変迷惑である。何かにぶつかって、そこから現はれて来る風変わりな農民の気質のをかさに焦点を合して貰ひたい。今の農村にだってこの作品に通じるものを、まだ持ってあるかも知れない）と書いている。

今回の舞台は、板坂晋治の装置をはじめ、法月紀江の衣装も野村美貴子の音楽も全体的に、モダンテイラー志向している。

戸板康二は、阪中が岸田の勧めで『チボー家の人々』のマルタン・デ

ュガールの「ルリュ爺さんの遺言」を和歌山弁に翻案した経験から、その喜劇的影響をあげて、傍注の「フアース」の根拠としているが、同世代でやはり農村を描いた真船豊も自作に「ファルス」と傍注をしているのを見ると、その対象が同様「fances」にみえたのだろう。また、阪中の生家の近くにこの「馬」に似た家があったことも影響したと、大谷晃一は記している。

さていよいよ今回の舞台について見解を述べるところへきた。阪中自身、この「馬」について、「一つの仕事だけは残したと、己惚れてゐる」として、「セリフとしての方言の問題と、フアースとしての一つの形式の問題である。」と述べている。今回の演集和歌山の舞台は、要約してきた作品「馬」を通しての阪中の意図と、70年近くの歴史を経て、独自に戯曲「馬」を鑑賞してのそのクロスするところに存在するわけだが、阪中が自負した「方言の問題」はク



いはなりゆく彼の姿は、芸術に志すその若き日から既にありありと見え
ているだろう。

作者は「理想の春にあざむかれて死ぬ」天才・北村透谷と比較してリアリスト・藤村を描いたが、作者自身の青年藤村への好意と、誠実さを愛する「潮流」の真面目でくつきりした芝居づくりにより、若者の真摯な生きざまがより強調されている。舞台は藤村が書生として子供時代から養われてきた吉村家のひと間に始まる。家族のように春樹（藤村）を可愛がる吉村家の人たちは、藤村を実業家にしようと婿入り口まで用意している。しかし透谷の熱筆にうたれ芸術への志を抱く藤村は、彼の期待を拒む。藤村の堂崎茂男は、新調の袴を着せられて照れたり、恋愛と色恋の違いをむきになって説明する、内気だが自分のことは断固譲らない若者を見せている。吉村忠道の浮田孝明は万事を呑み込んで藤村を励まし、しんの池下雅子は、藤村が老人の自分には理解できないことを気にしながら、愛情を注ぐのを止めない。そこには暖かい「家」があ

る。一方、物事の奥底を見つめずにいられない北村透谷は、鋭すぎるが故に現実といれあつてゆくことができな。その理想主義が彼を窮乏の中の狂気、自殺に追い込むこととなる。同じエゴイストでも「此の世の中には未だ自分の知らないことが沢山ある。今ここで死んでもツマらナイ」と死を思いとどまる藤村と、すべてをやりつくしたと歎ずる透谷の差は一步であるが、大きい。藤村相手に鋭い社会批判を熱っぽく聞かせ、年上の友人として世帯染みた相談相手を取り、愛の情熱が生活の前にくすぼれることを怒り、自分が無能力者であることに苛立ち、次第に狂気が募ってくる。変化の振幅が大きな、良い役である。演じる富本哲也は頑張っていたと思う。苛立ちと狂気は、それを想像させるものを出していた。ただ天才を突き動かす熱情の大きさには届かない。真面目で気取りのない、自分の感情の方向

リアしつつも、もう一つの「形式の問題」は阪中から受けて十分舞台に現出させるまでには到らなかった。そのポイントの一つは、俳優の（身振り表現）の問題だ。この問題は演集和歌山に限らず、今、舞台、映像で随所に起こっている現象だ。「ら

しく」見えないこと。数十年前の人物表現にも所作指導が要る時代になった。二つには文字通り「形式の問題」で、形式上のリアリズムは当初から志向していないのは明らかだが、では何なのかと舞台に問うたときそれ

が明確でなかった。阪中が自負して遺したものをいかに継承するかの問題は、古典の継承の問題として普遍的であり今回の演集和歌山の公演は、その一つの重要な問題提起であったと、私は厳粛に受けとめている。（9月15日県民文化会館小ホール）

40年の繁り、50年の根っこ

演劇評論家

神沢 和明

劇団潮流『乱れて熱き吾身には 藤村・「春」』

吉永仁郎／作 藤本栄治／演出

創立40周年を迎えた劇団潮流。その記念公演の第3弾として、関わりの深い吉永仁郎氏に委嘱した作品を上演した。島崎藤村の青春彷徨を描いた作品である。

作者は既に『しりたまはずやわがこひは』で晩年の藤村を描いている。

パンフレットによれば、作者はもともと若い藤村が経験した苦境と悩み
に共感し「春」を土台に藤村を描いたのだが、改稿を進めるうちその後半生の方が面白くなり『しりたまはずや……』を書き上げたという。

確かに、現実世界に生きているこ

とを強く意識し、自分は生き抜いてゆくのだという確固たる意志をもつ「エゴイスト」藤村の姿は、周りの者が苦境に陥ることを省みず、姪との密通を告白してさっさと渡欧してしまう状況に、最もよく示される。しかしそのエゴイストぶりも、抑圧する力として在る現実の中であくまで自分の心を飛ばそうとした結果であるなら、芸術家としての藤村にとって必然であったかもしれない。であるなら、エゴイストである、ある



れ、九助、九兵衛は伏見に帰される。しかし新しい奉行は「後吟味」の名目で町年寄七人を入牢・獄死させ、すべてを闇の中に葬ってしまう。自分たちのしたことの意味を問う九兵衛に、何かが動き、それは後の者たちに引き継がれてゆくのだと語る九助。そして全員が倒れた後、賑やかな伏見の町の祭りが見え、彼らの死が無駄死にはなく、その遺志は人々に強く伝えられたことが示される。

原作者は京都市議・府議を長く勤めた文人政治家。権力者の横暴に対する庶民の怒りと抵抗をテーマとするこの作品は政治家の資質である公正さ、正義感に溢れ、人々が連帯することの強さへの信頼が感じられる。

文珠九助はタイトルロールであるが、主人公は伏見の人々すべてと言うべきであろう。彼は一人息子に家業を継がせ孫を可愛がる、隠居老人である。その世間知と分別ゆえに

人々の相談役となるが、豪傑でも英雄でもない。九助の幼馴染の丸屋九兵衛は農民の強さと血の気の多さで年甲斐もなく気の逸る人物だが、一本気で好ましい。藤沢薫の九助、竹橋団の九兵衛はこの二人の性格の対比と、子供の頃から気を許しあった親友同士の友情を、片や穏やかに話し聞かせるような、片や大声で怒鳴りつけるような口調で、はっきりと見せていた。江戸の公事宿で奉行の更迭を知らされた二人が抱き合って喜ぶ場面や、牢の中で抗議の声をあげながら、先に倒れた九助の体にかぶさるように死んでゆく九兵衛の姿は印象深い。他の町役人たちも、声高に抗議の声をあげるのではない、町のことと同じように家族のことも気になっている、普通の人たちである。しかし伏見の町のために立ち上がらねばならないと覚悟し、そのことで牢に押し込められ死を迎えることになっても、後悔することはない。社会的、いや人間の義務と信じたこ

をはっきり示す熱演なのだが、この天才の嵐のごとき情熱の発露を表すには踏み込みが足りなく思える。透谷に引きずり廻されながら、なお共にいて彼を見守る妻・美那子を、嶋まゆみが控えめに、しかし存在感をもって好演している。

佐藤輔子との恋に破れた藤村は漂泊の旅に出て自殺を想うが、生きようとする強い力が彼を救う。現実の中で芸術家として生きようと決めた彼にのしかかる家族の重さ。母(小野朝美)、長兄の嫁(真壁和子)のうちとけなさと、身体を壊した兄・友弥(岡田秀)のすね者ながら藤村の気持ちへの理解を示す態度がよく

劇団京芸 『文珠九助』

西口克巳／原作 尾川原和雄／脚本 岩田直二／演出

一方、京都では、劇団京芸が創立50周年の記念公演を行っている。昨年から続く一連の企画で、中堅・

若手による連続公演、ベテランによる一人芝居公演があつて、この大掛かりな京都の芝居の上演に至った。

わかる。彼らに取り巻かれ「自分のようなものでも、どうかして生きていたい」とうめく藤村の葛藤が伝わってきた。

同じひと間を舞台を廻して角度を少し変え屋根の骨組みも変化させ、吉村家、透谷家、島崎家とするのだが、わかりにくい。壁の色の印象が強いためか。二階がやけに高く違和感があるが、その内側に刀鍛冶の仕事場を飾ったため仕方ない。刀鍛冶・堀井来助(高橋政一)との「本物」論議が良いアクセントになっている。

(9月1日 近鉄小劇場)

劇団京芸の幹と枝、そして根っこを示す連続した公演だと理解する。しかもその根っこは一劇団にとどまらない、京都の演劇全体にはついている。出演者が70人近いこの時代劇には、京芸、人形劇団京芸に加え、京都、滋賀、大阪の演劇人が多数参加し、子役を含む一般公募の人々も顔を並べている。そうした幅広い顔触れがまとまり、演技経験の未熟な者たちまでが見事に溶け合つて舞台を盛り上げているのは、なにより演出の岩田直二の力量であろうが、それに劣らず我が芝居を立派に作り上げようという関係者全員の熱意に違いない。会場も伏見区の丹波橋にある呉竹文化センター。

天明期、伏見奉行の強引で非人情な施政に対して立ち上がった町人たちの話である。無体な税の取り立て、抗議する者への残酷な仕打ちに、ついに町年寄七人が立ち上がる。刀鍛冶・文珠九助と農民・丸屋九兵衛が江戸表へ上つて直訴、奉行は更迭さ

舞台に現われた演出の持味

演劇評論家 今泉 おさむ

とに殉じる潔さが胸をうつ。藤本文彦、入江慎也、波田久夫、中西宣夫、谷ひろし、いずれも静かな決意を見せて好演。演劇経験の豊かさが人間の深さとして見えた。

対して「悪役」であるが、奉行・小堀和泉守（林十夢）をエクセントリックな痴れ者として権力者の能力の無さを強調し、沈着な切れ者の家老・庄大夫が与力たちを使って町人を締め上げるという形をつけた。無

能ではしやぎ屋の首相を戴いて、官僚が国民を絞っている国の話を思い出す。庄大夫の栗塚旭が大きく、敵役としての貫目を示す。町人を虫けら同然に考える武士の思いがりも自然に見せ、左遷に怒り酔いのあまりに斬りつけてきた和泉守を論ずるところでは、彼の悩みも感じさせる。京芸では他に、志保の赤土綾子がよく通る明るい声ではきはきとした娘を、万造の阿部達雄が朴訥で正直な

男を、かよの早見栄子がさりげなく存在感のあるおかみさんを表現した。そして奉行所の手先ながら町人とも接点をもつ、ぐれもんの文太の新谷智史がくどくない三枚目を達者にこなしていた。

弁天囃子、祭りの雑踏などモブシーンも巧みに演じられ、美術もおさまり良く、充実した舞台であった。（9月9日昼 呉竹文化センター）

劇団どろ『コンミュニョンの人々』

ベルトルト・ブレヒト／作 岩淵達治、浅野利昭／翻訳
台田幸平／台本・演出

創立35年。（ブレヒト）劇をライフワークとして、日本では一番数多く上演している劇団ではないか。97

年より（ブレヒト生誕百年）記念として、6本を連続上演して、都合25本目となる。今回はその有終の美を

飾るための大作に取り組んだ。そのため、総勢1000人を越す登場人物を在神の劇団・演劇人に加えて、一般募集の市民参加も合わせ40人に近い人々によって上演された。これら演技の質の異なる出演者をまとめ上げて、一つの舞台上に仕上げた成果は、ひとえに演出の熱意と努力と言える

であろう。

舞台は客席を三方にして、囲まれた平土間の真中に空間を設けて、正面には高みがしつらえている。したがって、多くの人物の登退場は四方から自由になり、場の進行はスムーズになったはずだが、それにしても転換でのもたつきがところどころ見える。とはいえ、民衆の溢れる活力を波立たせて、雰囲気は盛り上がっている。

首都パリ、コンミュニョンに集い、時の政府に抵抗した人々。歴史上有名なであれ無名であれ、あの炎の8日間に各々の理想を貫いた人々を描いて、14という場数を一気に見せたのだが、2時間45分となるとどうしても疲れる。

しかも集団場面は別にして、事件の中で、対話部分になると、演出の特徴として、極力、役者の感情を廃しようとする。史実の提示という側面はあるだろうが、観客としては退屈さを感じてしまう。舞台上に現わ

されたことから観客がその事実を感じ取っていくことが重要とはいえず、舞台はポイントがあつてこそ、すんなり心に落とし込まれるものである。加えて、純粹の疑問として、演技とは（素朴）だけで良いのだろうかという点である。それでは（コトバ）を覚えてただ喋ることとどこが異なるのだろうか。どうしても観客としてはその先を求めたくなる。

出演者を眺めると、やはり、演技の質の異なりが目立つ。これまで共演の機会が多い場合は別にして、二宮修生（イカロス）Ⅱティエールはいかにも癖がある。蓬莱裕史（風斜）Ⅱヴァランの演説は見事に堂々としている。これも（どろ）の演技からみれば異質といえるか。しかし、観客にとってはわかりやすい。他では、天野公深子（フリー）Ⅱジュヌヴィエーヴの口跡がはっきりしていた。渡辺志加子（どろ）Ⅱカペー夫人がしっかり者の感じを良く出していた。

この作品はブレヒトの代表作のひとつと言えるのだが、彼がこれを書くことを触発されたのは、同じ（コンミュニョン）の崩壊を描いた、N・グリーク「敗北」（1937）だという。それに対する反作品として執筆した（1948）という。だが、1場のカフェから始まり、フランス銀行、パリケードの戦闘などの場面、登場するコンミュニョン側のヴェラン、リゴー、ベスレーなどの代表委員も共通している。確かにここでは、コンミュニョンの人々の求める政治の理想が叫ばれ、ブレヒト的な（合唱）がところどころで唄われ、ラストが民衆に対する虐殺に加えて、ティエールと貴族たちがヴェルサイユの城壁から、それを高見の見物をしてる姿まで見せて幕となる。だがこれでも、（アダプト）以上の作品になつたかと言え、まだ疑問が残る。

（7月15日 神戸KAVC）



劇団かすがい『煙が目にしみる』

鈴置洋孝／原案 堤 泰之／作 門田 裕／演出

兵庫県劇団。創立31年というのに、初めて観る。取り上げた戯曲は最近よく上演され、私も昨年、劇団「息吹」での舞台を本誌102号の劇評に取り上げている。

（斎場）というのは、死者を取り巻く家族・親族のこれまでの人生の過ごし方の縮図であり、様々な葛藤が吹き出したのが、多少は落ち着きを取り戻す場所である。

急死した2人の男性。その家族・親族・関係者たち。一方は多くに囲まれ、一方は娘1人。となると後者はわけありだろうと想像できる。その2組がどう関わってくるのか。それが死者2人を舞台上に登場させるとなると、これはもうコメディタッチか、おどろおどろしさかのどちらかになる。その接点に呆けかけて

いる祖母を出すとなると、これもまあ大方想像出来る展開である。だがそれでも、ある種の共感を呼ぶのは描かれているのが（家族）であって、しかも今日では、崩壊がテーマになるのが通常だが、ここではほのぼのとした心地に浸らせてくれるからである。言うなれば（家族）の関係復元のドラマである。

舞台は斎場の待合室。下手奥・窓外に季節を象徴する桜の大樹が花を散らしている。まず、サスで浮かび上がるのは2人の白装束の男。実は突然の死に見舞われた本人たち。2人は会話を交わすうち、親近感が生まれてくる。この出だしはテンポがややゆったり。ここは意表をつく設定に観客を引き込むためにはもったリズムが必要に思える。

野々村浩介は引退して間もない高校野球部監督でまだ働き盛り、北見栄治はリタイアしたあとの悠々自適の61歳。同時刻にちか合った2組の家族・親族たちの登場。これら人物の性格・立場がはっきりと描き分けられる。これは演出者として、まずそれをきっちり指示したのだろう。出演者たちは、しっかりそれに応えている。したがって、全体のアンサンブルがうまく出来上がっている。

中では、礼子（工藤律子）の穏やかな気配りの中の気強さは、高校野球部監督の妻という立場を伺わせる奥行きを感じさせる。何かと衝突してしまう、騒々しい従姉妹・泉（田中晴子）と、父の死因が自分より若い娘との腹上死のため密葬で済ませようとする、心に鬱屈がある、北見家の娘・幸恵（鐘ヶ江里子）にしても、自立した仕事を持つ女性といったタイプをしっかりと表現している。

順調に舞台は進んでいくが、通

常では見えない、2人の死者との絡みも含めて、中盤に軽やかなテンポがうまく出ずに、やや単調になってしまう。これは人物模様やや寄りかかって筋を運んでしまったことに原因しているのではないか。だがそれも、これまで自分勝手に生活していた息子と娘を抱き寄せる礼子の抱擁によって、家族の暖かさが立ちあがってくる雰囲気をつくり出しておさまった。

終盤がいよいよ、野々村家の母・桂の活躍である。（関みさと）はまだ若いのだろうが71歳を演じて、変に年齢をつくらうとせず、はっきりと役割を自分のものにしていく。北見の意を受けて、幸恵と若い娘・あずさの仲を取り持つイタコぶりの様子も快調で魅力的でさえある。総じて、女優陣がいい演技を見せている。また、劇団として見れば、年輪を感じさせる縮まった舞台をつくり出している。

（9月23日 ピッコロ大ホール）

戯曲

茜色のとき

作 和田 澄子

(劇団未来)

大阪近郊 私鉄沿線の駅近く
7月下旬

登場人物

岡田 健太 一級建築士(34歳)

友子 看護婦 健太の妻(40歳)

邦夫 元電気工務店屋勤務

健太の父(70歳)

川内 洋子 無職 友子の妹(36歳)

はるか 高校3年生 洋子の娘(17歳)

佐伯 泉 高校3年生 はるかの友人

(17歳)

松浦 妙子 主婦 となりの主婦

リビングルーム兼仕事部屋。

部屋の中央にテーブルと椅子4脚。

上手はキッチン、その奥に風呂場と夫婦の部屋。

下手は玄関、二重扉になっている。

二階への階段。

西陽が入る窓、健太の仕事机、書架など。

窓は出窓になっていて、その棚の上にハムスターを入れたケージ。

置時計とか花瓶とかゴチャゴチャとした物が雑然と置いてある。

玄関とフロアには段差がない。

窓の外は駅へ通じる道路。

幕が開くと、自動車の止まる音、扉を閉める音。

車庫入れをしているらしい。

はるかがとびこんでくる。ハムスターのところへかけ寄る。

はるか リリー たいいま。リリー、

淋しかったやろ、ごめんな。

邦夫が入ってくる。部屋を眺め、軽い咳払い。

い。

はるか あ、遠慮せんと入って下さい。

邦夫 うん、ありがと。

はるか あ、靴、靴。

邦夫 え。

はるか (スリッパを揃えて) はい、どうぞ。

邦夫 すんません。(玄関とフロアを眺めて) へーえ、なるほど。案外広いねんな。(部屋を見まわして、帽子を脱ぐ) どこへ置いたら……。

はるか (受け取って) はい。(出窓のところへ)

邦夫 うちん中、涼しいなあ。

はるか リリーのために、この部屋だけクーラーつけていきました。(リリーのケージをテーブルの上に置く)

邦夫 へーえ、ゴールドデンハムスターやな。こいつはちょっと気の荒いやっちゃや。うっかりしたら噛みつくで。

はるか えーっ、おじいちゃん、知ってますのん?

邦夫 チーズも大好きやろ。

はるか ウソ。ひまわりの種、好きみたい。

邦夫 こいつは動物性蛋白質も食べるねん。

はるか 飼うたことあるんですか。

邦夫 ジャンガリアンハムスターをな。

はるか 動物好きなんや。お父さんといっしょや。

邦夫 健太が?

はるか シーツ。お母さんに内緒。お父さんはリリーの体育係、肥満防止のため。両手で餌もって食べるところがメッチャかわいいねえ。

邦夫 ラッコもそうやな。腹の上で貝割って……。

はるか そうそう。鳥羽の水族館、行って

よかったわ。おじいちゃんも?

邦夫 まあな。

2人、笑う。

はるか やったあ。

邦夫 健太やな。

はるか ちやう、お母さんや。ドジやから。邦夫 お母さんも運転するんか。

はるか 免許とりに行く時間がないから。お父さん車庫入れまだ馴れてませんねん。ドライブは初めて。

邦夫 車庫入れも出来へんくせに、ドライブ……。

はるか お父さん必死やもん。そうかて車の運転が出来らって、すっごいことやもん。世界がひろがるから。

邦夫 あ、そう。

友子が紙袋やバッグやはるかの帽子などを持って入ってくる。

友子 はるか、自分の荷物ぐらい持って入ったらどお! 英語の参考書なんかもっ

て行って重たいのに。どうせ旅行の間、勉強なんか出来へんのに。

はるか そうかて気になるもん。友子 ほらほら帽子も。はるか るっさいなあ、もう。友子 すんません、お父さん、疲れはったでしよ。お昼ごはん食べてからすっさと乗りっぱなしで……。

邦夫 いやいや、わしゃ元氣やから。(ちよつと軽く体操のようなことをする) 70やいうたかて、ほれ……。(顔をしかめて) ちよつと腰だけがな。

はるか (椅子をひいて) おじいちゃん、坐って。

友子 すっつと運転席の隣で緊張してはったからやわ。

邦夫 あんな車初めてや、普通の車よか大分高かったやろ。

友子 貯金カラにしてあとはローン。へへ。

邦夫 車になんか乗らんでもええのに、なんちゆうても車は危い。

友子 大丈夫ですよ。あの人、運動神経発達してるから。

はるか お母さん、私のお土産は?

はるか お母さん、私のお土産は?

はるか お母さん、私のお土産は?

友子 その水色の紙袋とちがうの。

健太が車椅子で入ってくる。

健太 オーライ、オーライでええ加減に言わんといて。奥に自転車あると思わへんかったがな。

友子 へへへ、忘れてた。

はるか も、ドジヤから2人とも。(健太が靴とスリッパをはきかえるのを手伝う)

友子 はるかが自転車出しといてくれたらよかつたんや。

はるか 私にふらんといてえな。(笑う)

健太 リリー、しっかり運動してたか。

友子 コーヒーでもいれてきます、お父さん。はるか、リリーそっちへやっといて。

健太とはるか、大げさに首をすくめ、両手をあげるジェスチュア。

友子 何やってんの、それ。

友子、キッチンへ。

のホテル、うちのお父さん向きに出来たでしよ。お母さんがパンフレット見つけて来て、これやこれや言うて私らを巻き添えにしたんや。

健太 そうや、仕掛け人はお母さんや。

三人、ちよつと笑う。

友子が出てくる。

友子 フィルター、もうなかった？お父さん。

邦夫 え？ フィルター？

友子 あ、ごめん、健太さん、コーヒーはあるけど、フィルターが……。

邦夫 あるはずや、まだ二・三枚残ってるはずや。

はるか お母さん、ちゃんと探しいな。

友子 ハムスター、そっちへやりなさい言うてるのに。

健太 なかつたらインスタントでええから。

友子 すぐにいれてきますよって、お父さん。

邦夫 え？ わし？ わしもう帰るさかい。

はるか お父さん、おじいちゃん、ラッコ気に入ったんやて。

健太 うん、あいつはかわいい、うん。(邦夫に) どや、うまいもんやろ、運転。

邦夫 ハラハラし通しや。初めてのドライブで伊勢の向うまでやなんて、無茶とちやうか。

健太 これで度胸ついたわ。スイスイや、なあはるか。

はるか おじいちゃん、運転席の隣で道路標識ばかり気にして、「もうちよつと行ったら右へ曲がれよ、あと何キロで鳥羽や」とか、助けてもろてたやんか。

健太 うるさいねんもう、いちいち。ちゃんと見てるちゆうのに。で、どやった旅行。

はるか ひろーい部屋で4人いっしょに寝たやん、なんか団体旅行みたいで面白かつたわ。前から行きたかつたんやバルケエスパーニヤ。友達みんな行つたんやてもほんとと東京のデイズニerlandへ行きたかつたけど、ま、しゃない。家計も苦しいしな、まけとくわ。

健太 まけてもろてえらいすまんのオ。(笑う)

友子 ちよつと大事な話がありますねん。

邦夫 え？(健太を見る)

健太 しらん。

友子 ちよつと、ちよつと待ってて下さいね。はるか、聞こえたん、ハムスター。

友子、キッチンへ。

はるか 健太、首すくめて、両手をひろげ、大げさなジェスチュア。

はるか リリーに八つ当たりや、かわいそうに。

邦夫 水ほしいのんとちがうか、リリー。

はるか ああそや、おじいちゃん、よう知つてはるねんよ、お父さん。うち、お友達に預かつただけで、何にもしらんかつた。

邦夫 ドッグフードも食べるねんで。

健太 へーえ、なんで知ってるのん。

邦夫 わしはなんでも知ってるんや。

はるか、ケージを出窓のところへ。水飲みをもつてキッチンへ。

邦夫 あの子、お前になついとるな。

はるか ほんととは感謝してるねん。うちのこと心配してくれたんやろ。

健太 (邦夫に) 英語のテストのことや、落ちこんでたんや。

邦夫 なんや、そうか。

はるか 落ちこんでないって。

邦夫 そういうことやつたんかないな、旅行。

健太 はるかのアホ、いらんこと言うなや。はるか なにが？

健太 ちがうって。だれかさんの古稀のお祝いの一泊旅行やで。はるかのためやつたら、東京のデイズニerland、ムリしたがな。70のじいさんのお祝いにデイズニerlandなんか連れて行つても、喜んでもらえるか？ 鳥羽の方やつたら、海は見えるし、魚はうまいし……。

邦夫 もうええ、もうええ。それでわざわざわしの駅まで迎えに来てくれて、恩に答せてるわけか。

健太 いやーな言い方する親父やなあ。(笑う) この家も見てほしかつたしな。こうでもせんと来てくれへんやろ。

はるか 2人ともハズレ。うち、ほんのこと知ってるもん。お父さんが運転の腕前ためしたかつたんや。その証拠に、あ

健太 うん、なんか、始めからや。

邦夫 案外うまいこといつてるねんな。

健太 なんとか。

邦夫 女の子やからかな。

健太 うーん、わからん。わからんときもある、女の子やからな。

邦夫 ほんで、話でなんや。

健太 さあ、大したことないねんやろ。それよか、この家とや。

邦夫 うん。玄関びつくりしたわ。靴のままあがりかけたわ。

健太 風呂やトイレも見てんか。昨夜泊つたホテルと同じや、それにキッチンもまあ見てんか。

邦夫 うん。

健太 エレベーター付けたかつたんやけどな、住宅用の。

邦夫 高いやろ、エレベーターなんか。

健太 それでな。

邦夫 そうか。

健太 階段の上は二階でございマアス。邦夫 見んでもわかる。

健太 エへへ、どや！
邦夫 わしや家なんかいらん思ってる。
健太 なんて？
邦夫 なんてでお前、あつてもしやあないがな。市営住宅で充分。
健太 負け惜しみ言うか。(笑う)

友子がコーヒーをいれてくる。
はるかも出てくる。

友子 すんませーん。インスタントで。はるか、その袋の中にクッキー入ってるから、出して。

はるか リリーに水やってから。

邦夫 クッキーも好きやで、ハムスター。

はるか ほんと！ どこ、どこ。(紙袋をガサガサと探す)

邦夫 わしやいらんで、ばあさん待ってるし、うちで。

健太 写真でも持って来たたらよかったのに。

邦夫 もう帰らんとあかん。

友子 そんなア。せっかく初めて来てくれはつたのに。今日は泊つてもらおうつもりです。

はるか あつたあ。(クッキーの箱をみつける) リリー、おいしいよ。ラッコのクッキー。

友子 はるか、おじいちゃんに。

はるか どうぞ。(箱をあけて、リリーにもやる)

邦夫 話で何や。わしにか？

友子 まあまあゆつくりと。

邦夫 しかし、よう建てられたなあ、こんだけの家。

友子 もちろんローンですけど、平気平気。

邦夫 ふうん。

友子 健太さんのお陰で建ちました。

健太 僕の年金、一級身体障害者の。

邦夫 ふうん。

健太 なんや、ふうん、ふうんて鼻で笑わんといてんか。電話でその話はしたやろ。

邦夫 そらまあ話はきいたけどな。

はるか おいしいラッコのクッキー！ おじいちゃん、食べて！

電話のベル。はるか、とる。

はるか はい、岡田です。

友子 病院から？

はるか (手をふる) あ、私、川内。今帰ったとこ。うん、うん、お土産買ってきたよ。キーホルダー。めちゃかわいいやつ。でも気に入るかな。うん、うん、すぐね。(電話を切る) 泉ちゃんや。

友子 よかった。何ともありませんように。
健太 この頃ちよいちよい無言電話がかかるとんや。

友子 だれから？
健太 はるか、お母さん、今からボケ始めたらないしよ。

はるか エ……。 (ちよつと緊張する)

友子 (笑う) あ、そうか。かしこいなあ、私。

邦夫 休みの日でも仕事の電話か？

健太 主任やからな。

友子 断りたかつたんですけどね、「当直外してあげる」って言われて、異例のことなんですよ。その代り救急病棟にまわされて、一番忙しいところ。ちようどはるかであれした頃で、朝お父さんと……いえ、健太さんと2人きりでは心配だね。
はるか (いらいらして) いつまでも子供扱いにせんといて！

友子 今でも毎朝、体操服がない、傘がないとさわいでるのに。

はるか お客さんの前で私の悪口ばかり言わんといて！

友子 むつかしい年頃ですわ、反抗期かな。

健太 男の子やったらもつとえらいこつちや。この頃危のうてかなわん。

友子 それがね、今度病棟婦長をやれと。

今の婦長さんが年内に退職しはるんですて。ほんとにえらいこつちやわ。

健太 へーえ、病棟婦長！ そらえらいこつちや。

邦夫 話で、それかいな。

友子 ま、そのことも関係してるんですけど……。

健太 そら引き受けんとしやあないで、そんな年齢になったんや。実はな、僕も仕事の方、本格的にやることになつてん。

邦夫 本格的に？

健太 ああ、会社へ出勤するねん。

邦夫 それで車買うたんか。危のうてわしやハラハラしてたわ。ブレーキちゆうたら、力入れてギューツと踏むもんやないか。それを指で押したくらいで急に止まれるか？ あんな車に乗って出て歩い

て、この上なんかあつたらどないするねん。せやからわしは家なんかいらん、ちゆうてるねん。

健太 僕が死ぬんかいな、事故おこして。それと家とどうい関係があるねん。

邦夫 ムリなことはするな、いうこつちや。

友子 私、やっぱり婦長のこと断りますわ。ムリですわ、自信ありません。

邦夫 なにもあんと関係ないがな、車の話やがな。あんな危いもん止めといてくれ。

健太 でも結構カーナビのかわりやつてくれてたやろ。

邦夫 なんやカーナビで。

はるか (笑う) なんかおかしいわ。お父さんとおじいちゃん、けんかばつかりしてる。

健太 そら親子やさかい。
はるか ええね。

健太 ええ？

はるか ううん。

友子 ごめん、私、車中で寝てばつかりで。

健太 なんもあんだがいちいちあやまることないやろ。

邦夫 話がややこしいていかんわ。

健太 怒るんやつたら僕に怒りいな。

邦夫 怒つてへんけどな。運動神経がええからいうておだてたりするから……。

はるか なんや、お母さんに怒つてるの。

友子 はるか、いいから。

はるか エ！ そうなん？

友子 だまってなさい。

健太 要するに車を買ったんは、僕のためや。それもこの家を建てたからよかつたんや。

邦夫 ああ、よかつたよかつた、わしや一生かかっても家一軒建てられへんかつたさかいな。

健太 また話をそこへもつていくか。

邦夫 親をバカにしてるんやろ、2人とも。わしかつてな、ずーつと電気の仕事一本で、配線工事かて器具の修理かてなんでもこいやつたんや。そら、友子さんの勤めてる病院とくらべたら、吹けば飛ぶような店やつたけど……。

健太 なにひがんでるの。

邦夫 仕事の腕には自信がある。

健太 わかつてるがな。

邦夫 わかつてへん、なんにも。

友子 はるか、もう二階へ行ってもええよ。

自分の荷物、片付けなさい。

健太 そやそや、大人の話なんかきいててもいやないで。

はるか うち、大人の心理何でもわかってるもん。

邦夫 はるかちゃんは今……はるかちゃんには関係のないことやで、な。

友子 はるか、ええから。昨日、洗濯物と

りいれたままやろ、畳んできて。二階暑いからクーラー入れなさいよ。

はるか わかってるやん、もう。

はるか、自分の荷物をもって、「フン」として二階へ。

健太 いったい何の話やった。

邦夫 あんた、話があるねんやろ。

友子 私の話はあつても……。

健太 家の話や。ま、設計はお手のもんや。

建築士の看板あげてるねんから。で、ちつこい工務店の建売住宅の設計やら、建築確認とるための書類やら、家で仕事をしてきたやろ。しゃけど、6年前にこの家を建てたときは普通の家の設計と違っ

やろ。

邦夫 建てる前はばあさんまだ元気やった。

健太 ちょっと待ってえな。しゃからすべ

て僕の車椅子の生活に合わせて、考えてやったんや。前住んでた文化住宅のときはいろいろほんまに不便やった。

ドンガラの大い男をかかえて、彼女に

どんだけ負担かけたか。

邦夫 ……(友子にちよつと頭を下げる。)

友子 ……(手を振る)

健太 なにやってるねん。

友子 なんもやってるないよ。

健太 腹立つなあ、ほんま、人が真剣に喋

ってるのに。

邦夫 お前もよう怒る男やなあ。

健太 ちがうやん!

邦夫 何がちがうねん。わしが「ふうん」

て言うただけでえらい怒つた癖に、何か

言うたらすぐに「ちがうやん!」何も言

われへんわ。

健太 ごめんごめん悪かった。あんな、親父もいずればヨボヨボになって、足ひき

ずつて歩くようになるやろ。家の中でし

きいに足ひつけてひっくり返るかもわ

からへん。外へ出たら歩道と車道の段差

につつまずいてひっくり返って怪我する

かもわからへん。

邦夫 ひっくり返つてはばかりか、わしが!

健太 違うやん。あ、ゴメン。あんな、み

んな年をとつたら、ちよつとずつ身体が

不便になるねん。

邦夫 わしらみてみ、こうや。(太極拳を

してみせる)

健太 はいはい、ご立派です。結論を言

います。今度新しい工務店さんが、老人や

ら僕らみたいな人の使いやすい家をねら

つて、シェアを開拓するというこ

にも出来たら現場へ来いということにな

つたんや。だから車がいる、ちゅうわけ

や。

邦夫 やつと家と車の話が接続したんか。

お前の話はほんまに手間がかかるわ。そ

ら、ええ話やがな。

健太 それみいな。ええ話やろ。なかなか

フアイトのあるオヤジさんでな、彼女の

患者さんやつてん。

がトントン拍子に進んでしもうて。

邦夫 ふうん、そういうことかいな……。

(ちよつと白ける)

玄関でチャイムの音。

友子 はい。(玄関へ) ああ、泉ちゃん、

入って、入って。

健太 おーい、はるか、お友達や。

泉 今日は。

はるか (二階で) はい。

友子 なんやお土産買ってきたらしいよ。

バルケエスパーニヤで。

泉 キーホルダーでしょ。

友子 そうそう。

泉 さっき電話で。フラメンコ、きれいや

つたでしょ。

友子 知ってるの、泉ちゃん。

泉 でも、ドイツニールンドの方がよっぽ

どデラックスです。

友子 なるほど……

はるか、降りてくる。

友子 はるか、ゴールデンハムスター返し

なさいよ、いい加減に。

はるか健太、顔を見合わせて、例のジェ

スチユア。

友子 お父さんまで、もう!

邦夫 エ?

はるか ゴールデンハムスターやなんて、

知ったかぶりして。(泉に) あがる?

私の部屋。

泉 いい、ここで、お客さんでしょ。ちよ

つときいてほしいことがあるの。

はるか泉、玄関の入ったところで話す。

友子、テーブルの方へ。

友子 今もめてるんですよ、病院で。若い

ナースが白衣なんかダサイって。ピンク

かブルーの制服にしてほしいって。うち

の病院おかれてるんですけどね。それで

制服委員会作って、またひとつ仕事が増

えて……。私、40にもなってピンクの制

服なんか、ねえ、どう思います? お父

さん。

邦夫 え? さあ……まあなあ……。

はるか パーイ。

泉、帰る。

友子、出てくる。エプロンをしている。

友子 泉ちゃん、帰らはったん。

はるか お母さん、明日バスケの試合見に行ってもいい？

友子 ええ？

はるか 午前中やねん、試合すんだらすぐ帰ってくるから。泉ちゃん、絶対行ってほしいって。

友子 あんた、泉ちゃんに強迫されてるの、とちがうやろね。

はるか 強迫？

友子 そうや。もしあんたがいじめに会うてるんなら、お母さん、身体はってでも戦うからね、正直に言うて。

はるか もうたまらんわ、泉ちゃんの彼が試合に出るから、いっしょに応援に行つて頼まれてん。隣のクラスの男の子や。

友子 あんた、高3やで、高3。夏休みやからいうて気い抜いとつたら、来年の受験どうなるの。看護婦になりたいの、よ。入試、なめてたらあかんよ。

はるか それやから嫌いやねん。「応援に行つたらあかん」ひと言ですむ話やないの。

友子 なら、おだやかーに言いましょ。この前の模擬テスト、英語の成績最悪やっただしよ。あと何カ月ある？

はるか またその話。この前メッチャ怒ったやんか。私自身が落ちこんでたのに追いつちかけて、ポロツカスに言われて、ドン底やったわ。

友子 せやからお母さん心配して、休暇とつて、鳥羽の方へなにしたんやないの。

お母さんはね、何が何でもあんたを……あんたが一人前の社会人になつてくれんと困るねん。

はるか お母さんのために行くのとちがう！ おじいちゃんのはるの時に、そんな大きな声で私の恥言わんといて。

健太、キッチンの方から出てくる。

健太 お母さん、そんなキイキイ言わんとさ。

友子 でも、明日バスケットボールの試合、応援に行くやなんて、泉ちゃんど。

邦夫と友子が出てくる。

友子 あの色どう思いはります？

邦夫 え？ ああ、やつぱりピンクの方が

ええのと違うかなあ？

友子 ピンク？

邦夫 看護婦さんの制服。

友子 お風呂のタイルの色。

邦夫 ああ、お風呂のタイルの色……何色やつたかな。

友子 ページニ。

邦夫 あれ、ええ色や。うん。たしかになにもかもよう出来る。わしももつと年寄りになつたらこういふ方が便利かもしれん。

友子 ね、よかつた。来てもらつて。

はるか さ、勉強しよう。

友子 あ、はるか、あんたもちよつとそこへ坐つて。お父さんもうぞ。

はるか せっかくその気になつたのに、もう……。

友子 だからね お父さん、ここで一緒に暮らしません？

邦夫 え！

友子 話というのはそのことですわね。

はるか そんなこと言うんやつたら旅行なんか行かんでもよかつたんや。

友子 あんた、何言つたん？ 旅行なんか？

健太 お母さん、おやじにキッチン説明してきて。

友子、ブイとキッチンの方へ。

健太 はるか。ハムスター返さへんかったん？

はるか あげるって。いらんやで、泉ちゃん。

健太 そうか！

2人、頭の上で輪を作る。

健太・はるか わっ！

友子、出てくる。

友子 なにやつてんの。

健太 (頭を掻いて) ワアアア。

友子 フィルター出て来たわ。

はるか (小さな声で) ドジ。

健太 そうか、困つたなあ。泉ちゃん、ハ

ムスターいらんのやで。

友子 しょうないねえ、ケージの掃除、ちゃんと責任もつてやつてね。(キッチンへ)

健太とはるか、首をすくめて例のジェスチュア。

健太 明日のこと、自分の頭で考えて判断しい。明日半日遊んだ方が英語の勉強に気合が入るのか。それとも明日から新しい気持ちで自分の心を引き締めていくのか。いちいちお母さんにきく必要はないやろ。きくからポロクソに言われるんとかやうか？

はるか まあな……。

健太 それに旅行は、お母さん財布の底はたいたんやで。

はるか わかつてるけど……。

健太 泉ちゃんは、高校卒業してからの進路どうするんや。

はるか フリーターやで。

健太 それもええなあ。はるかの目標は？ はるか もうわかつた、私から断る。お父さんの方がうまい。(リリーのところへ)

はるか 賛成！ 椅子が4つで、いつでも1つ余ってるの不自然やわ。

健太 おいおい。

友子 出来るだけ早く来て下さい。

健太 それはしかし、前もって僕に相談するべき問題とちがうか。

はるか 別にいいやん、おじいちゃんがいてはつたら、お母さんもちよつとぐらい遠慮して、私にポロクソに言うのん少のうなると思うけど。

健太 ま、それは言える。僕も仕事で留守にする日もあるし。お母さんも婦長になつたら忙しなるし。そらま、留守番がおつたら助かるなあ。

友子 2階にふた部屋作つたんは、いつかお父さんとお母さんに来てもらうつもりでなにしてたんやもん。ねえ、健太さん。

健太 はじめっからそのつもりで建てたんやけど、言い出すチャンスがなかったなあ。

邦夫 ちよつと待つてんか。さつきから聞いてたら、あんたらの都合はっかり並べて。わしの意見は全くきかんと勝手に決めるんかいな。

はるか ほんまや、いっつも一方的に決め

るんや、お母さんは。

健太 そやな、順序を間違えたかな。

友子 今さっきは2人も賛成してくれたやないの。はるかがおるとなんか話がややこしなる。やっぱり二階へ行ってはるか イヤ。

友子 まだ決めたわけやないんですよ。私はただ、お父さんにびっくりさせて喜んでからおかなと……。

健太 そらま、あれから1年経つし、いつまでも親父1人放っとくわけにはいかんし……。

友子 いったいどっちの味方やのん、健太さん。

邦夫 ちょっと待ってんか。あんたら2人ともわしのことバカにしてんのか。年寄りのノラ猫拾うように思うてんのか。ええ加減してくれ！

健太・友子 え！

邦夫 年寄りの一人暮らしに、「同居」というたら尻尾振つてとんでくると思うてるのんか。そら昨日、今日とな、海も見た、ええ空気も吸わしてもらた、家も見せてもらった、それぐらいのこと長年の仕打ちが帳消しになると思うてるのん

か。

友子 仕打ち、ですって？

邦夫 わしはな、毎日朝晩、仏壇のばあさんと話してきたんや。子供はなかったことにしようてな。こんな寄り合い世帯みたいなのこへ、わしが混じれるかいな。

健太 はるか、上へ行き。

友子 はるか。

はるか 勉強なんかしてられへんわ。

邦夫 すまんや、はるかちゃん。ちよつと大人だけの話やねん。

はるか、「フン」として二階へ。気まずい沈黙。

二階から音楽が聞こえる。

健太 寄り合い世帯やなんて、思春期の子供傷つくんやで。

邦夫 口がすべったんや。せやからあやまつたがな。

健太 仕打ちやて？僕らから親のことはずつと気にはしてたんやけどな……

邦夫 (急に感情が昂ぶってくる) もう、おそいわ。親のことが気になるというのやったら4年前に、なんかあってもよか

はないわい。

健太 僕にアテつけてるのんか。僕が車椅子の生活するようになってから建築士の資格をとりやで、細々とやけど仕事をやりやで、ほんで本格的に仕事をやろうという矢先にやで、そんなイヤ味ばかり並べて、情けないわ。

邦夫 お母さんが病気になる前は、だれのせいやと思ってるねん。

健太 胃癌になったんが、僕のせいかいな。

邦夫 あんたらが、ここに家を建てると決めたからや。そのストレスが原因や。

健太 せやから建てたらこちへ来てくれとやうてたやろ。

友子 もう止めて、止めて下さい。私がいらんこと言い出したからこんなことになってしもて。

健太 いいよ！お母さんの葬式以来やからな、こうして顔を合わせたんは。言いたいだけ言うてしまおや。

邦夫 帰らしてもらわ。わしもこんなこと言うつもりはなかったんや。家だけ見せてもろて、さっさと帰ったらよかつたんや。

健太 ほんまや、そうしたらよかつたんや。

つたんとちがうか、なんかあつても。

健太 4年前いうたら、ちよつとこの家を建てるときやな。

邦夫 そら、家二軒建てよ思たら、ガタガタと大変やつたやろ。そらこんだけの家やさかいな。せやけど、その年にはあさん、病気になるたんやで、わかつてるのか。

健太 わかつてる。そらすまんと思つてる。邦夫 同じ建てるんなら、もうちよつと考えてくれてよかつたんとちがうか。これ以上わしの口からは言わん。

友子 わかつた、わかりました。建てるんならもうちよつと両親の近くに建てるべきやつた、そういうことでしょう。

邦夫 えらい切り口上な言い方やな。

友子 いえ、べつに……。

健太 それも考えたんや、2人で。でも市内は土地の値段が高うて手が届かへんかつたんや。ほんで建てかけた時にまさかと思つてたお母さんが病気になるってしもうてどうしようもなかつたんや。

友子 建てるのんを1年おくらせたら……タイミングが悪かつたわ。ほんとに。

健太 せやからあの時、こちの病院に入

友子 健太さん！

邦夫 席を立てて脱いだ帽子をとりに行く。友子、その帽子を取り上げて、自分の頭に。

友子 お父さん、こんなままでは帰しません。もいっぺん坐つて下さい。家のことも、はるかのこともすべて私の都合に合わせて運んできた。そのことがずつと

腹の底にたまつてた、そうでしょう。

邦夫 わしや別にあんただけに怒つてるわけやないけどな。(席に坐る)

友子 でも許してはらへんでしょう、心の中では。私たちの結婚。(帽子を脱ぐ)

邦夫 いまさら許すも許さんもあらへんかな。

友子 喜んではらへんでしょう、私が6つも年上で、若いこの人を誘惑した、でしょ。

邦夫 うー。(つまつてしまふ)

友子 あの時私が31で、この人25でしたもん。知り合つた時はこの人が22歳で、私は28でしたもん。

邦夫 せやからわしや、危ないスポーツはするなとやうてたやろ。

健太 見てみ、耳にたこが出来たわ。冬山

は遭難する、スキーは骨折する、海は溺れる、海も山もあかんのならラグビーにするわ言うて、親の言うことはきいたつもりや。それが卒業寸前に正月の試合のとき、偶然のトラブルで怪我をして手術・入院や。だれが悪いのでもない、口惜しいけど、これが僕の運命やったんや。邦夫 お前が学校卒業したら、2人して電気工事店やるのがわしの夢やった。健太 僕は電気なんかやるつもりなかったよ。経済学部へ行ったんやから。邦夫 経済出たかてわしが教えるがな、電気のことば。

健太 勝手なこと言わんといてや。「パブルはじけて、電気工事店なんかやっても見込みないわ」って言うた時期があったやんか。邦夫 そんなことない、やったらやれる商売やったんや。せやから家建ててもしやあない、思うたんや。健太 またふり出しか。事故になって一番つらかったんは、この僕やで。邦夫 わかっている、わかっているけどな、病院からうちへもどってや、じつくりと親元で将来のこと考えてくれたら……と言

うこつちゃ。親には相談する値打ちもなかった、ちゆうことか。友子 病院から、すぐに私がひっぱり込んでした。ほんとにあの時ば2人とも夢中で……。

はるか、そつと階段のところへ降りてくる。

友子 はるか、大丈夫、平和的に話し合ってるから。

はるか、「フン」として二階へ。

友子 あ、そうや、コーヒーでもいれなおしませうか？

健太 いらんよ。

友子 でもフィルターが……。 (エプロンのポケットから出して見せる)

健太 いいってもう。(邦夫に) 僕がこういうことにならんか。 (邦夫に) 僕がこういうことにならんか。もうと親のところにいたかもしれん。こういうことになつたから、余計に親から自立したかったんや。そのためにこの人が必要だったんや。

邦夫 何が自立や、フン。一人息子が親を

見捨ててか。

友子 最初に私が勘違いをしたんですね。

この人の役に立って、喜んでもらえろと思つたんです。お父さんとお母さんに。

健太 いやいや、おふくろは僕一人の時を見計らつては、「いつまでこんな生活してるつもり？」とか……。

友子 ええ？ 前の家のときや家へ来てはつたん？ 狭い家の中ひっくり返つてるところ見やばつたん？ ショックやなあ、その話つて。

友子、イライラと歩きまわる。

邦夫 アホやな、お前は。何を言うねん、今頃になつて。

健太 はるかのことでも、おふくろは反対してたやんか。兄妹みたいな年で親子やなんて。親戚に恥かしいとか。

邦夫 お前はほんまのアホやな。ヨメはんの肩持つて、親をテキにまわす気か。友子さん、まあ坐り、坐りいな。

友子 坐つてられませぬ。邦夫 (友子のあとを追つて) あんたらな、あんたな、親の気持ちいもんがちよつ

ともわかつてへん。うちのんはな、友子さんの仕事もたいへんやろから、掃除やら洗濯やら手伝うてやりたかつたんや。それが、何ひとつ助けてくれとも言うてくれへんから、それが淋しいと泣いてたんや。

友子 そうやつたんですか。

邦夫 あんたにはな、親の心ちゅうもんが全然わかつたらなんだ。あんたはほんまに強情な人や。

友子 (椅子に坐る) 全くねえ。私、看護婦として恥かしいです。患者さんに接するとき、病氣のことだけやなしに、患者さんの生活のあり方についてよく理解して接しなさいって、若いナースたちに指導してるのに、自分のことになるとさっぱり。ほんとに、すんませんでした。

邦夫 (坐つて) そない立派に反省されてしもたら、あとが続かへんがな。

友子 私、両親に早うに死に別れたから……それで、私、夢やつたんです。親がいて、子供がいて、おじいちゃんとおばあちゃんかいて……そんな家庭に憧れてたんです。はるかかをそんな家庭で育ててやりたかつたんです。はるかのことにして

も……妹が高校卒業してすぐに結婚にと

びこんだんは、家庭のぬくもりを自分で作りたかつたんや思います。それで失敗してかわいそうやと思ひますけど……。

邦夫 みんなそれぞれになあ……。

友子 私ら3人の暮らしもやつと落ち着いてきて、健太さんの就職も決まつたし。

さあお父さんに来てからおう。そして力になつてからおうと単純に考えて、この旅行を計画したときから、ひとりでもウキしてたんです。でも今までのことを考えると、お父さんのおつしやる通り3人の暮らしのことを考えるのが精一杯でした。40にもなつて、甘ちゃんでした。

邦夫 40なんて、まだまだ子供や。

友子 私、ほんのことを言うつと結婚なんか出来へんと思つてました。なんちゅうのか、女として自信がゼロで……。でもこの人のお陰で仕事にハリが持てたんです。仕事にハリが持てたということは、生きることにハリが持てる、いうことなんです。

邦夫 その代りに、わしらハリを失うてもたんや。

健太 ちよつとタイム、もう限界や、頼む

わ。

友子 あ、今日はまたやつたね。

健太 昨日からや。

友子 お父さん、ちよつとゴメン。

邦夫 なんやねん、何事やねん。

健太 クソ掘り！

友子、車椅子を押して隣の部屋へ。

邦夫 え！

夫婦の部屋からテレビの音が聞こえる。はるか、洗濯物とM・Dを持って下りてくる。

健太の坐つてたあたりで、大げさに鼻をつまむ。邦夫も。

邦夫 お父さん、クソ掘りやて。はるか たまに便掘りしてもらわんと苦し

いみたい。

邦夫 そうか……。

はるか (M・Dを渡して) おじいちゃん、これ直してちょうだい。調子おかしいねん。邦夫 うーん、これか……これは無理やな、

ここのうのは。

はるか ムリやったらいいよ、ちよつと言
うてみただけ。

邦夫 おじいちゃんでもな、出来ることと、
出来へんことがあるんや。

はるか で、どうなったん、大人の話。

邦夫 うーん、わしや情けない。

はるか どうしたん。

邦夫 毒ばっかり吐いてしもた。(首をす
くめて、手をひろげる例のジエスチュア)

はるか おじいちゃん、カワイイ。

邦夫 ほんまかいな。

はるか お母さんのこと嫌い？

邦夫 嫌いとかいうことやなしに、……い
ろいろあってな。

はるか 今でも反対してる？

邦夫 はるかちゃん、さびしいか？

はるか べつに。

邦夫 そやな、そらそやな。

はるか お父さんとお母さん、別れさせん
といてね。

邦夫 なんてや。
はるか 私、お父さん必要やから。

邦夫 お父さん、好きか。

はるか 授業参観も運動会も来てくれてま

した。お母さん来られへんから、お父さ
んがずつと。

邦夫 お父さん、車椅子でもかまへんのん？

はるか 私が結婚するとき、パーキンロー
ド、お父さんといっしょに歩いてもらい
ます。

邦夫 彼氏いてるんか、もう。

はるか ないよ、そんなん。

邦夫 お母さん、ちよつとうるさい方どち
がうか？

はるか そう。

邦夫 ちよつとガミガミ言いすぎやなあ、
高校生やのに。

はるか そう。大人つて子供の欠点はメッ
チャ突つ込んでくるけど、自分の欠点は

全然わかってへんねん。

邦夫 わしのことか？

はるか 関係ない。お母さん、メツチャ突
つ張りすぎや。

邦夫 なにが……。

はるか すべて。何が何でも食事の仕度ぐ
らいやらんと主婦の資格がないねん、い
うて。しゃから私とお父さん、腹ペコで

も晩ごはん辛抱してるねん、どんなおそ
うなつても。

邦夫 そんなおそいんか、仕事。

はるか 早い日もあるけどね。その代り休
みの日は昼ぐらいまで寝だめしてる。お

父さん、「寝かしといたり、寝かしとい
たり」つて甘やかしてるねん。で、日曜

日の朝はお父さんがチャイハンとかサン
ドイッチとか作ってくれはるねん。

邦夫 そうかいな。

はるか お母さん、張り切りすぎやから困
るねん、お母さんも疲れるし、私に迫っ
てくるからしんどい。職業的にミスが許

されへんからやろうけど。でも家では結
構ドジなくせにね。

邦夫 それでもお母さんといっしょの職業
につきたい？

はるか お母さんの病院へ入院したことが
あります、盲腸切ったとき。白衣着たお

母さん、別の人かと思うた。

邦夫 自信あるか？ 受験。

はるか ちよつとヤバイ、英語。

邦夫 もし合格したら……お祝いに何がほ
しい？

はるか おじいちゃん、私のこと邪魔とち
やうん。

邦夫 え。

はるか わかっているもん。

邦夫 ほんな、おじいちゃんこそ、あんな
らの邪魔とちやうか。

はるか そんなことないもん。お父さんの

お父さんやから邪魔ちやいますやん。

邦夫 そうかなあ。はるかちゃんみたいなの
年の子が、こんな年寄りみたらうつつと

しいやろと思うけどなあ。

はるか そんなことないよ。なんて言うの
かなあ……。私の歩いていく先がお父さ
んとお母さんのとこまで、という感じが、

おじいちゃん見ると、もつともつと先
まで私の人生が続くんやなあ という安

心感というのかなあ。それに、おじいち
ちゃんもお酒のめへんしね。

邦夫 ちよつとぐらいいはのむよ、わしかて。

はるか アル中は嫌い。酔っぱらって、す
ぐ暴力やろ。

邦夫 そうやったんか、前のナニは……。

はるか おじいちゃん、一人でしょ、今、
一人なんてあかん、絶対に淋しい。死に

とうなる。家族は多い方がええねん。

邦夫 その年で……あんなも苦労人やな
あ。

はるか 二階見て。何とか暮らせる思いま

す。

邦夫 あんた、お母さん似やなあ。

はるか そうかな。早よ、行こ！

はるか、邦夫をひっぱり上げる。
しばらくして電話のベル。

友子(声) はるか、電話出てー。

はるか、下りてくる。

はるか ハイ、ハイ、岡田です。ハイ、私。

友子(声) 病院からかかっているのん？

はるか ちがう！ ハイ、ハイ、エーッ今
ちよつと……でも、でも……ア。(切れ
た)

はるか、泣きそうになっている。

邦夫、下りてくる。

はるか、リリーのケージのところへ。

邦夫 わりとええ部屋やけどなあ、床の間
もついでるし……でもひと間ではなあ、
いかにも開借りしてるよな感じやし……

荷物も多いしなあ。健太といっぺん二人

だけで相談してみんななあ

邦夫、健太の仕事机の上に置いてある図面
を見る。

はるか、動かない。

健太が出てくる。

健太 あー、スツとした。だからや、電
話。

はるか 私の知ってる人。

邦夫 あれやなあ、友子さんもようやっ
てくれるなあ。

健太 ウン、やっぱり腰の神経、マヒして
るから。あ、僕の仕事、見てくれた。次
の設計図や、明日届けることになつてる

ねん。パリアフリーも採用してな。

邦夫 (眼鏡を外して設計図を見ながら)
パリアフリーか。何とか仕事になつてる

ねんな。健太らのことも、何も知らんか
つたからな。

健太 さつきのこと、唐突すぎたかな。

邦夫 ま、仏壇のお母さんとも相談せん
らんしな。

健太 そらまそうや、僕らもな、やつとこ
こまできたんや、やつと。思うように身

体が動かんで、何回彼女に入つ当たりしたか、無茶苦茶やったわ。

邦夫 (深くうなずいて) うん。そうか。

健太 しかし勘違いせんといてや。同居いうても、タダはあかんて。

邦夫 わかつてるわい。わしは今、年金をな……。

チャイムの音。

はるか、ピクリとする。

健太 はい。どうぞ。

はるか、階段の途中まで逃げる。

松浦が入ってくる。

松浦 奥さん、いてはりますか？

健太 おーい、お隣りの松浦さんや。(松浦に) いつもどうも。

松浦 お客さん？

健太 僕の父です。

松浦と邦夫、会釈する。

邦夫と健太、話の続きをする。

友子が出てくる。

友子 あ、奥さん、昨日は留守にしてすんません。これ、あのお土産。

松浦 え！ 真珠なんかいらんと言ったのに。

友子 そう思うて、真珠マンジュウ。

松浦 ありがと、ありがと。昨日からずっと待ってたんよ。

友子 何かあったんですか。

松浦 私、ガンかもわからへん。どうしよう。

友子 どこが悪いの？

松浦 ノド。昨日近所のお医者はんへ行つたらノドに何かできてるって。

友子 ポリプって言いはったん？

松浦 そうそう、ポリプやて。

友子 大丈夫、歌いすぎとちがう？

松浦 そうそう、それも言いはった。ほんまに大丈夫？

友子 しばらくカラオケ休みはったら？

松浦 やっぱり！ ガクツ。うちのオートチャン不景気で残業なしになったから、早うに帰ってくるようになって、話のタネはないし、カサは高いし、というて粗大ゴミにだすわけにはいかんしね。

友子 2人でカラオケに行きはったら？

松浦 カラオケは昼間、パートがすんでから。(小声で) どうしたん、急にお父さん。

友子 (小声で) 同居しようかな、思うて。

松浦 ええっ！

友子 (割して) まだわからへんけどね、いろいろあつて。

松浦 (わざとらしく大きな声で) あー、安心した。たまにはつき合いなさいよ、カラオケ。

友子 ムリムリ。(指で輪を作つて) これがない。

松浦 回覧板もつてきたけど、大したことないから次へまわしとくわね。おいしそうな真珠、ありがと。

松浦、去る。

健太 ちよつと出てくるわ。

邦夫 わし、もう帰るから。

友子 そんな……まだ話が終わってないし……。

健太 ちよつと駅前でコーヒーでも……。

邦夫 2人だけで話があるし。

友子 そらまあ、その方が……でも、も

いっぺん帰つて下さいね。食事の仕度しときますから。

邦夫 氣イ使わんといて。とにかく、旅行ありがと。はるかちゃん、英語がんばりや。

2人、出て行く。

友子 はるか、何してんの、そんなところで

はるか 考えごと……。

友子 ムリかな、ムリかな、私の考えてることやっぱりムリかな。しかし、男があ

んだだけグチッぽいとはなあ。積年の恨みか……。すべて私が憎かった。いやいや

そうやない。そう思われてもいやあないところ

がたしかにある。ま、いいか。あ、洗濯もん、畳んでくれたん、ありがと。

考えごとって何よ。

はるか ママが来るて。

友子 エー

はるか ママがここへ。

友子 さっきの電話……それやったん？

はるか そう……。

友子 そんな、あんた、何しに今頃……な

んでもっと早うに言わへんかったん。旅

行の荷物片付けよ。何を言われるかわからへん、手伝うて！

チャイムの音。

友子 ええ！ もう？

2人、旅行の荷物を夫婦の部屋へ。

チャイムの音。立って続けに鳴る。

友子 やっぱり洋子や。

友子、扉を開ける。洋子が入ってくる。

友子 聞こえてるやないの。

洋子 昨日から何回も電話してるのにだあれも出てけえへん。いったいどうしてた

ん。

友子 旅行に行つてました。悪かったね。

洋子 へーえ、旅行！ えらいリッチやなあ。

友子 あんたこそ、びっくりするやないの。

洋子 はるかに何かあったんかしらん思うて心配で心配で。(フロアの方へ入つてくる) はるか、はるか。

はるか、動かない。

友子 ちよつと！ そこで靴脱いで。

洋子 へーえ、西洋人みたいに靴のままと思った。

友子 何にもわかってない、ほんまに。

洋子 (スリッパをはいて) はるか、ママやないの。

はるか わかつてる。

洋子 大きなたなあ、はるか。すっかり娘になったやないの。

はるか、洋子から遠のく。

友子 びっくりするやろ、大した病氣もせえへんし、学校もまともに行つてるし、まじめな子やからまたボーイフレンドも

いてへんみたいやねん。

はるか いらんこと言わんといて。恥やん、そんなこと。

洋子 へーえ、高3で、共学やのに彼氏もおらへんの！ 姉ちゃんがきついからやろ。

はるか べつに。興味ないもん。

洋子 スッピンやのにきれいな肌してるなあ。ちよつとほつべたさわらして。

はるか イヤ!

洋子 どしたん、はるか。こっちへお出で。姉ちゃんに遠慮してんのか?

はるか いちいちそんな風に言わんといて!

はるか、キッチンへ。

友子 あ、お茶でいいよ、お茶で。

洋子 (家を見まわして) なるほど、わかった。

友子 ムリして建てたんや。首まわらへん。ホラ、ホラ。(首を動かす)

洋子 何もお金貸してくれとは言わへんよ。今、健太さんとすれ違ったのに、氣

友子 健太さんはないでしょ。あんたよか年下でもお兄さんとよんでほしいわ。

洋子 はいはい。お兄さまといっしょに歩いてた人、お舅さんところがうの。

友子 ようわかったね。今ちよつと喫茶店へ行かはったんや。近いうちに同居することになるかもわからへん。

洋子 結婚、反対してはったのに?

友子 昨年、お姑さんが亡くならはったんや。

せえへんかった?

洋子 はるか、ちよつとこっちへ出ておいで。

はるか、何も持たずに出てくる。

はるか 今頃何しに来たん。うちはこのイ

友子 はるかもショックやないの。

洋子 わかっている。

友子 わかっている! 思い出してみ。はるか

友子 わかっている! 思い出してみ。はるか

友子 わかっている! 思い出してみ。はるか

友子 わかっている! 思い出してみ。はるか

友子 わかっている! 思い出してみ。はるか

友子 入学式には帰ってきてくれると信じて、はるか

友子 入学式には帰ってきてくれると信じて、はるか

洋子 そっらしいね。

友子 なんて知ってるの?

洋子 ええ!? (わざとらしく) 知らせてくれたらよかったのに。

友子 知らせるにも電話番号もわからへんし、心配してたんや。いったいどうしてたん、この6年間。

洋子 (切り口上で) ひと口では言えませ

友子 最初の電話番号のとおにおったんは一年ぐらいでしょ。それからあと「ただいまこの電話番号は……」や、「お調べになってもう一度おかけ直し下さい」や、どやって調べたらええのん。

洋子 えらい申し訳ございせんでした。

友子 うちの番号、なんで知ってるの?

洋子 エ。

友子 病院では教えへんはずや、知らん人に。

洋子 ……はるかに。

友子 はるかに?

洋子 はるかにには私の電話番号教えてあげる。

友子 ……そうやったん。

洋子 私が口止めしといたんや。

はるかど2人あんなの帰りを待ってたんや。そらま、中学校の制服はあんたが揃えて置いてたから、ちよつとは親らしい感情があったんやろ思うけど、「ママはすぐに帰ります」の置手紙を信じた子供

の気持ち、考えたことがあるんですか!

洋子 堪忍して、はるか。

友子 子供よか、男が大事やったんでしょ!

洋子 あの時こそそうやった。

はるか お母さん、もう言わんとき。この人には何を言うても無駄や。

友子 いや、言わせてもらいます。中学校の入学式のある日にひよこんと帰ってきて、「人生やり直すから、はるかを育てて」言うて、炬燵焼きのバイト先で知り合った男のあと追っかけて、九州の果てまで行ってしまった、そうやろ。

洋子 もう言わんといて。こうやってもどってきたんや。子供のことは1日も忘れてへんかった。(バッグから写真を取り出して) こうやって、毎日はるかの顔みてた。やっぱり返して、はるか。

友子 ちよつと待って。あの時、中学校に入学したこの子にきいた。「私のことお

友子 ちよつと待って。あの時、中学校に入学したこの子にきいた。「私のことお

友子 ちよつと待って。あの時、中学校に入学したこの子にきいた。「私のことお

友子 ちよつと待って。あの時、中学校に入学したこの子にきいた。「私のことお

友子 ちよつと待って。あの時、中学校に入学したこの子にきいた。「私のことお

友子 そうか……あんなやったんか……。

洋子 しよつちゅう電話で話してたわけやないけどね。いつも健太さんがいてはるし……でもこの家が出来たことは、はるかに聞いてた。

友子 はるか、ママの電話番号知ってたん。

はるか(声) こめーん、お母さん。

友子 それで、どしたんよ、急に。

洋子 姉さんにはお札を言わんとあかんわ。ほんまにありがと、ここまで大きいしてくれて。

友子 お礼やなんて照れ臭いわ。はるかが自然に大きくなっただけやけど。それで、あちはどうなってるの。

洋子 別れてきた。

友子 別れた? 彼ど?

洋子 奥さんに子供が出来らんよ。私が妊娠したときには「子供なんかいらん」言うた癖に。バカにしてる、あの男。

友子 マトモな男やないの。

洋子 姉さん、はるか返して!

キッチンで瀬戸物の割れる音。

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

友子 (キッチンをのぞいて) ケガは? ケガ

すると、あなたの年のころには想像もしてなかった。はるか心の奥深いところ覗いてみ、ママと同じことは絶対にやりませんと言いつ切る自信があるか！
(はるかをゆすぶる)

はるか ママなんか嫌いや！ ワーッ！
はるか、泣きながら二階へ。

友子 殺生やわ、子供に何ちゆうこと言うの。

洋子 でも本当のことや、子供は本音で育てんとあかんねん。

友子 私も本音で育ててる。あの子は看護婦になりたい言うてます。高3やで、高3、来年年明けたらすぐ受験や。この夏休み、最後の追い込みにかかっているです。

洋子 模擬テストの成績が悪かったいうて、あの子の能力も人格も抹殺するぐらい否定したんですよ。初めてやわ、泣いて電話がかかってきたんわ。私気が気なのなつて、男と別れてきたんや。やっぱり自分の娘は自分で育てんとあかん。姉ちゃんみたいな完璧主義で子供を枠の

中に閉じこめたら、はるかは爆発してしまふ。もう姉ちゃんにはまかしとかれへん。

友子 そんなこと……電話したんかいな、あの子。

洋子 姉ちゃんはな、しっかりしてるから働きのながら看護婦の資格とって、やさしい健太さんとめぐり合つて、立派に成功したわ。私みたいに下ジばかりやつてる人間のつらいとこ、全然わからへんねん。

友子 私はね、健太さんと2人、底が抜けたところから這いあがつてきたんや。ドジなんかやつてられへん。

洋子 私かて働いてきたわ。鹿児島でもいろいろやつてきた。でも運が悪いねん。姉ちゃんなんか、おじいさんとも同居して子供まで私からとりあげて、なにもかもすべて手に入れて、絵に描いたような幸福な家庭作つて、私のことは自業自得やと軽蔑してんのやろ。私なんか一人ぼつちや。全くの一人ぼつちや。

友子 ……でもね、はるかはあなたについて出ていかんと思うよ。電車やあるまいし、急に乗り換えが出来るかいな。はる

かなりを考えて、自分の人生にレールをひこうとしてるんや。

洋子 でもはるかは、私の籍に残ったままや。

友子 戸籍か……！

洋子 姉ちゃん卑怯や。看護婦という餌をつけてあの子をわがものにしようとしてるんや。

友子 そういう風にしか考えられん人に、はるかは返されへん。

洋子 返してくれへんなら、一人で生きててもしやあない。なにやるかわからへんよ！ あなたは昔から強かった。正しかった。でもエゴイストや！ 二階に向かつてはるか、はるか、ママ帰るからね。ええねんな。

二階の気配は動かない。

洋子、靴をはく。

友子 どこへ泊るの、今日。

洋子 放つていて。もう姉とは思えへんから。

友子 まず働くところを探さない。

洋子 私はまだまだ、子供ぐらい産めるん

や。今度こそいい結婚するからね。でも

はるかは必ず返してもらうから。

友子 好きなようにしたらいいわ。でも居所だけは知らせてね。2人だけの姉妹やから。

洋子、去る。

友子、しばらく呆然としているが、ハツとして。

友子 はるか、はるかちゃん、下りといで。

早よ、早よ、下りてきて！

はるか、下りてくる。

友子 ママ、追いかけてい。 (財布からお金を出して、はるかに握らせる) ママとよく話しておいで。駅前の喫茶店はあかんよ、駅の向う側へ行き。わかったね。

はるかだまってお金をつかんで、外へ飛び出す。

友子 はるかの籍を入れとくべきやった。

これは盲点やった……。どっちがエゴイストや、あのクソ妹め！

友子、お茶の道具を持ってキッチンへ。チャイムの音。

友子 なんて今日に限って次から次へと……。休暇とったバチが当たったんかな。

ハイ。

松浦が入ってくる。

松浦 さつきはありがと。これ、ぬか漬けのおなすときゅうり、ちようどええ塩梅よ。

友子 わあ、ありがと。こんなにたくさん。

松浦 それでお客さんは？

友子 うん？

松浦 お舅さん。

友子 今ちよつとうちの人と喫茶店。

松浦 ちようどよかった。あなたなんちゅうアホなこと考えてはるの。今でさえ競輪選手みたいに朝晩チャリンコ漕いで、病院まで走つてるのに、じいさんかかえてどうするつもり。

友子 (ほんやりと) どうなるんかなあ。

松浦 はるかちゃんのことも気がねせんならんのと違う？ あの子いさんに。

友子 はるかがねえ。(窓の外を見る)

松浦 ヤモメの爺さんひきとつたら、主人を2人もつぐらいややこしいんよ。

友子 うーん。さつき、グサツとくること言われてしもうた。と言うて、離れたままやと溝を埋めるチャンスはないし、親を捨てるほど薄情な人間にはなられへんし……。

松浦 悪いことは言わへんから、お舅さんに何かあったとき、あなたの病院で見つけたらどう？

友子 まあね。でもねえ、そうも割り切れんしねえ。

松浦 そのがあんたのええとこやけど、私は娘が2人とも、結婚して近くににいるから安心やけど、いらんこと言うてゴメン。

友子 ありがと、よう考えてみるわ。また相談のつてね。で、なに？ その回廊板。

松浦 あ、ハンコをね、ハンコ押ししてもらうの忘れてた。眼鏡がどこへ行つたかわからへんや。どこへ押すんやつたかな。

友子 (松浦の頭の上を指して) 何かのつ

てるけど。

松浦 えつ。こんなとこ！(笑う)

友子 (健太の机のひき出しからハンコを出して押す。回覧板をさっとみて) 狂犬病の予防接種と子宮癌の集団検診やね。すんません、お願いします。

松浦 ノドの方、気にかからんようになつたわ。看護婦さんがお隣りで心強いわ、何しろ歩く救急箱みたいやから、ほんならね。

松浦、去る。

友子 今夜は漬物でお茶漬けといくか。鳥羽で魚の干物も買ってきたし、助かった、助かった。

友子、キツチンへ。

エプロンを外して出てくる。
電話をする。

友子 あ、東病棟をお願いします。あ、私岡田です。山口さん？何か変わったことない？昨日新患2人入院？脳梗塞の疑いで？うん、うん、C、T、の結果

は？そう、ドクターの指示受けしたん

ね。津川先生なら大丈夫や。それで北原

さんの容態は？そう、血圧に気をつけて

てね。そう、安定してる。ご苦労さん。

2日も勝手にごめんね。お土産買って

きたからね、みんなに。うん、明日から

バシバシやるからね。(電話を切る)こ

れでよし！と。

友子、急に元気が萎える。

リリーのケージの傍へ。

友子 どう思う？リリー。はるかがおらんようになってたら、あのイヤこと言いの、文句たれのじいさんと何のための同居や、そうやろ。いまさらはるか返せるもんか。あの勝手もんの下妹め。どいつもこいつも、ほんまにもう！結婚なんかせんといたらよかった。はるかなんか預からんといたらよかった。看護婦だけやってたらよかったんや。あと一歩というところまで歩いてきたつもりやのに、こんな展開になるやなんて、もうご飯なんか作る気にならん、もうしらん。

邦夫がもどってくる。

友子 あ、お父さん、お帰りなさい。

邦夫 駅前ではるかちゃんに会うてな、はるかちゃん、ママと立ち話してた。ちよ

っと変りはったな、洋子さん。あんたらの結婚式で会うたきりやから、そら、年

とりはったんやろけど。遊びに来はった

んとちがうんか。

友子 いやもう、しょうがない妹ですわ。

入って下さいよ、ね。

邦夫 妹さん、泊めたげんといかんがな。

友子 いえいえ、泊まりませんよ、そんな。

邦夫 眼鏡、健太の机の上におかれてないか？

友子 あ、はいはい。(机の方へ)

邦夫 友子さん、あの車な、ちよつとぐら

いわしに助けさせてんか。いやいや、健

太は「うん」言つたから。

友子 でも……。

邦夫 親子やないか、あんたらと。

友子 (手を合わせて) 助かります、正直

なところ。お父さん、今夜はお茶漬けぐ

らいしかできませんけど、ま、もういつ

ぺん中へ入って下さいよ。

邦夫 いや、帰る。帰つてな、ばあさんに

報告せんといかんねん。あれはひがんで

たんや、淋しがってたんや、根性の悪い

人間やなかつたんやで。息子夫婦といっ

しよに暮らしたら、あれもどんなに……

(胸がつまる)

友子 ごめんなさい、お父さん。今まで私

らのことだけで精一杯で……。

邦夫 若いときはそんなもんや。健太のこ

と頼む。

友子 (眼鏡をよく拭いてから渡す) はい。

健太が帰ってくる。

健太 まだおったん。一人で帰れるな。

友子 なによ、その言い方。で、話は？

邦夫 わしはな、洗濯も料理も何でも出来る

ねん。あつちにはゲートボールの友達

や太極拳の友達もおるしな。荷物もよう

けあるし……。あんたらも、よう考えて

な。

健太 意地張るなよ。留守番してくれたら、

こつちも助かるし。隣の松浦さんもええ

人やし。

友子 そう、そう。松浦さんも、ご夫婦た

けで退屈なんですって。

邦夫 急にというわけにはいかんけどな、

あんたらが助かるちゆうなら……。

健太 それよか、振り込み、頼むで。

邦夫 わかつとるわい。(ポケッットを叩い

て) 車、気いつけてくれよ。ほな。

友子 お盆には行かせてもらいます。

邦夫 ああ。送つてもらわんで結構。暑い

なあ、外は。

邦夫、去る。
2人、見送る。

友子 お父さん、ごきげん直らしたった？

健太 とび上がるほど嬉しいのと違つか？

でもひと通りは恨みつらみを言いたかつ

たんやろ。そら心細かつたんや、一人で

友子 じゃ、来やはるわけやね、この家へ。

健太 うつとうしいぞ、じいさんが来たら

友子 それは言える、正直なところ。でも

ね、あの笑顔みたら、何とかやつていけ

そう。

健太 どうしたん、洋子さん……。

友子 はるか返せ、言うんよ。(胸がせ

まる)

健太 うーん。(絶句する)

友子 ね。ひどいものにも、こんな無茶な

話あると思う。

健太 ショックやなあ。

友子 はるかを一前前の看護婦にして、結

婚させて、孫もみて……それまでおじい

ちゃんも4人で家庭らしい家庭を作つて

……と思つてたのに。

健太 僕もはるかちゃんのお父さん、やら

せてもろてきたのになあ。

友子 でしょ。はるかは今が一番大事なと

きなんよ。看護婦つて、そらしんといよ。

夜勤はあるし、日曜、祝日も勤務がある

し、患者さんの家族に責められて、情け

ないこともあるよ。でもね、患者さんの

ために出来るだけのことをやつたと思え

たとき、その達成感がたまらんのよ。今

あの子を妹に返したら、あの子、学校へ

は行けんようになってしまふ。

健太 僕もそれが心配や。駅前で洋子さん

とちよつと立話したんやけど、「これか

ら仕事を探すて。今厳しいからな、世

の中。パートなんかでは、はるかちゃん

を進学させるのは無理やろ。

友子 でしょ、でしょ。はるかは返されへ

ん。絶対に返されへん。

健太 うーん。でもなあ。

友子 あんた、返す気？ 洋子は私の夢をぶちこわしに来たんや。洋子なんか許されへん。

健太 僕らの夢のために、はるかちやんを道具にするのはなあ。

友子 返すの？ 返すのあの子を。なんのためにこの6年間、苦勞したんよ。病氣のお姑さんほっといて、お父さんに恨まれて……。私の人生って、なんでこんなに……。(泣く)

健太 君が泣いたらおかしいよ。僕なんか一歩外へ出たらどんなに不便なことが多いか……。今まで何十遍と、あの一瞬の事故がなかったらと思う。この頃はその回数が減ったけど。

友子 健太さんが入院した頃、夜中に個室でうなされてる声を何度もきいたわ。当直の晩、深夜に病室の巡回に行ったんよ。そしたら健太さんの部屋の前で、火の玉がゆらめいてんのよ。こいつめ、この火の玉のせいでこの人がうなされてるんや、と思うと怖いよりも猛烈に腹が立つてね、よし、このバケモンと闘ってやる、コンニャロ！ と頭がカツとして、部屋

へ近づいたらその火の玉は……私のもつてた懐中電灯の灯りでした。

健太 なんや。(笑う)

友子 あの頃ちよつと怪談がはやつてたね。金しばりにあつたとか、空いた病室で水の音がするとか。おハライに行く看護婦さんもいたりしてね。

健太 会いたかったなあ、バケモンに。

夕陽が射しこんで健太の顔を染める。

友子 カーテン、ひきましょか。

健太 僕、夕陽が好きやねん。

友子 ねえ、きいてもいい？……。健太さんがだいたい復活してきた頃、リハビリ室で一人、夕陽を眺めて涙を流してたこと覚えてる？ 私ずつと前からききたかったんよ。

健太 うん、覚えてる。

友子 こんな若い青年が二度と自分の足で歩かれへんやなんて……なんて残酷なことやろと胸が締めつけられるようで、あんな顔から目が離されへんかった。よつぽど口惜しかったんでしょ。

健太 ちがうよ。

友子 じゃ、どうして？

健太 笑うかもわからへん、言うたら。

友子 笑うはずがないでしょう、言うて！

健太 あの頃、毎日のようにどうやって自殺しようかとそればかり考えてた。親にも申し訳ないし、自分の前途は真暗やし。リハビリやってもどうせ車椅子やし……。一人で考えこんでたとき、なんか部屋が明るうなってフツと外を見たら、茜色に空を染め上げながら、堂々とゆっくりと沈んでいく夕陽が目に入ったんや。じつと眺めてるうちに「生きてるって、なんと素晴らしいのや、歩けんでも僕は生きてるやないか」とドーンと胸の底から突きあげてきたんや。ほしたら周りで心配してくれてる顔、励ましてくれてる顔が迫ってきてな。そうや、あの夕陽みたいに最後まで堂々と生き切らんとあかんのや、思うと涙がポロポロポロこぼれてきてな。

友子 そうやったん！

健太 期待外れでした。(笑う)

友子 そうとは知らずに「あんたを一人にしておきません」って。

健太 びっくりしたよ。君の真剣な顔を見

て。

友子 私のことなんか、看護婦の中の一人

と思ってたんでしょ。

健太 違うよ。その前から君のたくましい足がまぶしかった。頼もしい足をして歩いてる人やな、と君の足に吸いよせられた。

友子 足に吸いよせられた、なんて失礼やな。この足のずーっと上に、この顔のつてたんよ。

健太 元氣そのもので、すごくきれいやった。

友子 なーんて、そんなことはないでしょ。

健太 結婚してから、もつともつと頼もしい人やということがわかりました。

友子 またまた、そんなこと。

健太 「僕は一人前の男になりたい。力を貸してほしい」って結婚申し込んで……。

君は「一生傍にいます」って。後悔して

る？

友子 すべてに満足。(2人鼻をくつつけ合う。笑う)あの日の茜色の夕陽に感謝！

健太 実は、その前に、君が泣いてるのを見てるんやで。

友子 うん？ どこで。

健太 やつぱりリハビリ室のペランダの隅

っこで。

友子 あー、思い出した。婦長にしばらくたんやつた。ある患者さんに、「私は死ぬんでしょ、死ぬんでしょ。嘘ついたら死んでも恨んでやる」って、毎日、毎日責められて、あの部屋を「拷問部屋」と言うてたんよ、看護婦たち。私とうとうたまりかねて、「人間はだれでも死ぬために生まれてきたんでしょ」って冷たく突き放してしまったんよ。婦長に二時間説教されて、「ああ、未熟者やなあ」と情けなくてね、あの時。

健太 あのたくましい足の看護婦さんが泣いてると思うと、僕が健康ならこの人を精神的に支えてあげられるのになと思うた。

友子 ほんと！ そうや、健太さんさえてくれたら、世の中全部がテキにまわっても、こわいもんはなし！

健太 へーえ、でも君は一人でも強いよ。

友子 そんなことはない。私、婦長になるのは怖い。あの時怒ってくれた婦長、看護婦みんなが信頼してるんよ。私のミスは徹底的に叱っても結局私らをかばっ

てくれたし、人の話をよく受け入れてく

れて、幅も奥行きも私とは全然出来が違う。どんな非常事態もテキバキと処置して、すんだら、「さあ、今夜はうちへ帰って、酒くらって、屁こいて寝よか」ってケロリンとしてはるの。お姑さんと二人で暮らしてはってね。どう考えても私はコモノや。自信ない。

健太 君は僕をかかえてここまで来たんやで。それだけでもナミの人よかすこい。僕でさえ会社へ出勤しようとかんばってるんやで。出来ませんとは言わんつもりや、身体のことや。

友子 まいったなあ……。

健太 同じやるんなら、喜んでやろや。その方が人生楽しいと思うよ。そして、あの日の夕陽みたいに、堂々と人生を終わるや、2人で。

友子 そう、そうやね。はるかのことと決心がついたわ。看護婦になるまでは、私らが育てる。それからあとは、彼女の選択にまかせる。洋子はなんというても、はるか親やから。

健太 もし、力不足で看護婦になれんども、彼女に合った生き方をしっかり身につけ

させてやる。人生なんて二枚腰や、「これだグメならあれがあるさ」や。この道しかないといひと挫折させる場合があるからな。

友子 私は一面的なんや、ええこと言うねえ、健太さんは。

健太 たまにはね。変やね、今日は。コーヒー2杯ぐらいで、興奮してるんかな。

友子 変なことない、変なことない。たまにはね、いい話をして、心を飛躍させないと、地べたにドターツと落ちたままやとなにもかもイヤになる。よしっ、婦長の仕事喜んで引き受けます。

健太 僕は、はるかちゃんに看護婦になってもいい。二枚腰とは言っても、最初から逃げ道があるなんて思わせずに、まっすぐ行かしてやる。英語、ちよつと僕もしこいてやるわ。厳しいぞ、嫌われてもいいから。

友子 そ、嫌われてもいいんや。洋子め、はるかを一人前にして返したげるから。

健太 あと、3、4年か。リリー、よかつたな、またお姉さんと遊べるぞ。

友子 ちよつと風が出てきたみたいよ。

「浮標」と丸山定夫

——リアリズム演劇のために

神谷 量平

私は御誌第22号(1972年12月発行)に「怒れる老人たち」というエッセーを寄せてから、ずつと御縁を亡くしているうちに多くの友人たちを失い、心ならずも生き残ってしまった古い演劇人の一人ですが、どうしても気になることがありますのでこの世の名残りに一言書かせていただきます。

私は毎年8月6日の朝8時に、目黒の不動前にある五百羅漢寺で行われる移動劇団「桜隊原爆殉難碑」の慰霊祭にここ10年ほとんど欠かさず詣でています。その動機は昭和15年の3月のある日、築地小劇場で見た新築地劇団公演の「浮標」(三好十郎作・八田元夫演出)における主人公久我五郎を演じた丸山定夫の鬼

友子、窓を開ける。

友子 あらら、ひまわりがぐったりしてる。松浦さん、水やり忘れてはったんや。

健太 リリーの餌、ちよつと横どりしてまいたら、こんなに大きくなったんや。リリー、明日から話し相手が留守になるから淋しいぞ。

友子 リリーと話をしたん?

健太 そらそうや。リリーかて話をしたがつてたよ。

友子 あ、はるかが帰ってくる。

健太 どんな表情してる?

友子 わからへん、夕陽を背負ってるから。

健太 そうか、ママとの話どうなったんやろ。

友子 うん……。ねえ健太さん、はるかの受験が終わったたら、あの車でつれてって。海でも山でもどこでもいいから、あの日のような茜色の夕陽を見に行きたい、みんな。

健太 よし、行こうきつと。

はるかが帰ってくる。扉の外で。

気迫る演技に、私のその後の新劇体験の一切があるからです。

日記もないのでそれが3月の何日は特定出来ませんが、今となってみると、今日何人が築地小劇場の芝居を見ていたかわかりませんが、その中で何人が生き残ってナマの丸山定夫の舞台に接したか不明で、さらに私のように日支変という侵略戦争の帰還兵が何人見たかということになるといっそう寥々として来ると思います。特に、東野栄治郎の扮した新兵教育担当の赤井伍長が初めて前線へと出動する前夜、文字通り「聖戦」へ赴く愛国の至情を述べるところでは、思わず「そんなんじゃないんだ、前線は集団強盗のようなものだ!」と大声を出したくなったことを今でも覚えてます。もちろん、三好十郎のことですからありふれた科白ではありません。その頃の知識階級の兵隊ですから大変複雑な役柄を、当時は本庄克二という芸名でしたが実に好演で、私は何とも言い難

はるか ただいま。

健太と友子、はるかの入ってくるのをみつける。

幕

上演についてのお問い合わせは左記へ

〒5380051

大阪市鶴見区諸口6-14-3

和田 澄子

い惻々とした気持で見たように記憶します。

既に70年も前の話をしてもほとんどわかってくださる人はもういませんけれども、今までに文学の世界でも全く手がついていない太平洋戦争前夜の、微妙な抵抗を秘めた三好十郎はどうしても戦後に続いていなければならぬのに、それが全く欠落して何とも思っていない現状ほど私は不思議な世界はないと考えます。ご本人の三好十郎すら「浮標」から「をさの音」「おりき」等の短篇を経て戦後の「その人を知らず」へ至る道程には、おどろくほどの断絶があるように思います。

それはちよつと薄っぺたい甘辛煎餅、もしくはチョコレートのような民主主義と引き替えに天皇制を護持したというところの終戦処理が原因で、私たちの高名な人らによる文化的総サボタージュが今日までどこからも告発されていないことに起因します。それは多分そのとき成人に

◆◆◆ 投◆稿 ◆◆◆



丸山定夫さん（岩波ブックレット『さくら隊8月6日——広島で被爆した若き新劇人たち』から転載）

達していなかった現在の指導的な人々にはわからないことなので、具体的にそれがなぜ「浮標」なのかを明らかにしたいと思います。
その前に今日の若い人たちは平和運動をしている人ですら太平洋戦争以前の中国侵略の歴史をほとんど知りませんが、例えばこの戯曲の時代設定は単に「現代」だけですが、書かれた昭和15年というのは満州事変から9年、日支事変から既に4年経っていて、中国における国共合作が

ちやうど明治維新の薩長連合の場合の幕府打倒のように、挙国日本軍の覆滅に統一されていきましたから、もう日本は二進も三進も行かないドン詰まりの状態でした。あとは太平洋戦争の賭けに出るしかないという「現代」です。私は結核に罹って中国戦線から帰されて1年ほど経っていました。年はちやうど五郎の妻美緒の弟利男と同年の26歳ですが侵略戦争の正体はすっかり見て来ていました。ですから時局に対するもう全く憤懣やる方ない思いを実は全く関係のない科白でも、丸山定夫はがんでんぶつけているのがよくわかりました。

ご承知のようにこの「浮標」は三好十郎が昭和8年に亡くなった操夫人に捧げた挽歌ですけれども、到底ひとりの亡き夫人に納まり切れないものが全篇に漲っていました。終幕の美緒の臨終の場面で五郎が万葉集を読むというくだりで私の胸に響いたことは、犬死でしかない戦友たち

の霊を置いてどうしても去りがたかった雨の戦線や帰国の朝の春霞のかった黄浦江で滂沱と涙を流した時点の身の上とだぶる思いでした。人によつてはこの個所で笑ったということも聞きましたし、「おおッ！」という叫びのようにも聞こえたと言いますけれども、戦後の上演ならいざ知らず、初演は押さえに押さえたいその上でふりしぼった声ややっとなるような、実に肺腑を刺すような発声であったと覚えています。その抑制は全篇にわたっていて、その年の8月に治安警察の要請で新協劇団とともに解散させられる劇団「新築地」とファッシュイズムとの暗黙な決闘をそれとなく示しているようでした。それこそ丸山定夫が「向う一年間の上演権を六百元（何と当時としては驚くべき大金でした）」で俺に売れ！」と三好に迫ったという、伝説的な惚れ込みから始まるそれが発端ではなかったかと思えます。まさに不世出の名優とその時代との格闘技で、あ

◆◆◆ 投◆稿 ◆◆◆

の千載一遇の名舞台になったということが出来ます。

それからもう60年が経ちました。生き残ってその思い出を述べられるのはまことに幸せなことだと思えますが、戦後私は丸山定夫を除く主なスタッフにほとんど会っていませんけれども、残念ながら語り合うことは一度もありませんでした。みんなその日その日に追われていて過去に眼を転ずる暇がなかったのですが、その結果として、歴史と人間が正当な演劇史としてつながらずに何となく演劇全体は肥大になっただけでも、内容としては実に空虚な積み重ねにしか過ぎなかったのではないかと慨嘆に耐えませんが、しかしそれは今のこと……

芝居が終わるととっぷりと日が暮れていて一人で有楽町まで茫然として帰って来ますと、ちやうど数寄屋橋の上で一陣の風が吹いて来て、アツという間に気に入っていた中古のヴォルサリノの中折れを持って行かれ

で、目の前で堀割川に呑まれて消え去るのを見ました。今も同じところに交番がありますが、何とかならぬいかと巡査と交渉してはみたけれども、結局船もなければ棒もありませんので諦めました。ふり返るとどうも一人尾行した人物がいるように思われて追及もそこそこに立ち去りましたが、その頃は観客まで監視されていて、確か何となく向うの懐ろに入っで見ようという気持で交番に飛び込んだと思います。

何年か前のテレビのコマーシャルで、「……母さん、あの谷底に落ちた僕の麦藁帽子はどこへ行ったのでしょうか？」というフレーズがありました。舞台技術の進歩で長足に何でも可能になって、絢爛豪華な演劇がもてはやされ、明るくて楽しい、美しく目を奪われるような舞台が日常化されると、かつてイデオロギイ過剰のせいでこれからは劇場に演劇をとり戻そうという運動が起こったように、今はまたその逆な要請が

必要になって来たのではないかと思えます。それは一体どこへ行行ってしまったのでしょうか。

そして今の日本の演劇はこれではないのでしょうか。確かに素晴らしい作家、有能な役者さんたちが大勢いますけれども、いろいろなアンケートで80%の人々が日本の将来に暗い回答しか寄せていない現状に対してはつきりとした処方箋を持っている人はいません。それでももう一人の恩人村山知義はその前途に全幅の期待をよせて「演劇運動万歳！」の声を墓石に刻んで世を去りました。それは多分いろいろと消長はあっても、正しい歴史は続いていなければならぬという信念や祈願であったらうと思えます。リアリズム演劇の発展もその基本を措いては考えられないと思うのであります。

(2000・9・14)

2000年9月15日から3日間、北見芸術文化ホールと端野町公民館グリーンホールを会場に、全道各地から16劇団196人が結集し、12劇団による9作品を上演しました。

また、北海道文化財団との共催により、「河童が語る舞台裏おもて」と題して妹尾河童さんによる200枚のイラストを使った記念講演会や北海道舞台北見大会の1プログラムとして、松岡義和名寄短大教授をコーディネーターとし、後藤陽吉氏(青年劇場)、石上慎氏(劇作家)、田中誠氏(端野町長)をパネラーとする演劇フォーラムも開催され、3日間の観客組織数が、3020人となりました。

「ハッカのまち演劇祭」盛況裡に終わる

実行委員会事務局長 布施 茂
(劇団河童)

上演作品は、創作劇が大多数を占め、全り演議長団の1人後藤陽吉さんは、「北海道の香りがする芝居が多かった」と評しています。

尾田浩道演集理事長は、「いままでの19回の演劇祭の中でも、創造面での収穫が大きな歴史の1ページを飾る演劇祭になった」と評価。

運営面では、当日の受付、ケータリング、物販、会場整理など地元でボランティアのサポーター80人を募り、スムーズな運営に当たりました。

以下のホームページで、3日間の様子の一端を味わえます。

URL: <http://k-min.t.okhotsk.or.jp/users/kappa/>

■上演作品一覧

	作品名	作	演出	脚色
劇団河童	当たり前の風景	石上 慎	扇谷國男	
劇団風の子北海道	マーレンと雨姫	シュトルム	鳴海輝雅	多田 徹
劇団海鳴り	鉄道員(ぼっぼや)	浅田次郎	神山 昭	山本忠利
劇団さっぽろ	やまんばのにしき	松谷みよ子	飯田信之	高坂 純
劇団新芸	小樽 運河 桜坂	渋谷健一	飯田信之	
劇団ねぎぼうず	郵便配達夫の恋	砂本 量 真柴あずき	川村一哉	
劇団湖(うみ)	冬の提灯・第3話 ~母を求めて~	渋谷健一	加藤 元	
劇団みずなら	ゴジラ	大橋泰彦	鈴木喜三夫	
札幌4劇団合同 (劇団シアターII 劇団新劇場 劇団にれ 劇団ベルソナ)	石川一座の旅 第5部 ~天もまた舞台~	渋谷健一	山根義昭	

◆◆ 投◆稿 ◆◆



演出の梅津(中央のメガネ)を囲んでの『ザ・ニッポン株式会社』のスタッフたち

若者たちのこと

劇団やまなみ 梅津幸三

7月23日、「ザ・ニッポン株式会社」の公演を終えた。河野通方君の創作劇である。いま書くのは、その作品のことではない。これを創り上げる4カ月に及ぶ、若者たちとの関わりのことである。

この公演に、男女8人の若者たちが参加してきた。子供のころちよつとやった、大学時代ちよつとかじつたという2人もいたが、ほとんど初めてといっている。体操、発声から始めて、脚本の分析、読み合わせ、立ち上げいこ、総げいこ、舞台げいこ、本番。ほとんど休まないののである。ごらんになった方はおわかりと思うが、今度のお芝居は、政治的状况や政治的な言葉がパンパン出てくる。「わからない!!」という若者たちとの格闘が始まった。社会的、政治的に無関心だと思われていたこの若者たちが、喰いついたのだ。実に熱心に、懸命に真実を知ろうとするのだ。私の話を目を光らせて聞くのだ。質問もどんどん出る。自分たちだけで、辞書を引っぱり出して勉強もしたという。けいこ時間の3分の1は、この話し合いに費した。

若者たちは、裏と表に分かれたが、思いいっばいの舞台を創った。私は反省しきりである。戦前、戦

中を生きてきて、斜に構えて、今の若者は……などとほやいている私たちへの痛烈な一撃である。いまの若者たちが、社会的に無関心で、無責任であるとするならば(それは子どもたちにも言えるのだが)、それは私たちの責任である。若者たちに語ろうとしない、語る手段をもたない、私たちが自身の問題なのだ:と。

私にとって、今度の公演は、若者たちに、希望を見い出した、強烈な体験であった。

住所が変わりました
劇団テアトルハカタ
〒810-0004
福岡市中央区渡辺通5-20-1
TEL 092-737-7685
FAX 092-737-7689
劇団火の鳥
〒420-0941
静岡市松富3-60-30 泉地方
TEL 054-273-0718
劇団自立の会
〒620-0016
大津市比叡平2-35-5
TEL/FAX 077-529-8057

第2回東・西リ演合同作家会議の報告

栗木 英章（劇団名芸）

東と西は各々（劇）作家会議を年に1回ペースで行い、自らの作品批評と交流会を行ってきているが、東・西合同として第2回目の作家会議

事務局を引き受けた関係もあり、私（栗木）が拙文にて報告させていた。

一、出席者は次の通り

こぼやしひろし・藤本昭（はぐるま）、佐藤逸平（埼玉）、小島真木（静芸）、柴野千栄雄（たけぶえ）、中村和光（RN）、布施佑一郎（からっかぜ）、鈴木正彦（個人）、伊藤豊子（はにわ）、島田たろう（個人会員―手続中）、磯谷誠（演集）、栗木英章・渡部将之（名芸）、加藤武夫・若葉正則（すがお）、栗原省（いこら）、楠本幸男（和歌山）、広島友好（演劇街）、猿渡公一（福岡現代劇場）、東川宗彦・清水巖・井上満寿夫（以西真中の地理にある身として

「ささの葉さらさら」（清水巖）
「風・夏冬」（楠本幸男）
「台本構成 佐藤逸平」
「地底の修羅」（佐藤逸平）
「銃口」（三浦綾子原作、島田たろう脚本）
なお、今回の秀作と評価高い「こうべ曼陀羅」は、西日本戯曲選集3「ドラマの森」に掲載された作品で、さらに同誌には楠本、井上、芳地氏の労作も同時掲載されて2200円で発売中なので、東・

て、問題提起者の芳地氏の計23人だが、当初岩淵達治氏を予定していたところ発病のため、急拠芳地氏に代行を頼み込み参加いただいた。

二、討論作品

「ヒロシマのマチエール」（広島友好）
「こうべ曼陀羅」

（清水巖）

「ささの葉さらさら」

（楠本幸男）

「風・夏冬」

（台本構成 佐藤逸平）

「地底の修羅」

（佐藤逸平）

「銃口」

（島田たろう脚本）

西の仲間にぜひ購入と一読をおすすめしたい。

三、各々の作品批評
100号記念戯曲集に掲載されている2作品については、本誌読者の中で読んでみえる方も多いと思われるので若干触れると――

「ヒロシマのマチエール」
記念誌の審査員に満票で選ばれた作品で、作者広島氏は最近劇作を生業とするプロとして踏み出された。

マチエール（美術における材料・題材）というやや乾いた響きのあるタイトルの割には、父と娘の二人芝居はしみじみとした味わいを醸し出す。余分なものを削ぎ落としたセリフのやりとりには氏の進境著しさが感じとれるものの、一方では技におぼれているのでは、という声も一部にあった。折鶴の少女からつけ



会議をおわって全員集合

た亡き母の名前さだ子。そしてその娘のゆり子は、山口県に住む胎内被爆された方の名前だそうだが、その二人に深く関わる絵の印象については少し浅い感じがする。

この絵を持ってゆり子は広島へ向かうところで終わるが、果たしてヒロシマでどう受けとめられたらどうか。小島さんはその後を見てみたいと希望されたが、同感の意を持つ者は少くない。

「風・夏冬」

故郷岩手の友、相沢氏の脚本を佐藤氏がA・B二つの話に台本構成されたものだが、このぶつ切れにした効果を疑問視する声に対して、氏はそれを覚悟の上で逆に岩手・北上の風土が滲み出てくるのであるという挑戦だと発言され

た。そここのところは上演舞台をぜひ拝見して確かめたいところだが、この作品の面白さは黙読より声を出して読むと味わえるとの意見が多く出された。不思議な趣を有したこの作品、舞台では二つの物語りがハーモニーを唱えて笑いの連続となるかも知れない。舞台評も期待したい。

「こうべ曼陀羅」

阪神大震災直後の病院を舞台にした作品で、今、テレビで人気のある「緊急救命室」のように多彩な人物がテンポよく描かれていく。「先生！この子、息してないんです」の緊迫したセリフで始まる巧さやそのスピード感から、作者を40代くらいの若さと想像する参加者も多かったが、実際は大正12年生まれの大ベテラン、そのかくしやくとした姿勢に小島さんはじめ、東のやや疲れ組は大いなる励まし

を受けた。

また劇中の高校生への描写について氏が謙虚に尋ねるのに対して、最年少参加の渡部君が自らのボランティア体験から「理解できる」と答えたやり取りの中に、東・西リ演のあるべき継承の一面を感じた。思い返せば私自身、「陽光」という作品を書いておそれるおそれる東リ演作家会議へ初出席したのが22歳のときで、その席上で黒沢さんやこばやしさん等に励ましと批評を受けたのが未長く書いていくことの原動力となった。

「ささの葉さらさら」

楠本氏も精力的に書いている西のホープだが、和歌山空襲55周年として、その記念の7月9日に栗原演出で本作品が上演されると言う。空襲直前の7つのオムニバスドラマが、終局までいってお客様にどう伝わるのだろうか。おそ

らく空襲体験者もだんだん数少なくなってきたいるだろうが、その人たちの率直な感想もと入れながら繰り返し上演して、風化への警鐘となることを期待したい。

「地底の修羅」と「銃口」

は、各々に改稿助言を求める作品でもあった。力量のある佐藤氏はじん肺訴訟の闘いに心を寄せてこの大作に向かっておられるが、芳地氏からはもうひとつ、第三者的視点を持つ登場人物を出すことで見やすさが出てくるのではないかと意見があり、また我々共通の課題でもある経営者側の類型的描写の克服も指摘があった。

島田氏は今年4月、「黄落」(佐江衆一・作)を脚色して名古屋演集で上演されたが、その後退団して劇作に打ち込みつつある。「銃口」は三浦綾子さんの大作で、それを全

般にわたって忠実に脚色しすぎているので、場と人物などを特定して練り直しを求める助言がされた。まじめな書き手の期待に十分応えられたとは言えないが、全体にほぼ6時間、作品討論に費した結果である。

四、芳地氏の問題提起と

まとめ

氏は小劇場演劇の、演出が多く、面白さを追求した何でもありの多作量産に比して、私たちの作品の特徴として、一、悪人が登場しない、二、登場人物が単純化されて、わかりやすく、同時に変化がない。三、セリフを通じての演技者へのアプローチが弱い等適確に指摘された。その上で現状の問題点として次のようなことを挙げられた。

(一)「演劇会議」誌上の報告で、「何人お客がきて良かった」という報告が多いが、そ

の先に、その奥に何があるのか。

(二) 全体に一番手の評価を手がかりとした二番手のレバを選びをしていないか。

(三) リアリズムを手法として考えてこなかったか。方法は何かあってもいいが、思想としてのリアリズムがあまりない、不透明；そして、まとめでも「総論としては、久しぶりにしっかりしたものに触れた気がするが、作品を個別にみていくと、素材やテーマ等を窮屈にとらえているように思う。逆説的に言って、形式から発想していくことも考えていいのではないか」と結ばれた。それは私たちへの問題提起であると同時に励ましと受けとめられる(不十分なまとめはお許しを)。

2日間の集中討議は疲れもしたし、あわただしくもあつたが、久しぶりに東・西の書き手が顔を合わせ、話し合い

と交流できた意義は大きいと思う。加えて20代2人の新人参加である。栗原氏の電話もあって、その2人に率直な感想を寄せてもらい、まとめたい。

とても面白く、楽しい

磯谷 誠(名古屋演集)

最初の挨拶と自己紹介の時、私は「今日はネタを拾いに来ました！」と言った、そしてそれは本音だった。私は30歳になったばかりだが、作品と呼べるものは少ししか書いたことがなかったし、周りには大先輩が大勢いたので「こりゃ、下手なこととは言えないな」と思ったからだ。

実際に会議が始まってみると、その時間はあっという間に過ぎていった。1作品につき1時間の討論をするのだが、これがとても面白い。楽しい。司会(議長?)が突然私に意見を求めてきた時は

「これはイジメだ」と思い(冗談です)、自分なりにそれぞれの作品についての感想を述べた。作家の目から見た作品に対する批評を聴く中に、私はもう何年も机の引出しにしまっている自分の作品をもう一度読んでみようと思った。破り捨ててしまいたくなるかも知れない。案外面白いかも知れない。とにかくもつとつと自分の書いた作品を真剣に見つめ直そうと思った。

今回、この会議に参加して、私は「ネタを拾う」どころか新しい自分をも発見することが出来たような気がする。

なんとなく自信が

渡部 将之(劇団名芸)

人が刺激を受ける時、成長する時、そこには必ず人と人との出会いがあると思う。だからか会うことにより影響を受け、だれかと話すことにより刺激をもらう……少なくとも

も自分は新しい人との出会いは、新しい自分の発見につながるかと考えている。

まずこのような会議に出席できたこと、それ自身が何かあやふやで実感のわかないものだった、目の前に座っている方々がどれほどすごい人なのか、どういった作品を書いているのかなども私は知らなかった。「なぜ私などがここにいるのだ」といった思いが頭の中を支配していたし、それを振り払えるほどの実績や自信は私には無いのだ……いまのところ。いまのところ断ったのは、この会議に参加して、なんと言うのか自信がついたのだ、自分の作品についてではない、大体3作品しか書いていない上になんとも拙いモノとくれば自信の持ちようがないではないか(書き上げたという自信はあるが)……元来、謙遜は日本人の美德とされるが、私はそうは考

えていない、誇れるものならば存分にアピールすれば良いと思っている、そんな考えの私がかこまで言うのだ、本当に私の作品は拙いモノなのは疑いがない。

……話がずれたので元に戻ろう、それでもついた自信とは、即ち「このまま続けていけるのならばものになるかもしれない」自信であり、「そういう位置に自分がいること」の自信である、会議の席でよく言われたことがある「若いね」「これからだね」……そう、私は若い、私はこれからだ、当たり前の事実かもしれないが、そのことを悟ったことは私にとって大きかった、なんでもやって見ようという考えが一番大事なのだ。

最後に、このような機会を与えてくれた劇団名芸の栗木英章氏に深い感謝……と私がこの道にはまった時の責任をとってらおうと企んでいる。

京芸創立50周年記念 レセプションひらかれる

栗原 省(劇団いこら)

拝啓、藤沢薫様。

「文珠九助」のご成功おめでとうございます。私は3日目の9月9日(土) 昼の部を拝見したのですが、いやあーとにもかくにも、会場のあの熱気にはドギモをぬかれました。そして観劇して10日たった今、いったいあの熱気、マグマのように噴出するエネルギーの正体はなんなのだろう、と考え込まざるを得ませんでした。

もちろんモギリから会場案内、お土産品売場まで、劇団員以上にもえにもえた地元「文珠九助の会」の皆さんのエネルギーをまず第一にあげなければなりません。

したいという訴えをきき、「よしそれならわしら伏見の町衆も京芸の公演を応援しよう。京芸を応援する活動と同時にわしら自身の手で伏見の町の文化を育て、町を活性化させよう」という趣旨で「文珠九助の会」を組織し、今年3月31日から足掛け6カ月間活動してきたそうです。「九助の会」はその間、西口克己と「義民文珠九助」について現地調査や「伏見義民の偉業を伝える文化フォーラム」を全国の「義民」顕彰会に呼びかけて開催したり、「かわら版」発行やインターネットホームページの開設やら、マスコミへの対応やらまことに多彩なとりくみを重ねて公演をむかえたものでした。



『文珠九助』の舞台

公演にむけて「観劇資料」をつくり観客にくばったのも「九助の会」の皆さんでした。藤沢さん。

私はこういう生き生きした「町衆」に取り囲まれ、支えられて芝居づくりをなさっている劇団京芸って、なんとしあわせな劇団だろうと羨ましく思います。

同時に、こういう熱い観客をつくって、地域の皆さんから創造のエネルギーや源泉をくみ上げながら芝居づくりをされている劇団京芸の姿勢

に、もつともつと学ばなければならぬと思いました。

* * *

ロビーで頬を上気させた若々しい岩田直二さんにお会いしました。70人ちかい出演者、それも藤沢さんや栗原久夫、波田久夫、谷ひろし、藤本文彦、早見栄子：：のような大ベテランから一般公募の全くの初心者までをまとめ、尾川原和雄さんの脚本を3回も4回も検討し、場面によっては加筆し、細かいダメ出しまで精力的にこなした全十三場の伏見



8月13日 創立50周年記念レセプション

の歴史を息もつかせず見せてくれた岩田さんのほとぼしる熱気が、私たちを感動にひきこんだ要因だったことは間違

いありません。

そして藤沢さん。

京芸50年を祝って、あるいは京芸50年にとよせて「文

珠九助」の舞台上に共演されたお寺の和尚さん(旧劇団員)やアノニムの菊川さん、人間座の岩田さん、音楽劇団「てんでこ」の河合さんや装置の板坂さん、古典座の入江さんなど数えきれない芝居仲間の人々のごとで、ない肩の入れようからも、舞台の厚みを感じ、演劇といういとなみの魔力に恐ろしささえ覚えました。

さて、藤沢さん。

肝心の「創立50周年記念レセプション」について書

く予定が、ついつい「文珠九助」公演の熱意について長々書いてしまいました。

もつとも京都駅前「ばるるぶらさ」ホテルで開かれた50周年記念の集いは、どちらかというと「文珠九助公演前夜祭」という色合いのレセプションでしたから。その延長線上にある本公演の雰囲気について触れるのもあながち的はずれではないと確信します。

一つの家系ならいざ知らず、いろいろな人間のよせ集まりであり、地位や金もうけに無縁な「劇団」という社会集団、芸術創造集団が、50年も続いた！ということ自体が歴史的事件です。

それが赤い帽子や赤いチャンチャンコ姿で、お祝いの席にふんぞりかえるところから「まるで今年生まれた劇団のようというういしく」1ヵ月後に公演する「文珠九助」について語り、決意をのべる集

会でしたから驚きでした。

* * *

もちろん、仲武司さんも語り、こぼやしひろしさん、後藤陽吉さんも祝辞され、参会の北島道誉(三郎)さんや岩田直二さん、宇津木秀甫さんなどOB会の皆さんも顔をみせ、50年を飾るにふさわしい盛会でした。劇団員の皆さん手作りの、劇団の歴史紹介のスライドもありました(それもまことに京芸らしい「無器用なくらいまじめな(ふじたあさや氏の表現)作品」。

結局、明日も生き、未来も生き生きと活動する劇団こそ、40周年、50周年を祝うに値する劇団なのだと痛感しました。

藤沢さん。

あなたの「もうすでに51年目の新しい歴史がはじまっている」という名言に、熱い拍手をおくらせてください。

2000年総会にあたって——
あらためて「地域に根ざす演劇」を

西会議

- 7月15日(土)～16日(日)
- 大阪新町ノースサイドホテル
- 27劇団中17劇団、29人
- 福岡現代劇場(猿渡公一)、あしぶえ(園山土筆・有田美由樹・中島洋子)、若者座(尼崎安秀)、月曜会(岩井史博)、こじか座(畑野稔)、四紀会(岸本敏朗・久語孝雄)、神戸ドラマ館ボレロ(三村省三)、京芸(藤沢薫、竹橋団)、関西芸術座(仲武司・小笠原町子・河東けい)、息吹(田中実・柳辺義彦)、きづがわ(山田一己)、劇団大阪(熊本一・清原正次)、未来(森本景文・和田澄子)、コロロ(四橋千代子)、演集和歌山(楠本幸男)、かすがい(樋口伸廣)、あり(宮倉義文)

尼崎 安秀(若者座)

「演劇会議」編集部(赤松比洋子・栗原省)

1. 藤沢議長選出

重要な案件が多く、運営委員会としてもぜひにというこ

2. 城谷護全リ演事務局長

あいさつ

劇団内の問題を解決していただく中、劇団は創造を中心に団結する必要があると強調される一方、「もし全リ演というものがなかったら劇団はどうなっていたかと思う時、全リ演があつて本当によかった」と話された時、身につまされる思いであつた。

3. 経過報告

(熊本事務局長)……(略)

4. 基調報告(仲武司議長)

西リ演結成38年、東西リ演が合同して19年目を迎え、69集団が参加している全リ演の歴史を総括され、「地域に根ざす演劇」を運動の一つの柱としてきたことにふれ、かつては和歌山の「いこら」の劇団と地域住民の触れ合いの中に、今日では「あしぶえ」のしいの実シアターの村民とともに歩む創造集団の活動や、東北の銀河ホールと「ぶどう座」の運動など学んでいかなければと話された。(全文は別項)



仲武司さん

また、「地域に根ざす演劇活動」については「演劇会議」89号(95年11月)22頁西会議

総会—参照

5. 各劇団報告

久しぶりに各劇団の近況報告が、1劇団5分と時間をかけて行われた。

〔報告の共通点〕

- ①長引く不況の影響で、職業劇団もアマチュア劇団も観客数が伸び悩み、財政的に大変な時期に来ている。
- ②若い人が入ってこないのに、劇団員の高齢化が進み、じり貧になっていく。

〔積極的な取り組みの特徴〕
○行政主導の文化活動の中心的存在として積極的に関わっていったこじか座

- 三つの試み—あしぶえ
 - ①子どもと先生料金は半額にし、他の料金体系を変更。
 - ②全稽古の公開。
 - ③劇団員によるアウト・リーチ活動「シアターボックス」の開催。
- 本当の意味で地域の支援が



得られるよう努力したい。
○第二稽古場を同一ビル内に借りて、積極的に運動を広げていく—劇団大阪

6. 「自治体の文化行政に

関するアンケート調査」あしぶえ園山さんより

7. 行事計画

まとめから集約すると
①自治体の文化施策への関心が高まっている中、地方文化の一つとして演劇が必要とされる時代となった。…行政

次回総会を、2001年8月24日～25日とし、8月25日～26日にゼミナールを開催することを決定。場所・内容等は、今後決めていく。

なお、ゼミナールの持ち方として、運営委員中心から、次世代委員でやれないかを求めていくことになった。

検討事項として「全日本リアリズム演劇会議」の、英語表記をどうするかということ、懸案として残された。

8. 運営委員の選出

36年間、全リ演の運動をリードされてこられた仲議長が、健康上の理由で身をひかれることになった。しかし、総会出席者全員一致で顧問として、今後も必要な時、出席いただけることとなった。長い間、ご苦労さまでした。

その他の議長団・事務局・運営劇団委員は全員留任。今後1年をかけて、将来へ向けての議長団体制を具体化していくことが決められた。

熱心な討議が行われ、有意義な2日間であった。

2000年総会にあたって

西会議議長 仲 武司

1962年西日本リアリズム演劇会議が13劇団によって結成されて38年になる。また、1981年東西リ演が合同し、全リ演として再発足して今年で19年目を迎え、現在東西合わせて69集団が参加している。

西リ演結成は、当時、安保闘争以降の革新陣営内の亀裂と運動の停滞が政治不信や混乱を生み、民主主義的諸運動に危機感が生じたことが背景にあった。それまで私たちは劇団が各々創造的な特性を持ちながら、民衆を基盤にした演劇行動を旗印に活動を続けてきた。だが経済はもろろん、行政、文化、情報のほとんどが東京中心の中央集権的な状況にあり、安保闘争以降の状

況とともに劇団はいかにあるべきかを問われる時期でもあった。

私たちは反中央、反権威、民衆のための演劇と、いささか抽象的ではあったが、当時の状況に切り込むといった気迫もあり、新劇の伝統を学び、リアリズム演劇の志向、創造と普及の経験交流、創造的力量を高めよう運動を目指した。この時、諸井条次氏の「叙事と抒情の統一」、岩田直二氏の「変革を視点としたリアリズム」が創造の原点として提唱されたのはきわめて刺激的であった。

60年代後半の一時期、西リ演運動内部に持ち込まれた教条的な政治論が運動に暗い影を落とした。だが、これらの

反省から1970年初め、劇団はいかに主体的であるべきか、そして、創造の土壌とも言える「地域に根ざす」という問題が提起された。

以来、国や自治体もまた地域文化、地方の時代を宣伝し、日本全国の都市間が驚くほど近くなるにつれあらゆる情報は瞬時にして全国を駆けめぐり、小都市に至るまで見事なホールが建ち、まさに地方文化の到来と喧騒された。だがその実体の多くは稼働率25%にも満たず、地域住民の文化的要求とは無関係にソフトを求め、呼び屋を通じて穴埋め興行に奔走する例も多かった。

一方、アンチ新劇から始まった小劇場運動は観劇の手軽さや形式様式ともに若者層の時々感性に同化し、ひとつの時代をつくった。現在はひところの盛況を失ったと言え依然として若者を引きつけ、

一部演劇ジャーナリズム、評論家もそれらを追認している。集団自体の盛衰も激しく、浮草のような演劇浮浪者を生み出している。その中から「静かな演劇」と、かつての劇作派のなもの、風俗的な作品も現われてはいるが、今後、どのようにになっていくのか、先は見えてこない。

豊かな物質文明と
先の見えない不安

衆知のように、戦後日本の資本主義は他国の戦争や武力衝突により漁夫の利よろしく息を吹き返し、やがて高度な生産技術や能力によって世界屈指の経済成長を上げてきた。さらに、大企業の利潤追求は職場の合理化、より安価なコストダウンを求め、国内外での取奪を強め、産業構造の空洞化がすすんでいる。だが、こうした高度に発展した

資本主義がやがて経済の歪みやバブルとなって現われ、国の政策によってその矛盾は拡大され、今日の不況と不安な社会状況を生んでいる。

一方、ありあまる物質に囲まれ、物質万能と使い捨ての世情は日常化した物欲と拝金思想になり、それらが満たされぬところから慢性的な飢餓感を伴い、精神の荒廃となつて現われている。特に次代を担う若者たちに広がる無力感と逼塞状況はかつて我々が経験しなかった、何が起きても不思議でない世相を生んでいる。昨年の統計によると15歳から24歳の失業率は、不況のため企業の新規採用が抑えられ、9・1%（フリーターは含まず）と10年前の2倍に達している。先の総選挙後の6月末政府発表「労働白書」では、若者層の就業意識の変化に焦点を当て、先の見通しのない利根的な離・退職はもは

や若者本人の問題だけでなく、技術や技能の蓄積の上で今後の社会的損失であると、初めてその深刻さの一片を報じた。

現在150万人といわれるフリーターは厳しい就職事情に加え、「正社員として仕事につく気がしない」「やりたいたいことが形にならない」「本当のことが見つかるまで」「などと仕事に対する具体的なイメージの欠如、目的意識の希薄化が影を落としている。あるいは甘い構造もあるう

が、多くの若者は未来への展望がなく、日々利根的な欲望を求め、孤立している姿が浮き彫りされている。不況やリストラによる失業、中小企業の倒産などの社会不安と、片や荒廃する精神は人間性そのものの危機的な状況とも言える。「またも17歳」に代表される若者と著しく氾濫する大社会の殺伐たる事件は、

こうした社会背景と無関係のはずはなく、まさに病める社会の象徴であろう。

人間の讃歌を共感
しうる舞台創造

今、私たちはこうした世情を避けて通ることはできないし、その中で劇団はどうあるべきか、全リ演は何をなすべきか、各々その存在をかけて論議を交わし、課題を明らかにし、明日への道筋を探っていくかねばならない。

いうまでもなく、今日の社会的な諸悪の元凶は国の政治のあり方にあるが、これと対峙して国民の民主主義的諸要求の運動がある。だが、少なくとも未来の展望が持たず社会不安の中で生きる人の多くが、癒しという流行語に現れているように、今日、文化・芸術の果たす役割の重要さは言うまでもない。私たちは演

劇を通じ、人間の生きる証を、勇気を、可能性を、人間の讃歌を共感しうる舞台創造こそが、何よりも命題であることに間違いない。

私たちは、その一つとして「地域に根ざす演劇」を運動の柱としてきた。かつては和歌山の「いこら」の劇団と地域住民の触れ合いのなかに、顔の見える観客と、等身大の劇団の実態にふれ、またこの数年「あしぶえ」のしいの実シアターの村民とともに歩む創造集団を実感している。これらは小さな町村など特有のものもあるが、単なる条件や形態ではなく「いこら」の紀ノ国民話の創作活動や、「あしぶえ」の舞台創造のように創造の成果と関係してはじめてその本質に迫れる問題である。

昨年も報告したが、カナダのトロント北西150kmにあるトウモロコシと牧場によつ

て生活する人口9000人のブライス村が文字通り地域に根ざす演劇の典型的な活動の記録を思い出す。その主催者であり、作家、演出家のジェームス・ロイスが大学演劇科を卒業後ブライス村に帰り、村の公民館を借りて演劇を始めるが、当初、村民の関心も全く見られなかった中で、村民とその日常生活を中心とした創作劇を重ね、劇場がやがて村民にとってなくてはならない、舞台を楽しむ社交場になり、ギャラリー、民芸品、手芸、アーチストの集会場ともなっていく。その原動力になっっているのはジェームス夫妻であり、彼らを中心とした創作活動とのことで、今では年間4〜6編の戯曲が生まれているようである。さらに

シーズンごとの観客は近郊からも集まり4万人に達し、シーズンオフには200km半径から観劇ツアーや子ども演

劇教室が始められている。また、いわゆる都会の有名俳優も8月は暇だからと安いギャラで出演を申し入れ、トロントからも泊まりがけで参加するともいう。

私たちはこうした海外の劇団の活動とともに「あしぶえ」の活動や、東北の銀河ホールと「ぶどう座」の関係など考え合わせて学んでいかなければならない。都市における劇団でも稽古場公演や劇場公演においても、地域の住民との接点を求めた活動も多く試みられている。いづれにしても、これらの成果が次の創造にどのように跳ね返ってくるか。劇団が地域住民の生きる姿を創造の土壌として自覚的にとらえているか。このあたりの論議の積み重ねが大切であり、全リ演の運動がこれの保障となりえているか。リアリズム論議もまたこの延長線上に見えてくるものであろう。

強固な創造主体が構築できるかどうか

これまでも全リ演内部で作品化、舞台化された優れた戯曲や舞台は、単なる戯曲や舞台の完成度の評価だけでなく、作者や劇団の姿勢、視点、地域住民や周辺の人々の生きざまを通じ、その心情をとらえ芸術的に昇華されたことで人々の琴線にふれたものである。これらがさらに全日本、世界的普遍性への広がりにもなるのであろう。

今日、一見して目まぐるしく変わる世情は、多くの流行商品の氾濫と物資の使い捨ての日常のなかで、物事の価値観の多様性、主体性の欠如した不可思議な日本語の氾濫、変わり身の早さやあわたししいテンポなど、人間の思考を浅薄にし、理性や論理の積み重ねをさまたげている。こう

した表面的な現象に私たちは右往左往する必要はあるまい。強いて言えば、価値観の多様性といわれるものが一種逃げ口上であり、果して本物の価値観として存在しているのか、問い返してみる必要もある。

「青年劇場」ニュースで九州演鑑連の活動に触れた記事があった。今日、演劇を観ることに厳しい社会状況があるが、これは単に鑑賞行事ではなく、「運動」としてとらえ「さらに「何のために演鑑連の活動をするのか」という基本理念を持ち、会の生まれた本来の意味を考えれば「会員拡大のためのみに有名スターや演出の作品を取り扱う傾向に」注意を喚起している。「なんのため」という一見「遠回りにも思える原点が重要」で、人気取りや会員の気楽さから「入会金の免除などは人を信じない思想」である。鑑賞運

動が日本の演劇の「民主的発展を、劇団とともに支える」という認識で連帯の論理を実行していく」という。今、様々な困難が鑑賞団体にもおいかぶさり、全国的な会員減少の傾向にあるなかで、九州演鑑連は着実に会員を増やしていると報告されている。私たちにとって特に奇抜なアイデアがあるわけではなく、運動の原則的な理念を堅持している姿に感動すら覚える。

私たちは演劇のディレクターとどどまっていけないだろうか。圧倒的なまでの悪しき状況、条件の中で私たちは人間のあり方を舞台に託し、観客の共感を求める努力をしている。確かに私たち劇団やその集合体である全リ演の存在は小さい。奔流のように荒れ狂う世情やまがいのものの中での活動・運動は、あたかも一見ゲリラのような一石であるかも知れない。今日言うところ

の地域における文化コミューンやパブリックシアターの構築に至る道筋には極めて困難さがつきまとう。だからこそ私たちは運動の原点を確認しながら、それが発揮できる強固な創造主体が構築できるかどうかにかかっているといっても過言ではない。昨年の総会でも5年先10年先がどう見通しているのか若干の意見交換があった。劇団の長期展望どころか1年、2年先のことすら見えないという実感も多い。だが、私たちが取り巻く状況や条件は、決して自然発生的に変わるものではない。演劇に課せられた課題を、劇団そのものの存在を、自問しながら、新たな創造を切り開いていく以外に生きる道はないのである。

前総会で創作劇の重要さにふれた。前記の地域に根ざす論も、自前の創造的な舞台に

よって、初めて花咲くのである。全リ演西会議周辺でも「演劇会議」別冊や「ドラマの森」No.3で注目すべき戯曲が掲載されている。また、創立50周年で劇団京芸が地元の伏見義民の「文珠九助」戯曲が生まれた。もちろん戯曲の創作は時には集団創作もあるが、あくまで作家個人の孤獨な闘いではある。だが、集団とのかかわりもまた重要な要素である。本総会で作家と劇団の創造的な関係もぜひ運動の柱として深めたいものである。活発な論議を期待している。

仲武司議長が体調を崩されて全リ演議長を退任されるにあたって今後の全リ演運動への思いを込めて総会に寄せられたものです。
(編集部)

劇団潮流 40周年記念パーティー

阿部 好一

大阪の劇団潮流がことし創立40周年を迎え、その記念パーティーが7月22日夜、大阪厚生年金会館で開かれた。



会場には関西各地や東京から約140人の演劇人がかけつけ、不惑を迎えた劇団の長い歩みを祝い、その健在ぶりを讃えた。

潮流は、戦前から演劇活動をしてきた大岡欽治氏が60年5月、大岡演劇研究会として創立、67年12月、劇団に改組した。大岡さんは思想の堅固さと同時にふところの深い人で、日本の古典芸能から現実の生活を反映した創作劇、さらに海外の有名作品まで、幅広く取り上げてきた。この方針は、92年9月大岡さんが亡くなったあとも、愛弟子だった藤本栄治・現代表に引き継がれたが、とくに藤本代表になってからは水上勉、吉永仁郎、葛山耿介、かたおかしら



う、木村玩氏らの本邦初演戯曲がふえたのが目立つ。演目の上でも劇団としてのオリジナリティを発揮しはじめたと見えるだろう。そういう潮流の成立過程から見ても、記念パーティーで挨拶に立った岩田直二氏（関西芸術座）をはじめ多くの来賓が大岡さんの業績に触れたのは当然だが、一方、最近の潮流がいよいよ若々しさを発揮しているのも特筆しておきたい。

パーティーでは40年の歩みと全劇団員をビデオで紹介した。劇団員はいま25人。念のため大岡さんを直接知ってい

る団員は何人いるのか聞いてみたら「もう9人だけです」ということだった。過半数が大岡さんの没後に入団した若い人たちなのである。時の流れの早さに驚くばかりだが、若い世代のふえたことが潮流の若々しさの一因であるとも言えよう。また、いわゆるセンター公演だけでなく、全国各地で精力的に繰り広げている学校公演も、若い俳優とスタッフに恵まれたからこそできた事業である。

パーティーでは俳優全員が40周年公演にちなんで島崎藤村の詩を朗読、藤本代表が参会者にお礼の挨拶を述べた。この1ヵ月余りのちの9月1、2日、大阪厚生年金会館・芸術ホールで劇団創立40周年記念の第59回公演「乱れて熱き吾身には——藤村「春」」(作・吉永仁郎、演出・藤本)が行われて、記念の事業を無事に終えた。

編集後記

☆編集事務体制が西から東に移りました。従って発行所も京浜協同劇団内に。これからも協力くださることをお願いいたします。

☆なによりも力強いのはシイムの石田章さんの協力です。今後とも石田さんと話し合い、よりよい「雑誌」にしていく所存。

☆総頁数の関係上「デジタル劇団員入門(その2)」「(仙台小劇場・石垣政裕)、文化行政に関するアンケート(四紀会・梶武史)、アイルランド紀行(すがお・若葉正則)」等は次号にまわさせていただきます。(境野)

☆1962年の西リ演(その後東西合同で全リ演)結成当時から事務局長のちに議長として37年間全リ演をリードしてこられた仲武司

議長が今年7月の総会を機に引退された。本号に掲載した西会議総会の議案に、仲氏の情熱が込められている。ぜひ一読を。(城谷)

〔原稿の送付について〕

・次号(4月号)の締切は2月20日です。戯曲などは作品ができたとき、劇評なども各劇団で依頼して上演が終わり次第送ってください。

早川 昭二
〒174-0064
東京都板橋区中台1-1-4
劇団銅鑼 内
TEL 03-3937-1101
FAX 03-3937-1103

栗原 省
〒643-0111
和歌山県有田郡吉備町庄684-32
TEL 0737-52-5963
FAX 0737-52-6099

境野 修次
〒272-0136
千葉県市川市新浜1-23-5-103
TEL&FAX 047-356-7217

赤松比洋子
〒663-8141
兵庫県西宮市高須町1-1-11-859
TEL&FAX 0798-45-3307

①戯曲は、早川昭二編集長または、栗原省へ。
②劇団通信および舞台写真は、〒547-10027
大阪市平野区喜連5-1-45
(株)シイム内「演劇会議」
編集部 担当者 石田章
TEL 06(6707) 3833
TEL 06(6707) 3833
FAX 06(6799) 3833
③それ以外の原稿は、
東会議は東京連絡所
境野 修次
西会議は大阪連絡所
赤松比洋子

演劇会議 104号 2000年11月11日発行 定価 700円(送料240円)

編集長 早川昭二
編集委員 境野修次 石垣政裕 山崎三郎 栗原 省 赤松比洋子 楠本幸男
発行所 〒211-0052 神奈川県川崎市幸区古市場2-109 京浜協同劇団
TEL/044-511-4951 FAX/044-533-6694

誌代振込先(郵便振替)口座番号00200-4-78639
全日本リアリズム演劇会議事務局(〒211-0025 神奈川県川崎市幸区古市場2-109 京浜協同劇団・城谷護)